

# 山代郷北新造院跡

史跡出雲国山代郷遺跡群北新造院跡(来美廃寺)  
発掘調査報告書

2007年3月

島根県教育委員会

## 序

島根県教育委員会では、「出雲地域の文化遺産を活用した古代文化の郷づくり事業」の一環として、平成11年度から県立八雲立つ風土記の丘地内に所在する遺跡の調査・整備を進めているところです。

八雲立つ風土記の丘地内に所在する山代郷北新造院跡は、天平5年（733年）に編纂された『出雲国風土記』の山代郷の条に記述のある古代の寺院の跡で、地元の豪族日置君目烈によって建立されたことが知られています。また、平成8年度から13年度にかけて実施された発掘調査で、金堂を中心的に直線的に3つの基壇が並ぶ特徴的な伽藍配置や、全国でも極めて珍しい三尊仏の設置痕が発見され、平成14年に国の史跡に指定されています。

島根県教育委員会では、平成16年度から山代郷北新造院跡の保存と活用を図るための整備事業を進めており、平成17・18年度には整備の基礎となる情報を得るために発掘調査を実施しました。

今回の調査では、金堂以外の3つの基壇の詳しい内容や、塔跡で全国でも珍しい石製相輪の石材や小型の風鐸が出土するなど、貴重な成果を得ることができました。本書は以上の成果をまとめたものです。

調査にあたり、御協力いただきました地元関係各位、並びに懇切な御指導を賜りました整備検討委員はじめとする先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

島根県教育委員会

教育長 藤原義光

## 例　　言

1. 本書は平成17～18(2005～2006)年度に島根県教育委員会が国庫補助を得て実施した、山代郷北新造院跡整備事業に伴う発掘調査の報告書である。本書に掲載した遺跡の所在地は、下記の通りである。

史跡出雲国山代郷遺跡群北新造院跡（米美廃寺）　松江市矢田町米留美511-1外

2. 調査は、本遺跡の重要性を鑑み、史跡整備のための基礎資料を得る目的で実施した。

3. 調査組織は以下の通りである。

(平成17年度)

事務局　山根正巳（文化財課長）、祖田浩志（同文化財グループリーダー）、丹羽野裕（同主幹）  
原田敏照（同文化財保護主事）、東森　晋（同文化財保護主事）

調査員　林　健亮（埋蔵文化財調査センター調査第1グループ主幹）、勝部悠美（同調査補助員）  
(平成18年度)

事務局　山根正巳（文化財課長）、黒崎寿政（同文化財グループリーダー）、丹羽野裕（同主幹）  
勝部智明（同文化財保護主任）、東森　晋（同文化財保護主任）

調査員　林　健亮（埋蔵文化財調査センター調査第1グループ主幹）

整備検討委員会

蓮岡法暉（県文化財保護審議会委員）、森　郁夫（帝塚山大学教授）、大日方克己（島根大学教授）、清水重敦（奈良文化財研究所研究員）、井上正志（島根大学助教授）、柴田　久美子（松江市図書館ネットワーク整備検討委員）、田中良一（松江市立大庭公民館長：平成18年3月まで）、松本雅子（松江市立大庭公民館長：平成18年4月から）

指導助言　文化庁、平澤　毅（文化庁文化財調査官）

4. 調査や整理に際し下記の方々、機関から指導及び協力を得た

井上寛司（大阪工業大学教授）、大橋康夫（島根大学教授）、大脇　潔（近畿大学教授）、佐藤　信（東京大学大学院教授）、清野孝之（文化庁文化財調査官）、永井　泰（米待ストーンミュージアム館長）、中村唯史（島根県立三瓶自然館主任学芸員）、花谷　浩（出雲市文化財課学芸調整官）、原田憲二郎（奈良市教育委員会）、菱田哲朗（京都府立大学教授）、町田　章（県文化財保護審議会会长）、三宅博士（東出雲町教育委員会）、松江市教育委員会、大庭公民館、米留美自治区、島根県古代文化センター、島根県立八雲立つ風上記の丘

5. 本書に掲載した図面は各調査員の他、間野大丞（調査第1G文化財保護主任）、是田　敦（同）、寺本和明（同調査補助員）、人見麻生（同）、池田恵理（同）、上山直志（同）、油利　崇（同）、が作成した。また、本書に掲載した写真は林健亮が撮影した。

6. 接図の方位・座標は、過去の調査成果との整合性を確保するため、日本測地系（旧測地系）の第Ⅲ座標系X軸方向を指す。

7. 本書は、第1章の一部を東森晋が、他を林健亮が執筆した。本書の編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て林健亮が行った。

8. 本書に掲載した出土遺物、実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。



## 目 次

第1章 調査にいたる経緯と調査の経過.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の経過.....	2
3. 整理の経過.....	3
第2章 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	5
第1節 地理的環境.....	5
第2節 歴史的環境.....	5
第3章 調査の成果.....	10
第1節 調査の概要.....	10
第2節 調査の方法.....	11
第3節 遺構について.....	11
第4節 遺物について.....	18
第4章 考 察.....	30
第1節 瓦について.....	30
第2節 第3基壇出土の相輪関係遺物.....	33
第3節 伽藍配置と整備の過程.....	34
第4節 総括.....	37

## 表 目 次

第1表 調査区名と調査年度.....	2
第2表 出土遺物観察表.....	74
第3表 第2基壇 軒丸瓦・軒平瓦（軒丸瓦V類・軒平瓦IV類を除く）.....	89
第4表 第3基壇 軒丸瓦・軒平瓦（軒丸瓦V類・軒平瓦IV類を除く）.....	89
第5表 平成17・18年度出土丸瓦.....	90
第6表 平成17・18年度出土平瓦.....	92
第7表 第1基壇平瓦.....	97
第8表 第3基壇平瓦.....	97
第9表 第1基壇丸瓦.....	98
第10表 第3基壇丸瓦.....	98
第11表 基壇・建物の規模.....	99
第12表 右製相輪出土遺跡.....	99

## 挿 図 目 次

第1図 史跡山代郷北新造院跡の位置.....	1
第2図 山代郷北新造院跡の位置と周辺の遺跡.....	6
第3図 山代郷北新造院跡採取石礎実測図.....	7
第4図 山代郷北新造院跡調査区配置図.....	38
第5図 第1・3基壇遺物取り上げグリッド図.....	39
第6図 第1基壇遺構実測図.....	40
第7図 17-1Tr 下層遺物出土状況 .....	41
第8図 17-8Tr 実測図 .....	41
第9図 18-4Tr 援体塙関係遺構実測図 .....	41

第10図	第1基壇土層堆積状況	42
第11図	第3基壇構造配置図	43
第12図	第3基壇相輪関係遺物出土状況	44
第13図	第3基壇土層堆積状況	45
第14図	第4基壇実測図	46
第15図	参道推定地実測図	47
第16図	第1・3基壇出土須恵器・土師器実測図	48
第17図	第1基壇出土土器実測図	49
第18図	第1基壇出土石製品実測図	49
第19図	第3基壇出土石製相輪実測図(1)	50
第20図	第3基壇出土石製相輪実測図(2)	51
第21図	第3基壇出土風鈴実測図	52
第22図	第3基壇出土蓮弁状銅製品実測図	53
第23図	第1・3基壇出土鉄製品実測図	54
第24図	第3基壇出土鉄・銅製品実測図	55
第25図	第1・3基壇出土軒丸瓦実測図(1)	56
第26図	第1・3基壇出土軒丸瓦実測図(2)	57
第27図	第1・3基壇出土軒平瓦実測図(1)	58
第28図	第1・3基壇出土軒平瓦実測図(2)	59
第29図	第1・3基壇出土軒丸瓦実測図(3)	60
第30図	第1・3基壇出土軒平瓦・隅切り瓦実測図	60
第31図	第1・3基壇出土丸瓦実測図(1)	61
第32図	第1・3基壇出土丸瓦実測図(2)	62
第33図	第1・3基壇出土丸瓦実測図(3)	63
第34図	第1・3基壇出土平瓦実測図(1)	63
第35図	第1・3基壇出土平瓦実測図(2)	64
第36図	第1・3基壇出土平瓦実測図(3)	65
第37図	第1・3基壇出土平瓦実測図(4)	66
第38図	第1・3基壇出土平瓦実測図(5)	67
第39図	第1・3基壇出土平瓦実測図(6)	68
第40図	第1・3基壇出土平瓦実測図(7)	69
第41図	山戸瓦・熨斗瓦・鬼瓦・鰐尾実測図	70
第42図	第2基壇実測図	71
第43図	東塔相輪・金堂鰐尾復元想像図	72
第44図	山陰系鰐尾・上淀庵寺式軒丸瓦・頬面施文軒平瓦出土地	73
第45図	北新造院跡II・Ⅲ類軒平瓦・V類軒丸瓦関係遺跡位置図	73

## 図版目次

- 図版1 平成18年度調査前近景 第3基壇から西を見る  
平成18年度調査前近景 第2基壇から東を見る
- 図版2 援体壕付近調査前近景(東から)  
17-1Tr 西壁
- 図版3 17-1Tr 完掘状況(南から)  
17-1Tr SK01検出状況(北から)
- 図版4 SK01 石材取り上げ後の状況(西から)  
18-1Tr 完掘状況(北西から)
- 図版5 18-1Tr 北拡張部(南から)  
18-1Tr 北東四天柱(?)礎石根石(西から)
- 図版6 18-2Tr(東から)

- 18-2Tr(南から)  
図版7 17-1Tr SD01付近  
SD01 (南から)  
SD02 (南から)  
図版8 17-1Tr SK04 (北から)  
SK06・SD01 (北から)  
17-1Tr 完掘状況 (東から)  
図版9 18-3Tr 援体壕土層堆積状況 (南東から)  
18-3Tr 近景 (北東から)  
図版10 18-4Tr 遺物出土状況 (北から)  
18-3Tr 南半部完掘状況 (北から)  
図版11 18-3Tr 2・3号風鐸出土状況  
18-3Tr P2半截状況 (東から)  
図版12 17-4Tr 完掘状況 (西から)  
17-8Tr 完掘状況 (南東から)  
図版13 17-2Tr SD03 (南から)  
17-5-6Tr 完掘状況 (西から)  
図版14 第1・3基壇出土須恵器・土師器  
図版15 第1基壇出土十石器  
図版16 第1基壇出土十石製品  
図版17 第3基壇出土石製轡輪関係遺物、天蓋  
図版18 第3基壇出土石製轡輪  
図版19 第3基壇出土石製轡輪  
図版20 第3基壇出土石製轡輪  
図版21 第3基壇出土石製擦管  
図版22 第3基壇出土石製擦管  
図版23 第3基壇出土石製伏鉢  
図版24 第3基壇出土風鐸  
図版25 第3基壇出土風鐸・蓮弁状銅製品  
図版26 第3基壇出土蓮弁状銅製品  
第1・3基壇出土鉄・銅製品  
図版27 第1・3基壇出土軒丸瓦  
図版28 第1・3基壇出土軒平瓦  
図版29 第1・3基壇出土軒丸瓦、軒平瓦、隅切り瓦  
図版30 第1・3基壇出土丸瓦  
図版31 第1・3基壇出土丸瓦・平瓦  
図版32 第1・3基壇出土平瓦  
図版33 第1・3基壇出土平瓦  
図版34 第1・3基壇出土平瓦  
図版35 第1・3基壇出土平瓦  
図版36 第1・3基壇出土平瓦  
図版37 第1・3基壇出土平瓦  
面戸瓦・熨斗瓦・鬼瓦・鷲尾  
図版38 鷲尾  
第1・3基壇出土軒丸瓦  
山代郷北新造院跡採取石錠  
18-3Tr出土鍛冶津  
援体壕出土鉛玉  
援体壕出土弾丸



# 第1章 調査にいたる経緯と調査の経過

## 1. 調査に至る経緯

山代郷北新造院跡は、島根県東部の松江市南郊に広がる「島根県立八雲立つ風土記の丘」（以下「風土記の丘」という）地内の一角に位置している。風土記の丘は、意宇平野を中心とした東西5km×南北3kmの範囲を地内として、出雲国分寺跡、大草古墳群、岡田山古墳等の代表的な史跡の整備を行って昭和47年9月にオープンし、その後も島根県と松江市が整備・活用を進めてきた。また、島根県教育委員会ではその整備事業の一環として、地内に存在する重要遺跡の保存活用を図るために、文化庁の国庫補助を受けて発掘調査を継続して行ってきた。

山代郷北新造院跡は、古くから基壇跡や礎石の抜き取り痕、瓦類の散布が知られており、来美庵寺と呼ばれていた。昭和12年に後藤蔵四郎によって、「出雲國風土記」記載の日置君目烈建立の「山代郷新造院」に比定<sup>(註1)</sup>されて以来、来美庵寺を同新造院跡と考える説が有力になった。

遺跡は、山林に所在するため、旧陸軍による援体壕建設の他は、大規模な開発を免れてきた。しかし、昭和50年代になると市道隣接部分の造成工事により遺跡下段の平坦面が大きく掘削され、近年にはこの地域の宅地化がさらに進む等、山代郷北新造院跡にも開発が及ぶ恐れが出てきた。このような情勢により、山代郷北新造院跡の保存・活用のための基礎資料を得ることが急務となった。しかし、遺跡は以前から2～3段の平坦面が存在することが知られていたが、わずかに部分的な測量図が公表<sup>(註2)</sup>されたのみで、広域な地形測量や発掘調査は行われておらず、伽藍配置や寺域、創建年代や廃絶時期については不明だった。

島根県教育委員会では、以上の状況を考慮し、平成8～13年度までの6年にわたり、八雲立つ風土記の丘整備事業の一環として、山代郷北新造院跡の保存・活用を図るための発掘調査を実施した<sup>(註3)</sup>。その結果、

- ① 寺の中心である金堂（『風土記』記載の嚴堂か）の建設時期は7世紀末頃で、出雲地方の寺院跡としては最も古い時期のもの一つであること
- ② 金堂の中心に三尊仏が置かれた痕跡があること
- ③ 8世紀後半には金堂の東・西・南西の3ヵ所に瓦葺きの建物が建てられ伽藍が整備されたこと
- ④ 11世紀末頃に火災により金堂が焼失し廃寺

となったこと

などが確認された。

奈良時代の文献から、建立者の出自が明らか  
な古代寺院であることや、発掘調査による三尊  
仏の痕跡確認は、全国的にも極めて稀であるこ  
となどから、山代郷北新造院跡は平成14年12月  
19日に国史跡に指定された。

国史跡指定を機に、島根県では山代郷北新造  
院跡の保存・活用のための整備事業に着手した  
風土記の丘地内の史跡整備について、島根県教



第1図 史跡山代郷北新造院跡の位置

育委員会では平成9年に策定された『古代文化の郷“出雲”整備構想－八雲立つ風土記の丘－』(註4)に基づいて、平成15年に『八雲立つ風土記の丘基本計画』を策定している。

当史跡は、『八雲立つ風土記の丘基本計画』において「山代二子塚エリア」に含まれる。このエリアは風土記の丘地内でも大規模な古墳が集中する地であるとともに、山代郷正倉跡・山代郷南新造院跡など奈良時代の注目すべき史跡の集中している区域で、史跡周辺の環境を活かし、『八雲立つ風土記の丘基本計画』の整備テーマである「遺跡や自然景観を通して、『出雲国風土記』の世界を体感する」ことのできる場を作ることが必要と考えられた。これらのことから、山代郷北新造院跡では、周辺の遺跡（史跡）と関連させながら、幅広く長期的な史跡の活用を図ることのできる整備を行うこととされた。

整備はまず緊急を要する土地の買上げを平成15年度から2カ年で行い、平成16年度に基本設計を策定した。当史跡の基本設計にあたっては、考古学・古代史・建築学の専門家と教育・生涯学習・地元住民の立場で活用に関する意見を述べる委員によって構成される整備検討委員会を組織し、委員会での議論を踏まえて策定した。平成16年度に開催されたこの委員会では、整備を行うための基本的な調査成果が足りないので、再度発掘調査が必要であるとの指摘を受けた。このため平成17年度から2カ年で第1基壇・第3基壇・第4基壇・参道推定地について発掘調査を実施することとなった。

その後、調査成果を基に整備内容の検討を行い、平成18年度から本格的な整備工事を実施中である。

## 2. 調査の経過

整備検討委員会の指摘を受け、島根県教育委員会文化財課では、埋蔵文化財調査センターに発掘調査の実施を指示し、平成17年7月から4年振りに現地調査を再開した。

平成17年度は、調査員・調査補助員各1名と作業員5名の体制で現地入りし、7月21日から8月26日まで、第1・3・4基壇及び参道推定地に計8箇所のトレチを掘削した。

7月21日から調査区の杭打ち作業を開始し、7月25日には作業中の安全を祈願し、作業員が主催して勅行を行った。

8月9日には出雲国府跡発掘調査と合わせ、町田章氏、渡部

第1表 調査区名と調査年度

調査区名	調査年度	調査時のトレチ名称	位置・遺構
第4基壇	平成8年度	1T r 2 tr	第4基壇
	平成11年度	1T～4T	
第1基壇前	平成9年度	1T 2 T	第1基壇南側
第1基壇T 1	平成10年度	1T	第1基壇
第1基壇T 2	平成10年度	2T	第1基壇
第2基壇T 1	平成10年度	第2基壇	
	平成11年度	第2基壇T 1	第2基壇
第2基壇T 2～T 7	平成11年度	第2基壇T 2～T 7	
第3基壇T 1	平成12年度	2T	
第3基壇T 2	平成12年度	2T	第3基壇
第3基壇T 3	平成12年度	3T	
第7×T 1	平成12年度	1T	南側畠地
第8区T 1	平成12年度	T 4	北側尾根上
第5区	平成13年度	3～1T～T 5(東谷)	東側谷部
第6区T 1	平成13年度	5～1T	
第6区T 2	平成13年度	5～2T	西側平坦面
第6×T 3	平成13年度	5～3T	
第7区T 2	平成13年度	T 1～2	
第7区T 3	平成13年度	T 1～3	
第7区T 4	平成13年度	T 1～4	南側畠地
第7区T 5	平成13年度	T 4	
第7×T 6	平成13年度	T 5	
1.7～1T r	平成17年度	1T r	第1基壇
1.7～3T r	平成17年度	3T r	第3基壇
1.7～4T r	平成17年度	4T r	第4基壇
1.7～2.5～7T r	平成17年度	2.5～7T r	参道推定地
1.7～8T r	平成17年度	8T r	第2・3基壇中心線
1.8～1T r	平成18年度	1.8～1T r	
1.8～2T r	平成18年度	1.8～2T r	第1基壇
1.8～3T r	平成18年度	1.8～3T r	第3基壇
1.8～4T r	平成18年度	1.8～4T r	

貞幸氏、蓮岡法璋整備検討委員の、翌10日には清水重教委員と平沢毅文化庁調査官の、8月12日には森郁夫委員による調査指導を受けた。さらに、8月19日には柴田久美子委員・井上正志委員・大日方克己委員が現地を視察した。

第1基壇・参道推定地については良好な結果を得ることはできなかったが、第4基壇については、塔の可能性が少ないことが確認されたほか、第3基壇が正方形に近い平面形を持つことが明らかになる等の成果を得た。これを受け、8月20日には現地説明会を実施し、約80名が現地を訪れた。

平成18年2月7日の整備検討委員会では、上記調査結果を報告したが、第1基壇の機能が確定できていないことが問題となり、平成18年度にも調査を実施することが確認された。

一方、同年3月には第2基壇（金堂）に現地保存されている須弥壇跡と東西両脇侍の台座について、奈良文化財研究所保存修復研究室の肥塚隆保室長から保存処理方法の指導を受けている。

平成18年度は、調査員1名と作業員5名の体制で6月15日に現地入りし、9月1日まで調査を行った。調査は、前年までにその性格が確認できなかった第1基壇で2箇所、第3基壇にも2箇所のトレチを設定し、6月20日から掘削を開始した。7月11日には第3基壇から風鐸2点が出土し調査員を驚かせた。第3基壇の調査では、風鐸出土地周辺で、多量の瓦片に混じり、砂岩片の出土が目立った。明らかに弧を描く破片があることから、石製相輪である可能性を考え、7月13日には特に脆い石材に補強措置を施して取り上げを行っている。

7月24日に行った森郁夫整備検討委員と大橋泰夫氏（島根大学教授）の調査指導及び7月28日に実施した出雲市花谷浩学芸調整官の調査指導によって、石材が石製相輪片である可能性が改めて指摘され、第3基壇が塔であった可能性が高まった。

8月2日には、第5回となる整備検討委員会が行われ、蓮岡・清水・井上・大日方・柴田・松本の各委員が視察に訪れたが、その直前に運弁状を呈した銅製品が出土し、調査員をあわてさせた。第5回の整備検討委員会では、第2基壇の遺存石材については現地保存し、その直上に復元品を設置することが決定した。現地保存される石材の劣化を押さえるため、石材の保存処理を実施することになり、8月21日から、埋蔵文化財調査センターの保存処理担当（澤田正明・柴崎晶子）と寺本和明が現地入りした。作業は遺存石材のクリーニングから開始し、8月28日から石材強化剤OM25の塗布を行った。

この間、8月5日には一般向け（参加者50人）に、8月12日には地元向け（参加者15人）に現地説明会を実施した。

8月24日には、出雲国府跡発掘調査指導委員会が行われ、清水委員の他、出雲国府跡発掘調査指導委員である佐藤信・井上寛司・花谷浩・大橋泰夫各委員と清野孝之文化庁調査官が現地を訪れた。

第1基壇周辺では瓦が多量に出土したため、実測作業に手間取ったが、9月1日には現地作業を終了し、撤収した。

### 3. 整理の経過

現地からの撤収が終了した平成18年9月3日からは整理作業を開始している。2年度に渡る調査でコンテナ220箱分の瓦が出土しており、洗浄・注記が終了したものから接合と分類を平行して行った。

実測作業は銅製品から開始し、その間に相輪部材と考えられる石材の保存処理を行った。石材は、

当地で来待石と呼ばれる砂岩製のものと凝灰岩製があり、いずれも持ち上げることが困難なほど劣化していた。このため、第2基壇で現地保存される石材の保存処理と同様に、OM25含浸処理を行った。その後に行った石材の接合作業により、石材中に伏鉢と考えられる部材が含まれる事が判明したほか、凝灰岩製傘状の石材に風鐸設置痕が見られることが判明した。

小片を除き約10,000点あった瓦の分類作業は平成18年12月初旬に終了し、実測作業に入った。

報告書作成作業と平行し、平成19年夏にリニューアルを予定している八雲立つ風土記の丘資料館での展示に、北新造院跡出土の鶴尾について復元模型製作の計画が持ち上がり、平成13年度報告掲載分を含め、鶴尾の検討を行うことになった。復元模型の素図は平成19年1月に概ね出来上がり、2月23日に大脇潔氏（近畿大学教授）及び森委員の、3月3日に清水委員の指導を受け修正を繰り返した。

註1 後藤藏四郎『出雲国風土記註解』1937年

註2 井上狷介による1955年の測量図と、勝部昭による1984年の測量図が公表されている。

註3 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書12』島根県教育委員会1998年

『来美廃寺』島根県教育委員会2002年

註4 『古代文化の郷“出雲”整備構想』（平成9年3月、古代文化の郷“出雲”整備構想策定委員会策定）

では、県東部出雲地域の歴史、文化および自然を核とした多様で広域的な総合整備を目指している。

## 第2章 遺跡の位置と周辺の遺跡

**第1節 地理的環境** 山代郷北新造院跡は松江市矢田町来留美511-1外に所在する。標高約40mの丘陵南向き斜面に立地し、遺跡の南側には『出雲國風土記』に「神名通野」と記された茶臼山が美しい円錐形の姿を見せている。標高171mの茶臼山は独立丘陵で、その南には中海に注ぐ意宇川が形成した沖積平野である意宇平野が広がっている。現在の意宇平野は広々とした水田景観が広がっているが、古代においては中海の喫水線が現在よりも南へ入り込んでいたものと考えられる。遺跡の西側は乃木段丘と呼ばれる低平な丘陵が南北に延びており、段丘上には県下有数の大型古墳群等が知られる。遺跡の北側は低丘陵が続き、宍道湖と中海を結ぶ大橋川が東西に延びている。

遺跡が位置する谷間は東西方向に延びているが、谷の中には大きな河川は見られない。谷の西側には大橋川に注ぐ馬橋川が乃木段丘を開析し、緩やかな谷地形を形成している。

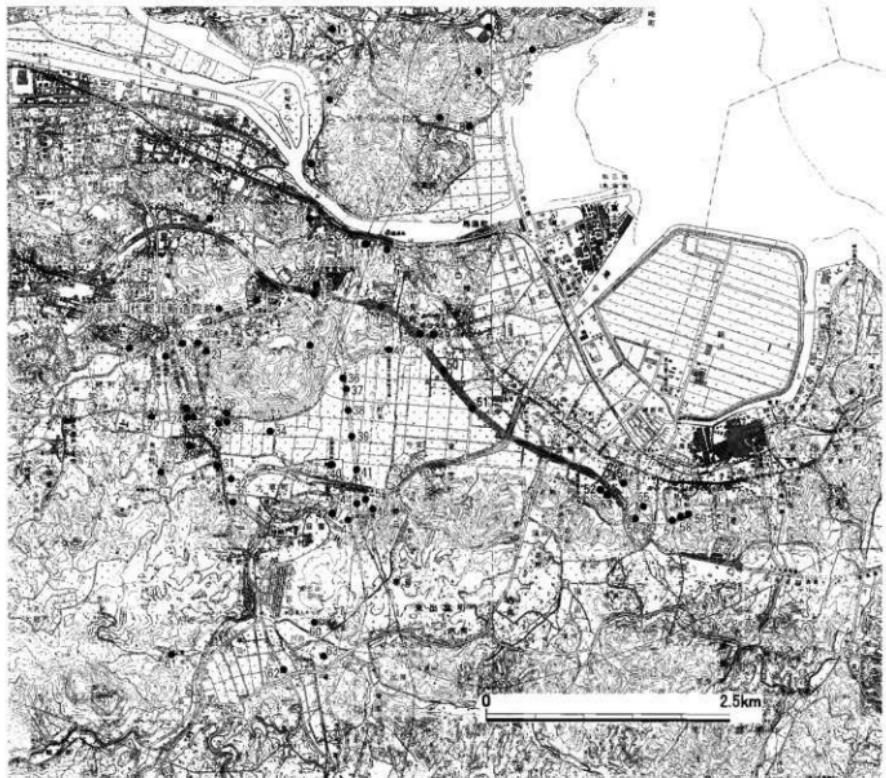
**第2節 歴史的環境** 北新造院跡周辺に旧石器時代の遺跡は少ないが、茶臼山西側を南北に延びる乃木段丘上では、石器製作跡と考えられるユニットを検出した下黒田遺跡がある。また、平成12年の北新造院跡発掘調査では玉髓製のナイフ形石器が出上しており、付近は旧石器時代から生活の場であったことは明らかである。

縄文時代の遺跡も多くはない。茶臼山北西の馬橋川沿いに位置する石台遺跡では多くの縄文土器が出上っている。茶臼山南側の出雲国府跡日岸田地区でも多量の黒曜石剥片が出土している。北新造院跡の後背地北側斜面の勝負遺跡では縄文時代の集落が確認されている。また、平成18年度の北新造院跡発掘調査中には、黒曜石製石鏃を表採した（第3図）。

北新造院跡周辺で遺跡が急増するのは弥生時代以降のことで、意宇平野北東部では、建築材を含む木製品が出土した上小紋遺跡や、弥生時代の水田跡として知られる布田遺跡などがある。弥生時代後期にはいると、北新造院跡周辺の丘陵部にも来美墳丘墓・間内越墳丘墓など四隅突出型墳丘墓が造られるようになる。

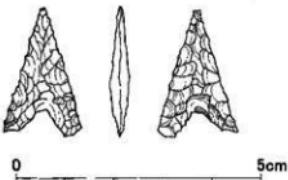
古墳時代にはいると、意宇平野に面した中竹矢の丘陵上には、いち早く古墳としての要素を備えた社日1号墳が築かれるが、小規模な墳丘で、卓越した古墳ではない。前期末になると、茶臼山から東へ延びる丘陵上に全長58mの前方後円墳である廻田1号墳が築かれる。廻田1号墳は出雲最古級の前方後円墳で、当該期では最大級の規模である。続く5世紀代には大橋川沿岸に石屋古墳（42m方墳）、井の奥4号墳（57m前方後円墳）、竹矢岩舟古墳（50m前方後方墳）などの大型古墳が次々と造られることになるが、出雲各地には同規模の古墳を築く地域が存在しており、絶対的に卓越した地域とまではなっていない。

古墳時代後期になると、茶臼山西北麓に出雲最大の古墳である山代二子塚古墳（94m前方後円墳）、や山代方墳など突出した大首長墓が見られる。また、意宇平野西側の丘陵には、御崎山古墳（40m前方後方墳）、岡田山1号墳（24m前方後方墳）など、小規模ながら優秀な副葬品を持つ古墳が築かれる。岡田山1号墳出土大刀には「額田部臣」の銘文が見え、中央の氏族との関係が伺われる。同時期の意宇平野周辺の古墳には、規模・副葬品以外に独特な地域的特質を持った古墳が見られるようになる。石室の各壁面を切石の一枚石で形作る出雲型石棺式石室は、意宇平野周辺を中心に出雲地方西部の一部から伯耆地方西部にまで広がりを見せている事が知られているほか、出雲型子持壺



1. 遠原1号墳
2. 朝駒若山古墳
3. 魚見塚古墳
4. 池ノ奥窓跡群
5. 山津窓跡群
6. 寺尾窓跡
7. 若汐窓跡群
8. ババタケ窓跡
9. 石台遺跡
10. 石屋古墳
11. 手間古墳
12. 竹矢岩舟古墳
13. 来美墳墓
14. 間内越墳墓
15. 平所遺跡
16. 才ノ岬遺跡
17. 向山1号墳
18. 大庭鶏塚古墳
19. 山代二子塚古墳
20. 山代方墳
21. 永久宅後古墳
22. 東淵寺古墳
23. 山代郷正倉跡
24. 下黒田遺跡
25. 黒田館跡
26. 山代郷南新造院跡
27. 小無田II遺跡
28. 寺の前遺跡
29. 黒田畦遺跡
30. 出雲國造跡
31. 岡田山古墳群
32. 岩屋後古墳
33. 御崎山古墳
34. 大坪遺跡
35. 週田古墳群
36. 上小紋遺跡
37. 向小紋遺跡
38. 四配田遺跡
39. 神田遺跡
40. 出雲國府跡
41. 才台垣大屋敷遺跡
42. 西百塚山古墳群
43. 東百塚山古墳群
44. 古天神古墳
45. 天満谷遺跡
46. 安部谷横穴墓群
47. 出雲國分寺跡
48. 中竹矢遺跡
49. 出雲國分尼寺跡
50. 布田遺跡
51. 夫敷遺跡
52. 岸尾遺跡
53. 島田池遺跡
54. 大木権現山古墳群
55. 寺床古墳群
56. 島田遺跡
57. 渋山池古墳群
58. 渋山池遺跡
59. 原の前遺跡
60. 雨乞山古墳
61. 青木遺跡
62. 前田遺跡
63. 増福寺古墳群

第2図 史跡山代郷北新造院跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1 : 50,000)



第3図 山代郷北新造院跡採取石  
実測図 (S = 1 : 1)

や遅くまで残る埴輪の使用など、特異な地域となっている。古墳時代の集落としては意宇平野北東で大敷遺跡が知られている他、出雲國府跡の調査でも古墳時代の集落の様相が判明しつつある。大敷遺跡や出雲國府跡からは多孔の壺などが出土しており渡米人ととの関係が伺われる。

古代に入ると、茶臼山南側に広がる意宇平野に出雲國府が置かれる。意宇平野が古代出雲国の中心となったことにより、付近には重要遺跡が点在することになる。

乃木段丘上では規格的に配置された総柱建物群を検出しておらず、『出雲國風土記』記載の山代郷正倉に比定されている。山代郷正倉跡の南には下黒田遺跡が知られており、広範囲に渡る計画的な地割りが明らかになった。段丘南端に近い黒田鞋遺跡では墨書き土器「云石」が出土した。「云石」は「飯石」を表したものと考えられており、飯石郡の出先機関が存在した可能性がある。このように乃木段丘上は古代の官衙関連遺跡が集中する地域となっている。その東側の茶臼山南西裾部には『出雲國風土記』記載のもう一つの山代郷新造院に比定される山代郷南新造院跡（四王寺跡）とその瓦を供給したと考えられている南新造院瓦窯跡（小無田Ⅱ遺跡）がある。南新造院跡は、以前は字から師（四）王寺跡（しわじあと）と呼ばれており、『三代実録』貞觀9（867）年に見える「四天王像安置の寺」と指摘されたこともある。昭和62年の発掘調査では、東西23m、南北16mの乱石積基壇が確認されており、基壇中には、南新造院軒平瓦Ⅱ類（北新造院軒平瓦Ⅲ類と同范）が入っていた。これらの調査により『出雲國風土記』記載の山代郷（南）新造院跡であった可能性が高まった。また、南新造院跡の前面に当たる寺の前遺跡からは鱗状の特徴的な文様を持つことで知られる山陰系鶴尾の小片が出土しており、南新造院で山陰系鶴尾が使用された可能性が指摘されている。一方、南新造院瓦窯跡では3基の窯跡が確認され、内1基からは平瓦が窯詰めされた状態で検出されている。それによると、平瓦を横倒しにし、側面を接地させた状況で焼成されていた。窯跡は燃焼室と焼成室の間に大きな段差を持つ平窯で、焼成室の火井もかなり低い。南新造院瓦窯跡では窯の構築材中に南新造院跡軒平瓦Ⅱ類（北新造院跡軒平瓦Ⅲ類と同范）が出土している。

一方、茶臼山東麓には出雲國分寺跡・出雲國分寺瓦窯跡・出雲國分尼寺跡が知られている。出雲國分寺瓦窯跡は、発掘調査は行われていないが、出雲國分寺跡I型式軒丸瓦などが採集されている。出雲國分寺瓦窯跡西側の丘陵部には瓦窯や古代末の集落を中心とする中竹矢遺跡、加工段上に多くの掘立柱建物跡を検出し、土馬や手捏ね土器などが出土したオノ峠遺跡などが知られており、國分寺や國府との関係が推定されている。中竹矢遺跡の瓦窯跡は南新造院瓦窯跡と同様の燃焼室と焼成室の段差が大きく、焼成室の狭い構造で、9世紀頃の瓦窯と考えられている。また、中竹矢遺跡ではゴミ捨て場にも使用されたと考えられる沼地が調査されている。この沼地からは土器類の他、出雲國分寺跡I型式軒丸瓦と南新造院跡II型軒丸瓦が出土しており、出雲國分寺と南新造院の関係を伺わせる。出雲國分尼寺跡東側の意宇平野巾程からは特異な柱配置を持つ掘立柱建物跡が発見された朽木遺跡がある。少なくとも古代後半には、中海に近い意宇平野先端部まで開発が及んだ様子を示すと考えられる。

茶臼山の東側を南北に通る谷地形は、古代山陰道から分岐し隠岐へ向かう枉北道が推定されてお

り、大橋川に交差する地点には『出雲國風土記』記載の、「朝駒の渡」が推定されている。大橋川の対岸には全長62mの前方後円墳である魚見塚古墳や須恵器窯跡群である大井古窯跡群が知られている。大井古窯跡群は古墳時代から続く出雲最大の須恵器生産地で、古代初頭までは出雲国内ではほぼ独占的な地位を占めていたと推定されている。この内、四反田窯跡などでは瓦の出土が知られている他、山津窯跡では山陰系と言われる鶴尾が出土している。

『出雲國風土記』の意宇郡条、黒田駅の記載によると、元々西方に在った黒田駅は意宇郡衙隣接地に移転したと読める記載が見える。駅の移転が枉北道の新設に伴うと想定した場合には、隣岐へ向かう古道が正倉跡付近、乃木段丘上を通っていた可能性が考えられる。北新造院自体は幹線道路に面していないが、その東には枉北道が、西側には古道が通っていた可能性が高い。

茶臼山南側の古代山陰道（正西道）推定線を横切る形で調査された大坪遺跡では、遺構が残存していれば確実に捉えられると考えられていたが、道路遺構を検出することができなかった。大坪遺跡では「急急禁解・・・」「延暦八年」などの木簡が出土している。意宇平野周辺では、古代山陰道を考古学的に捉えることはできないが、松江市乃白町の松本古墳群では、幅10mの道路痕跡を調査しており、古代山陰道の可能性を考古学的に考えられる県内唯一の資料となっている。

奈良平安時代の墳墓はほとんど知られていないが、中竹矢遺跡の丘陵頂部に位置する社日古墳群では八陵鏡を収めた火葬骨壺が出土している。

平安時代後半期には意宇平野を中心に神田遺跡・大屋敷遺跡・天満谷遺跡などで輸入陶磁器類などがまとまって出土しており、出雲國府跡口岸田地区でも古代末の建物跡が知られている。

中世以降は、平浜八幡宮や安国寺の成立などから中世府中の一端を垣間見ることができるが、遺跡の実態は不明な点が多い。

#### 参考文献

- 『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会1987年
- 『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会1975年
- 岡崎雄二郎「出雲國分寺瓦窯について」『八雲立つ風土記の丘No35』島根県立八雲立つ風土記の丘1979年
- 『出雲國府跡-1』島根県教育委員会2003年
- 『出雲國府跡-2』島根県教育委員会2004年
- 『出雲國府跡-3』島根県教育委員会2005年
- 『出雲國府跡-4』島根県教育委員会2006年
- 『国道9号線松江バイパス建設に伴う発掘調査報告書（中竹矢遺跡）』島根県教育委員会1992年
- 『来美庵寺』島根県教育委員会2002年
- 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書IV』島根県教育委員会1985年
- 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書V』島根県教育委員会1988年
- 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書X山代郷南新造院跡』島根県教育委員会1994年
- 『小無田II遺跡発掘調査総報』松江市教育委員会1997年
- 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書VI』島根県教育委員会1989年
- 『北松江幹線新設工事松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会1987年
- 『国道9号線松江バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV（夫敷遺跡）』島根県教育委員会1989年
- 『松江市東部における古墳の調査』島根県古代文化センター－2004年
- 『岩屋後古墳』島根県教育委員会1978年
- 『国道9号線松江バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X』島根県教育委員会1992年

- 『出雲國庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会1971年
- 『市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会2002年
- 『史跡出雲国山代郷正倉跡』島根県教育委員会1981年
- 『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会2006年
- 内田律雄『山雲国風土記』大井浜の須恵器生産(下)』『古代学研究』第120号1990年
- 『下黒田遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会1988年
- 『黒田館跡』松江市教育委員会1984年
- 『黒田村遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会1995年
- 『出雲国分尼寺第3次発掘調査概報』島根県教育委員会1976年
- 『国道9号線松江バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書知(才ノ岬遺跡)』島根県教育委員会1993年
- 『松本古墳群・大角山遺跡・すべりざこ古墳群』島根県教育委員会1997年
- 『社日古墳』島根県教育委員会1999年

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要（第4図）

**第1基壇** 第1基壇は、上段平坦面西側に位置し、付近の標高は約31mである。南辺を確認する目的で、平成17年度に基壇南辺から南北方向に長さ5mのトレンチ（17-1Tr）を設定したが、平成13年度の報告で想定（注1）されていた基壇縁辺を確認することができなかった。このため、平成18年度には基壇中央から北側に18-1Trを、基壇南東隅に18-2Trを設定し掘削した。

17-1Tr北辺近くで第1基壇南辺を検出できる想定であったが、造成面の落ち込みは、想定位置よりも約1m南にずれることができた。

18-1Trでは北側柱列の礎石4基と礎石抜き取り痕を確認した。また、18-2Trでは基壇南東隅と考えられる落ち込みを検出した。このことによって、第1基壇は1辺9.9mのほぼ正方形を呈すこと、3×3間の矩形であることが判明した。基壇北側には、中央間から延長する位置に落ち込みが見られた。この落ち込みは、位置関係から北階段であった可能性もあるが、明確な証拠は得られなかった。第1基壇上の建物は、心礎が発見できなかったが、金堂真横に位置する正方形の建物で、塔の可能性がある。塔とすると、初層の一辺は6.3mに復元できる。基壇周縁からは多量の瓦が出土しており、8世紀後半から9世紀初頭に造られたと推定される。

**第2基壇** 第2基壇は上段平坦面中央に位置し、標高約30mである。平成13年度までに調査を完結しており、金堂であることが確定している他、三尊像の設置痕、東西両脇侍の台座を含む須弥壇が確認されている。須弥壇付近は史跡整備に向けて埋め戻されていたが、平成18年度は脇侍台座や磚などの保存処理のために再掘削を行った。石材には8月28～30日に石材強化剤OM25合浸処理を行っている。

仏像を設置するためのほぞが4穴開けられている東脇侍台座は、クリーニングの過程で、北側の1穴のみが貫通していないことが確認された。

**第3基壇** 上段平坦面東側に位置する基壇で、付近の標高は約29mである。平成17年度調査では、基壇西辺をかけた東西方向のトレンチ（17-3Tr）を設定し、2条の溝を確認した。基壇上面は援体壇による削平が及んでいるものと思われ、礎石抜き取り痕と思われるわずかな落ち込みを検出したが、礎石位置を確定できなかった。2条の溝を基壇外装の基底部や雨落ち溝と考えた場合、平成13年度に推定している東・北の基壇縁辺から一辺8m程度にしかならないため、18年度に再調査を実施した。

平成18年度には、想定される基壇中心を架けたT字形の18-3Trを設定し、基壇北側に残されている旧陸軍の援体壇下方の調査を中心に実施した。出土遺物には小型の風鐸4点を始め、石製相輪と考えられる石材が含まれており、第3基壇上の建物が塔であったことが判明した。一方、平成13年までに北側基壇縁と想定していた溝が、礎石などの抜き取り痕だった事が判明し、基壇・建物規模の推定作業は振り出しに戻った。最終的には基壇規模1辺約10.5m、建物の1辺6.3mと想定し、第1基壇のものと同規模の塔が建っていたと考えられる。

**第4基壇** 第4基壇は下段平坦面の西端に位置し、付近の標高は約26mである。直下まで畠地による削平が及んでおり、基壇の大半が失われている。第4基壇は既報告書で塔と推定されていたが、

整備検討委員会からは、疑問が示された。平成17年度には第4基壇東側に17-4Trを設定し、第4基壇の建物が東西3間で収まるかどうかを確認することとした。上面は大きく削平が及んでいたが、基壇下層の造成が、想定される3間の長さを大きく超えて東に続くことが確認できた。東西4間、南北5間以上の建物が考えられ、東向きの講堂が想定される。

**参道推定地** 参道は、第2基壇南の灯籠痕跡などから、金堂正面に取り付くと想定しており、平成17年度に第2基壇南側の斜面を掘削した。一方、第2・3基壇の中間線では、やや陥る地形が見られたため、この部分についても調査を行った。第2・3基壇中間線は、自然堆積しか確認できず、自然地形と判断された。第2基壇正面でも、確実な参道の痕跡を捉えることはできなかったが、溝状の産みが、第2基壇中央3間分の柱筋に一致し、第2基壇正面に参道が存在した可能性が高まった。

**その他の遺構** 第1基壇南側の斜面下方(17-1Tr)からは、須恵器・土師器が出土しており、7世紀代の加工段が存在した可能性が高い。また、第3基壇北側には、旧陸軍の援体壕が残存しており、援体壕内側には来待石を使用した旧陸軍の建物の壁地覆が残されていた。

註1 『来美廃寺』島根県教育委員会2002年、『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書12』島根県教育委員会1998年。以下、既報告とした場合には、上記報告書による。

## 第2節 調査の方法

山代郷北新造院跡については、既に平成10・14年に報告書が刊行されている。既報告と図上での整合性を明確にするために、日本測地系による基準杭を打設し、トレンチを設定した。現地での実測図は、トレンチの四隅に打設した杭を基準に、1/20スケールに統一して作成した。

遺物の取り上げは、平成17年度調査については、遺物量が少なかったこともあり、できる限り位置を記録し、Noを付けて1点毎に取り上げた。平成18年度調査の主要部については、遺物量が多く、1点毎に取り上げることが困難であったため、特殊な遺物を除き、出土状況実測図を1/20で作成した後、1mグリッドでまとめて取り上げた。各トレンチの遺物取り上げグリッドは第5図のとおりである。

## 第3節 遺構について

### 1. 第1基壇南辺(17-1Tr: 第6図)

第1基壇は金堂(第2基壇)西側に位置する基壇で、西側と北側には斜面が迫っている。南側は大きく落ち込んでおり、下方第4基壇との間には、第2基壇前面から続く小さな平坦面がある。

第1基壇の建物は、平成13年度までの調査によって、 $1.8+2.34+1.8\text{m}$ の $3\times 3$ 間堂と推定され、基壇規模は $8.2\times 9.4\text{m}$ とされていた。方形堂と推定しながらも、建物の性格は不明として報告されていた。基壇の平面が正方形にならないことから倉庫風の建物を想像させる一方、金堂の真横と言う位置関係から、より格式の高い建物を想定する考え方があった。整備検討委員会からは第3基壇と共に塔の可能性が示され、金堂の東西に塔を置く、新治廃寺式の伽藍配置ではないか、と言う意見が出された。これを受けて、位置が未確定であった基壇南辺を確認するために17-1Trを設定した(第6図)。

**基壇南縁** 17-1Trを設定した位置は、既報告書で基壇縁と想定した位置を架けた南北6m、東西2mのトレンチである。

17-1Tr北辺から1m以内の位置で、基壇縁を検出できるという想定であったが、表土下面は比較的綿まとった土が、緩やかな傾斜を保ったまま続いており、トレンチ北縁から約2.5mの位置で、急激に落ち込む。落ち込みは比高差約1.2mで、金堂正面から緩やかに続く平坦面に繋がっている。表土中には、少量の瓦片を含むものの、瓦葺き建物の周辺としては非常に少なく、少なくとも上面は削平されていることが判る。トレンチ西壁に沿って開けたサブトレンチの土層では、黄色・灰色を呈する土（8層）が互層状に堆積しており、第1基壇造成土と考えられる部分が見られる。基壇外装を示す遺構・遺物は見られなかったが、上面から続く緩斜面がX=-61772付近まで延びており、第1基壇南縁の位置は、少なくとも当初の想定より南に位置していたことが確認できる。

**SK01（第7図）** 17-1Tr南隅、標高32.4m付近では、巨石（18-1）と瓦が詰まとった土坑が見られ SK01と呼んだ（第7図）。SK01は既に平成9年度に一旦検出されており、掘り込み面や土層堆積状況は確認できなかったが、巨石と瓦の乱雑な入り方から、第1基壇陥落後に石などを落とし込んだ土坑と判断した。SK01に落とし込まれた石（18-1）は、1面が平坦に加工された自然石で、礎石であった可能性がある。SK01内では平坦に加工された面を北に向けて立った状態で落ち込んでいた。

**下層遺構（第7図）** 第1基壇南縁の落ち込んだ下面近くからは須恵器・土師器が比較的まとまって出土し、下層遺構の存在が伺われた。出土した七器は、多くが7世紀代と考えられ、壺類などの供膳具と土師器甕や竈などの煮炊具を含んでいるが、仏具は見られない。落ち込み上面の基壇縁と想定される位置にも小さな落ち込み（SK03）があり、小型の須恵器蓋が出土している。SK03は、地山面に掘り込まれており、基壇造成土の下面にあたる。第1基壇南側では、平成8年度調査でも7世紀代の加工段と判断された遺構がある。

## 2. 第1基壇北側（18-1Tr：第6図）

平成17年度調査の結果、基壇南縁が当初の想定よりも大幅に南へずれる事が明らかになったため、平成18年度には遺構が良好に残存していると予想される基壇北側（18-1Tr）と、南東隅の痕跡を捉えるためのトレンチ（18-2Tr）を設定した。

18-1Trは、予想される基壇中央から基壇北側を架けたL字形に設定し、北側柱列の内、東隅の1基を除く3基の礎石を検出した。最終的には東隅の礎石も検出したほか、北側基壇縁の痕跡を追って一部拡張した。

第1基壇中央は、平成11年度に表土掘削のみが行われている。埋め戻し土を除去すると、多量の瓦が出土するが、調査区南半（X=-61764以南）からは、小片を除きほとんど遺物が見られない。東壁面の土層堆積状況（第10図）では、遺物を含まない2-2層が表土直下から堆積し、2-2層直下が第1基壇整地土である黄褐色の綿まとった土となる。北半部には多量の瓦が見られることから、X=-61764以南が完全に削平されている事が判る。また、トレンチ北側に見られる2-2層より下層の堆積土中には、炭片や焼土ブロックを含む事から、第1基壇の建物が火災にあっていた可能性が高い。

18-1Tr北側で、第1基壇建物北側柱列の礎石4基を確認した。礎石は、長さ約70cmの自然石で、不定形である。北西隅の1基で、掘り肩が確認でき、原位置を移動されていない事が確認できる。

柱の当たりは確認できないが、北西隅の1基は上面が尖り気味になっており、他の礎石はいずれも上面に平坦な面を持っている。各礎石中心間の距離は1.95m、2.4m、1.95mとなっており、1尺=30cmとすると、6.5尺+8尺+6.5尺となる。北から2列目では、礎石は残存していなかったが、北から2列目東から2列目の位置で、小石の入った落ち込みが見られ、礎石根石と考えられる。北側列から1.95m線が掛かり、礎石位置として矛盾はない。

北西隅の礎石から西へ約2mの位置には、南北に延びる落ち込みが見られる。急激に落ち込んでおり、基壇西縁を示す可能性が高い。基壇外装は検出できなかった。

北側礎石列から北へ1mの位置には、東西方向に延びる溝状の落ち込みが見られた。この落ち込みは既報告にも記載され、基壇北縁と推定されていたが、18-1Tr北西隅から約2mの位置で消失しており、西側へ回り込まないことから基壇縁とは考えられない。この落ち込みの直上の埋土には少量しか遺物が含まれないことから、基壇造成土そのものと思われる。この落ち込みが基壇北縁となる可能性が減ったことから、トレント北壁を2m四方拡張した（北拡張区）。

北拡張区では、西壁から約1m、北壁から1.5mにわたってL字形に落ち込む部分が確認された。L字形の北西側は地山面で、南側と東側には青灰色粘質土が堆積している。東西方向の線は、礎石列から2.1m、南北方向の線は、西から2基目の礎石土軸に一致している。

北側礎石列から割り出した基壇中心にサブトレントを設定（第6・10図）したが、心礎となる痕跡は見られなかった。また、南から2列目西から2列目の柱が想定される位置は、トレント隅に当たったため、平面的には明瞭ではなかったが、トレント西壁面の土層には基壇造成土を切る落ち込みが見られ、礎石の抜き取りが行われた可能性がある。

18-1Trの調査によって、第1基壇上の建物は東西3間で、西と北側の基壇の出は2.1m（7尺）となる可能性が高まった。南北方向についても3間で復元すると、17-1Trで見られた落ち込みが、基壇の出2.1mの地点に一致した。

**北拡張区の土器だまり** 北拡張区ではトレント東壁付近を中心に10数個体の上部器皿・皿が折り重なって出土している。出土位置が地山面よりも僅かに高く、第1基壇廃絶後に持ち込まれた可能性がある。これらの土器器口縁部にはタールが付着するものが多く、灯明皿に使用されたと考えられる。多くは、底部に回転糸切りを残し直線的な体部を持つもので、11～12世紀のものと考えられる。

### 3. 第1基壇南東隅（18-2Tr：第6図）

第1基壇南東隅を狙った18-2Trは、平成13年度に想定された位置、17年度に修正された位置、基壇が正方形であった場合の17年度想定南北線を東西に設置し直したときの位置が同時に含まれるよう設定した。

表上を剥がすと、トレント北西隅では、すぐに黄褐色の締まった面が現れるが、この面は東へ60cmほどのところで、一段落ち込んでいる。この落ち込んだ南北線は平成10年度に基壇東縁としていた線に一致するが、落ち込み自体は明瞭でなく、斜め方向の削平上面と考えられる。落ち込んだ部分には黄褐色土が堆積し多量の瓦が含まれるが、この上層も東へ3m付近から薄くなり始め、瓦の出土も減少した。南北方向では、トレント南縁から1m地点で、灰褐色土が急激に下がり、落ち込んでいる様子が判る。

平成10年度第1基壇T2では、第1基壇東縁を短い位置で判断していた（第6図縦線）。18-2Trに

も一致する落ち込みが見られるが、この落ち込みは、基壇造成に関わる初期段階の土と思われ、落ち込み自体は明瞭でなかった。トレント全面にわたって、浮いていると判断される瓦を取り上げると、コーナー状に立ち上がる部分が見られた。このコーナー南線は17-1Trで見られた落ち込みラインに近いが、東線は北側礎石列東端から2.1m線に若干外れる。

18-2Trでは大型の釘（23-5）などが出土している。18-1Tr北側の様相からは、火災にあっている可能性が伺われるが、釘の残存状況が良いことから、第1基壇の建物は少なくとも全焼ではなかつたと判断される。

18-2Trでは多量の瓦類に混じって、砂岩（來待石）の石製品が出土している。後述する第3基壇出土石製品と同様の形状で、塔相輪の部材である可能性がある。

**4. 第1基壇小結** 17-1、18-1・2Trにより想定される建物跡は、 $3 \times 3$ 間の正方形で、各柱間は $1.95+2.4+1.95$ mと考えられる。また基壇縁は、南東隅に不安定さを残しているが、ほぼ $11.7$ mの正方形に復元でき、基壇の出は、 $2.1$ mであったと考えられる。第1基壇北列の礎石上面が $34.2$ m付近であるのに対し、南東隅の位置は、 $32\sim33$ mと低い場所である事から、基壇下端部の勾配位置や外装流出などの影響による漏りだと思われる。なお、基壇外装は確認できなかった。

18-1Tr北拡張区で見られたL字形の落ち込みは、中央間の柱筋に一致し、北階段の基底部に当たっていた可能性も考えられるが、確証は得られなかった。

$3 \times 3$ 間の正方形の建物で、塔である事が確定した第3基壇とは第2基壇を挟んでほぼ対称の位置にあり、第3基壇と基壇規模が一致することから、塔であった可能性が高まった。しかし、想定される建物中心にサブトレント（第6図）を設定したが、心礎の痕跡は見られなかった（第10図）。

## 5. 第3基壇（17-3Tr・18-3・4Tr：第11図）

第3基壇は金堂（第2基壇）東側に位置する基壇である。第3基壇北側は旧陸軍が築いた授体壕により、大きく破壊されていることが判っている。また平成13年度までの調査によって、基壇平面はほぼ正方形になるとしており、塔の可能性があった。これを受けて平成17年度には、想定される基壇中心から西に向かって17-3Tr（南北 $1.5$ m、東西 $7$ m）を設定した。

17-3Tr 土層断面（第13図上）では、薄い表土直下には橙褐色の綺まった面が現れ、基壇中の土と考えられる。表土中には瓦を含んでいたが、その量は比較的少なかった。

17-3Tr西側では、瓦片を含む南北方向の溝2条（SD01・02）を検出した。SD01は幅約 $1.3$ m、深さ $30$ cmで、断面は鈍いU字形に近い。土層は複雑に切り合って見え、乱雑に埋め戻されている。埋土中には瓦片が多く含まれている。SD02は、SD01のすぐ西側にあり、その間は約 $50$ cmである。幅約 $1.3$ m、深さ約 $25$ cmで、埋土中の瓦はSD01よりやや少ない。SD01との間の上層には、青灰色を呈した基盤層が見えている。また、SD02より西側の土層には造成土と考えられる土（第13図13・14層）があり、17-8Tr付近へ続く谷地形を埋めていると考えられる。

17-3Tr南線に沿って、柱穴状の落ち込み2基を検出し、SD01に掛かる位置にも同様のものがあつた形跡がある。一直線に並び、その間隔が $1.8$ mで一定することから、当初は中央間の礎石抜き取り痕と考えていたが、いずれも深さ $5$ cm程度しかない。根石も検出できなかつたため、植林等に関わると考えられる。埋土は表土から褐色の軟らかい土で、遺物は含んでいない。

**18-3・4Tr** 平成18年度には、遺構残存状態が最も良好であろうと予想される援体塙を中心に18-3・4Trを設定した。

援体塙の南側に位置する18-3Trの南半は、ほとんど遺物が出上せず、援体塙造営に際し、大規模な削平を受けていることが明白だった。一方、援体塙本体に掛かる18-3Tr北側から18-4Trでは一面に瓦片が充满し、援体塙造営に関わる擾乱が少ない事が予想された。援体塙（第13図中段）は高さ約1.2m、長さ約18mに渡って築かれており、塙の造成上は非常に柔らかい。標高33.8m付近に厚さ2cmほどで旧表土が残されており、その下層は触られていないようである。旧表土上には立木がそのまま残されており、伐根を行わず直に土を盛って築かれている。旧表土より上層には、遺物は多く含まれてはいない。旧表土より下層からは多量の瓦片が出土した。

援体塙直下では、旧表土下10cmで青灰色の基盤層に当たり、古代の造成面に近いと思われる。この基盤層が見える部分は18-3Tr西辺から北辺の西側、18-4Trの一部に掛かっている。また、18-3Tr南東側は盛り土が行われている可能性が高い。

削平が及んでいる範囲はX=-61771以南で、その部分には遺物はほとんど見られないが、X=-61771以北では、一面に折り重なって瓦が出土した。出土遺物には風鐸などの銅製品や砂岩製の石製品などが含まれており、その出土状況は第12図のとおりである。これらの銅製品・石製品はいずれも塔相輪に関わる遺物と考えられ、第3基塙に建っていた塔が倒壊し、18-3Tr付近に相輪が転落したことを示すと考えられる。

遺物を取り上げると、上坑4基（P1～4）、南北方向の溝2条（SD03・04）、東西方向の溝2条（SD05・06）、小さな柱穴5穴が現れた。この内SD03は位置関係からSD02に連続すると考えられる。SD03には、瓦片が多く入っていたが、いずれも小片だった。

P1～4は長径1.2m、短径1m前後の橢円形で、いずれも長軸を東西方向に向ける。P3は平成12年度の溝状に見える遺構に連続し、東に長く延びる。これらの土坑の内、P2を掘削した（第12図上）。P2内部には石製相輪片（19-3）を始め、瓦片や石が乱雑に入っている、埋土は柔らかい。底面に石が並ぶ様子は無く、礎石根石と思われる状況ではなかった。基本的には相輪石材、瓦などを含んだ土で一気に埋め戻されており、石材（礎石？）の抜き取りに伴うと思われる。しかし、根石まで根こそぎ掘り返されている点は注意を要する。また、P3については、平成12年度にサブトレンチで断面が確認されており、土坑の北側にも基壇造成土が続くことが確認されており、これらの上坑が基壇内部に掘削されていることが判っている。礎石・根石が含まれていないことから、これらの上坑は援体塙造成時に礎石の抜き取りが行われたと想像される。18-3Tr北西側で基盤層が見えていることから、基壇上面はP1～4検出面よりも相当高いと想像される。礎石を抜くだけが目的だったとするP2・3の底面は深すぎ、意図的に深く掘ったとしか思えない。周辺から風鐸等の銅製品も出土しており、大きな石のある位置については宝探し的な掘削が行われたと想像される。SD01～04の遺物出土状況も不自然であり、同様の掘削が行われたのではないだろうか。

小さな柱穴状の落ち込みは、3穴が一直線に続いており、一連のものと考えられる。この内、西側の1穴がP1と、東側の1穴がP4と切り合っており、P1・4よりも新しい。P1～4が援体塙造成に伴うものとすると、これらの落ち込みはそれ以後と言うことになり、近代以降と考えられる。

18-4TrにはSD05・06が見られる。SD05は幅約10cm、深さ約4cmの非常に小さな溝で、検出長は60cmである。内部には灰白色の砂質土が入っており、遺物は含まれていない。

SD06は18-4Tr中程で見られる東西方向の落ち込みで、南北幅約1mである。北側が山側に当たるため、北側の上場が高い。SD06以北は授体壇内部の建物により削平されているが、古代においては山側の斜面に接していた可能性が高く、SD06は山側からの排水を受ける位置関係になる。

**6. 第3基壇小結** 18-3・4Trからは相輪関係遺物がまとまって出土しており、塔が建っていたことは確実である。P1～4は、近代になって掘られたと想定したが、その位置には礎石があった可能性が高い。18-3Tr北・西側には基盤層が見えていることから、P1より西側、P3より北側に礎石があった可能性は少ない。また、平成13年の調査により基壇東縁の位置はほぼ確定しているので、P1～3を北側礎石列とすると、SD05が基壇北縁に、SD01・03が基壇西縁に当たる可能性がある。これらから第3基壇上の建物を想定すると柱間は2.1mの等間隔となり、基壇の出は東・北・西側で2.1mとなる。南側は平成12年度に調査されているが、柱位置等の関係は不明である。

## 7. 第4基壇（第14図）

第4基壇は金堂（第2基壇）南西下方に位置する遺構で、地表面には土壇状の高まりは見られない。平成8年度の調査により発見された基壇であり、北・西側の雨落ち溝、礎石2基、礎石抜き取り痕4ヶ所が確認されている。既報告の段階では、3×3間で塔の可能性が考えられていたが、柱間は東西で、10+10+9尺に復元され正方形に組めない。また、柱位置から雨落ち溝までの長さも7尺と短いことから、塔以外の建物を想定する必要が生じた。

第4基壇の南半は、後世の開墾によって1m近い段差で削平を受けており、南半については遺構は残されていない。調査が及んでいない東側約4mに調査区を設定して掘削した。

北壁で十層を見ると、表土直下に2橙色土の堆積が見られる。その下層は、堅く締まった3明褐色土で、基壇中の土層であろう。後世の擾乱を受けていた17-4Tr南西隅では、その下層の断面を観察することができたが、最下層には寺院造営前の旧表土と考えられる4黒褐色土が厚く見られた。2橙色土は、既報告の第4基壇6-3層に一致するもので、3明褐色土も既報告7層と同じと考えられる。いずれも基壇造成に関わる土と考えられる。既報告によると、基壇西側では雨落ち溝より外側に基壇造成土は見られない。17-4Trの位置は、第4基壇建物の北側柱列東側延長に当たり、東西3間で納まる建物を想定すれば、基壇造成土が延長していない位置に当たるが、17-4Trでは基壇造成土が延長していることを確認した。よって、第4基壇の建物は、東西4間以上の規模だったと考えられる。

## 8. 参道推定地（第8・15図）

**第2基壇正面** 平成13年度までの調査によって金堂正面には灯籠が設置されていたことが判っている。このため、上段平坦面に上がるための階段は金堂正面に在ったと想定された。一方、第3基壇を塔と想定すると、法起寺式の伽藍配置となるため、両基壇の中間線に参道が通る可能性もあり得る。第2・3基壇中間線は地形的に落ち込んでおり（第4図）、その可能性を高めている。

金堂正面の斜面については、17-2・5Trを設定し掘削したが、明確な階段痕跡を捉えることができなかっただけで、その周辺に17-6・7Trを追加設定し掘削した。

比較的厚く堆積した表土直下の2黄褐色土層は、流出土と考えられ、瓦の小片を少量含んでいる。

その下層 6 赤色粘質土は、混入物のない締まった土で、地山と考えられる。下方の 17-5・6Tr ではそれぞれで大きな落ち込みが見られたが、倒木による可能性がある。また、17-2・7Tr でも不定型な落ち込みが見られるが、階段に関わる遺構とは思えない。

17-2Tr 西側では縦方向に延びる溝状の落ち込み (SD07) を検出した。幅約 30cm、深さ約 10cm で、検出長は 1.7m である。SD07 の延長は第 2 基壇の内側 3 間分にはほぼ一致する。

17-2・5Tr からは、鶴尾片 2 点が出土し、内 1 点は第 2 基壇出土の鶴尾と接合した。位置関係からも、17-2・5～7Tr で出土する遺物の多くは第 2 基壇に関わると考えられる。

**第 2・3 基壇中間線** 第 2・3 基壇中間線には 17-8Tr を設定し、掘削した (第 8 図)。地表面に縦方向の窪みが見られたが、少量の瓦片を含む斜め方向の堆積で、床面も水平とは言い難い。粘土質の堆積が多く、雨水等による自然な窪みと判断される。

調査の結果、第 2・3 基壇中間線に参道が存在した可能性は少なく、第 2 基壇正面では SD07 が見られた。確認には乏しいが、第 2 基壇正面に第 2 基壇の内側 3 間分に一致する参道が在ったものと想像される。

## 9. 第 2 基壇東脇侍の台座

第 2 基壇須弥壇については、現位置で埋め戻されていた石材の保存処理を行った。

第 2 基壇須弥壇には、磚として使用された石材の他、東西脇侍の台座が遺存している。西脇侍の台座には東西に並んだ 2 穴の脇侍設置痕跡が見られるが、東脇侍の台座には 4 穴の設置痕跡が残されている。保存処理作業に伴い実施したクリーニングの結果、東脇侍の台座とされる石材の穴は、北側の 1 穴のみが深さ 10cm 程度で止まっていることが確認できた。他の 3 穴が貫通しており、また、既報告では東西の 2 穴には石材片が落ちていたとされていることから、使用された穴は東西の 2 穴のみと推定される。南北の 2 穴は使用されていないだけでなく、北側の 1 穴が穿孔途中であった可能性が高い。

上記より、当初は南北の 2 穴を東西方向に設置する目的で穿孔に入ったが、何らかの不都合が発生したために、90° 方向を変えて穿孔し直されたものと推定される。東西及び南北間の穴の距離はほぼ等しく、不都合になった具体的な理由は不明である。

## 10. 援体壕に関わる遺構 (第 9・13 図)

第 3 基壇北縁を明らかにする目的で設定した 18-4Tr は、旧陸軍が設営した援体壕本体とその内側にあたっている。

援体壕は、基底部からの高さが約 1.2m で、東西方向に約 18m、両端から北へ約 4m 延び、山に接する直前で途切れる。断面形は、北面を垂直に近く切り立たせ頂部には幅 1m 程度の平坦面を有している。南面は約 30° の緩やかな斜面になっている。援体壕で開まれた内側は標高約 33.8m の平坦面となっていた。援体壕内側には、長さ 65cm の米待石製壁地覆石と思われる直方体が、点々と残されており、18-4Tr 内でも 2 基が見られた。

2 基の地覆石はほぼ同様の形状で、約 1m の間隔置いて検出された。いずれも全長 67cm、幅 24cm、高さ 26cm で、北側にはぞを出し、南側がほぞを受けるよう窪んでいる。上面と東西両面は丁寧に削られ平滑になっているが、下面は調整が粗く、内側がやや窪んでいる。地覆石を外すと、下

面には根石が現れる（第9図右）。根石の人半は挙大の自然石だが、一部に古代の瓦片や近代と考えられる煉瓦が使用されていた。煉瓦に刻印等は見られなかった。根石が残っていたことから、この地覆石は原位置を保っていたことが確認できたが、2基の間には根石が確認できない。他に残されている同様の石材は、援体壕内側に接する位置で、東西方向を向くものが多い。よって、援体壕に接して援体壕内側に壁のある建物が建てられていたと思われる。18-4Trで検出した壁地覆は建物の東壁に当たり、付近に入口があった可能性が高い。

未待石製壁地覆石の周辺からは、同一層位でかすかにい状の鉄製品が10数本単位で錆固まって出土しており、建物を放棄した後、上屋についてはある程度片付けられたと思われる。

援体壕からは、三八式歩兵銃の弾と考えられる弾丸1点が出土したほか、火縄銃の弾とも思える球形の鉛玉1点（直徑9mm）が出土している（図版38）。

#### 第4節 遺物について

##### 1. 土器（第16・17図）

16-1は18-3Tr表土中から出土した須恵器蓋である。出土地は旧陸軍が設営した援体壕に当たっている。16-6・7は、援体壕内側から出土した須恵器高壺の脚部である。16-6には貫通しないスカシが見られる。

17-1Trでは、第1基壇造成土下層から不定形の土坑が検出され、須恵器・土師器が出土している。16-2は、SK03から出土した須恵器壺蓋である。16-3も同様のもので、17-1Tr西壁に沿って設定したサブトレンチ内から出土した。いずれもカエリの付く壺に伴う蓋で、口径12cm以下の小型のものである。

16-20は土師器壺（16-11）と同時に出土した須恵器蓋である。高い輪状つまみを持っている。重ね焼きの痕跡が見られる。付近からは、瓶と考えられるもの（16-9・10）、土師器壺（16-11～13）、甌（16-14・15）がまとめて出土しており、生活の場であったことがうかがえる。17-1Tr下方近くでは平成9年度の調査で7世紀代の加工段が検出されており、これらの土器もそれに関わるものであろう。

16-4・5は、小型の壺で、カエリを持つものである。18-1Tr北拡張区の表土中から出土している。18-1Tr西上側には平成13年度調査の第6区としている平坦面があり、焼土が入った土坑や掘建柱建物跡が検出されている。須恵器壺頸部（16-8）も18-1Tr北拡張区から出土した。

16-16～19は、18-1Tr北拡張区から出土した須恵器である。いずれも、表土か黄褐色土から出土しており、基壇直上ではない。16-16はカエリの付く蓋口縁部である。16-17は、擬宝珠つまみを持つと考えられる蓋である。口縁部の形状は不明である。16-18は低い輪状つまみを持つ蓋である。16-19は体部が内湾する壺である。口縁部外面のくびれはない。16-21は高台付壺である。高台が張り出し、器壁が厚い。

16-22は、18-1Tr表土中から出土した、頸部に突帯を持つ壺である。頸部は、肩部の上に接合される。

16-23は、壺の頸～口縁部と判断した。口縁部をつまみ出し直立させる。18-4Trから出土した。

16-24は、壺底部であろうか。底面にはひび割れが目立つ。18-3Tr表土から出土している。

18-1Trでは北拡張区を中心に土師器壺類がまとめて出土した。特に、北拡張区東壁では、10

個体程度が折り重なって見られた。口縁部に明瞭にタール痕を残すものが見られ、灯明皿として使用されたものが多く含まれると考えられる。17-1~4は、高台付の壺で、高台の高いもの（17-1・2）から断面三角形のもの（17-3）まで、器形に違いが見られる。17-3には薄く煤が付着している。17-5は深楕円形の壺である。底部はナデで仕上げている。17-6~9は、体部が直線的に延びる皿である。17-6~8には煤の付着が見られる。17-11~20も皿と思われるものの底部である。17-13・15・19には煤が付着している。17-18は、赤色顔料が見られ、底部に穿孔がある。17-21・22は壺である。いずれも煤が薄く付着する。確認できるものは全て底部に回転糸切り痕を残している。

17-23・24は、柱状高台を持つ皿である。18-1Trから出土しており、底部の切り離しは回転糸切りである。

17-25は、18-1Tr北拡張区で出土した壺底部であるが、内面にタール状の炭化物が遺存している。外側は剥離し、調整は不明である。

17-10は、直線的な体部を持つ壺と考えられるもので、18-2Trから出土した。摩滅により調整は不明である。

## 2. 第1基壇の石製品（第18図）

第1基壇下方の17-1Trでは瓦と石が詰まった土坑（SK01）を検出した。SK01からは18-1が出土している。柔らかい印象の砂岩で、1面が平らに加工されているが、他面は自然面と考えられ、1面が欠損している可能性がある（風化のため判断できない）。形状から小型の礎石と思われるが、SK01では横倒しの状態で検出されており、少なくとも原位置ではない。18-1は、第1基壇に使用された礎石を、後世になって落とし込んだと考えられる。第2基壇では長径が1mを超える大型の礎石が使用されているが、第1・4基壇では長径60cm程度の小型の礎石が使用されている。

第1基壇からは、後述する第3基壇出土石製相輪片と同じ石材を使用した、やや小振りの石製品3点（18-2~4）が出土している。いずれも九輪の外輪と考えられる部材で、18-3には軸部の痕跡がわずかに見られる。いずれも小片のため、外径は復元できないが、第3基壇出土のものに比べ、高さが低く、器壁が薄い。

## 3. 第3基壇出土の石製品（第19・20図）

第3基壇からは塔相輪の部材と考えられる石製品が比較的まとまって出土した。

19-1は凝灰岩製の傘状石製品である。周縁の2片が生きており、平面八角形に復元できる。角の下面には風鐸を提げたと考えられる孔が対で開けられており、鉄芯が残っている。出土状況（第12図）では、19-1直下から風鐸（21-4）が出土しており、21-4は、19-1に下がっていた可能性が高い。風鐸設置痕が残っていることから、平頭ではなく天蓋と判断した。相輪上層に天蓋が乗っているとすると、水煙が存在しない相輪であろうか。凝灰岩製であることから、九輪・擦管と考えられる部材に較べ、非常に軽い。

19-2・3、20-1~3は、砂岩製の九輪外輪である。当地で米待石と呼ばれる石材<sup>(註)</sup>で、加工しやすい反面、非常に脆い。基本的な形態は5点とも同様であるが、復元径が小さいものが、より上層の九輪であると判断した。

19-2は外輪の約1/4に軸が接合できたものである。下面には風鐸を設置する孔が見える。孔は、

下面では長径約2cmの楕円形であるが、内部は2本に分かれしており、断面V字形になる。風鐸は、V字形の孔に鉄芯を差し込んで提げており、鉄心は互いに外側へ突っ張らせることによって保持される。下面と外輪外面は丁寧に調整されるが、九輪内面、軸側面、上面の調整は難で、設置後に見える部分のみが丁寧な仕上げとなっている。

19-3は、軸2本と内輪の破片が接合したものである。19-3によって、第3基壇相輪の九輪が4軸であることが確定した。基本的な形状・調整は19-2と同様であるが、内輪内側についても粗い調整で済まされている。内輪内面の断面形は上側が開く形状になっているが、そうした形状を意識して加工されたように思えない。擦管と考えられる部材には、下端面に雨仕舞いの為の加工が見られるが、19-3内輪にはそうした細工は見られない。

20-1は、外輪のみの破片である。調整が難で、厚みが一定していない。風鐸設置痕等の細工はなく、上下は不明である。

20-2・3は、復元径が大きく比較的下層側の九輪と判断した。19-2・3と較べ、復元径は大きいが、外輪は薄く作られている。いずれも軸の痕跡が残るが、銅板製の九輪と同様に、軸下端部が削り落とされて、外輪が垂下して見えるようになっている。いずれも風鐸設置痕を残す。

20-4～7は擦管と考えられる管状の石材で、上下端部まで接合できたものである。20-4・5は、高さがほぼ等しい。20-6・7については同じ様な高さになるものが無く、他の管状の石材についても、同程度の高さが予想されることから、九輪間に使用される擦管と判断した。端部は、片面が水平に切られているが、他面は内面側に窪むような形状の加工が見られる。雨仕舞いのための工夫と考え、窪みがある面を下端と判断した。高さはいずれも約26cmで、厚さは約6cmである。内面側の調整が粗い。20-6は、高さ約15cmしかない小型の管状を呈す。内径は下端側でも16cm程で、上層に来ると判断される。外面には、半円形の窪みが見られるが、意図的なものか石材自体の自然な剥離なのかは判断できない。下端面の内側には他の擦管と同様に雨仕舞いのための面取りが見られる。20-6は、1/4程度が残存しており、軸が付く可能性は少なく、九輪内輪ではない。九輪よりもさらに上部の宝珠等の部材を支える擦管と判断される。第3基壇の塔相輪には天蓋(19-1)が乗ると考えられることから、天蓋を支えるか、その下にあったかもしれない宝瓶(註2)を支える擦管と考えられる。

20-7は、高さ約34cmの擦管である。この1点のみが極端に高いことから、九輪最下層と伏鉢を繋ぐ擦管と思われる。下端側の内面には面取りが見られる。

20-8は伏鉢と考えられるものである。全形の1/6程度と思われるが、調整が粗く、水平を確定できないので、復元径等は、平安の数字となる。半球形を呈し、擦に触れる部分の内径は約22cmで、20-7に近い。擦を支える部分は上面から約20cmで、その下方は軽くする工夫なのか、一段広く掘り込まれている。上面側には擦管の当たりと思われる平坦面があり、その外径は約33cmに復元される。

#### 4. 相輪関係銅製品

第21・22図には石製相輪と同時に第3基壇から出土した銅製品を図示した。

第21図は風鐸である。風鐸は、平成13年に第3基壇東側の斜面(第5区)から1点が出土しており、計5点となった。

21-1は鐸身横断面が菱形を呈し、頂部に別造りした鉄製の鉢を差し込んだものである。鐸身高9.5cmと小型である。

21-2は、鉢まで一体で鋳造された風鐸で、鐸身の横断面は梢円形を呈し、以前に出土していた風鐸の形状に近い。鉢に鉄輪の一部が遺存している他、内面に鉄製の風招吊り金具が接着している。風招吊り金具は、本来の取り付け位置である鉢内面からは脱落している。鉢内面は脱落し、錆が厚く付着しているため、取り付け方法は判らない。また、吊り金具の小片と考えられる鉄線3点が同時に出土している。鐸身側面と上面には鋳型の合わせ目が残る。

21-3は総高13.1cmを測る大型品である。鐸身の横断面は菱形で、高さに対して裾の開きが狭く、細長い印象を受ける。スカシ穴周辺の湯廻りが悪く、スカシの形状は不定形である。鉢に鉄製吊り金具の一部が残されている。鐸身頂部が非常に厚くスカシ上面は頂部内面線と一致する。風招吊り金具を取り付けるための細工は、肉眼観察では見えない。バリの残り方から、左右の外型、内形の他に頂部も別の型を合わせていたことが判る。

21-4は、鐸身が9cmに満たない小型のものである。鐸身横断面が梢円形を呈し、平成13年度出土品や21-2に近い。比較的丁寧な作りで、鉢部分には面取りの縫痕を明瞭に残す。鉢に付けられた銅環が残っていた。また、鐸身内部の土から風招吊り金具と考えられる鉄線が出土している。21-4は、凝灰岩製天蓋（19-1）直下から出土（第12図）しており、19-1に下がっていたと判断される。

第22図は連弁状を呈した銅製品である。柳葉形の下端を水平に切った形状で、上端を尖らせた連弁形を呈し、反りを持たせている。基部に別材をリベット止めした形跡があるが、別材は厚み以外は判らない。リベットの位置と尖った先端を結ぶ線を中心線と見ると、連弁の膨らみも下端の線も左右対称ではない。器面の状態から、凸面が雨を受けた部分と判断される。凹面側は比較的平滑に残されているが、凸面側は、全面に小さな凹凸が見られ荒れている。出土時には木質と思われる有機質が凸面基部近くに乗っていた（第22図上）が、保存処理に伴うクリーニング時の観察で、有機質と銅製品の間に粘土が入り込んでいること、有機質の纖維方向が一定していない事から、偶然に接触した有機質が、銅の殺菌作用により残存したと判断し、分離した。

蓮弁形を呈した銅製品であることから小型の仏像の光背などの可能性もあるが、出土状況から塔相輪に関わる可能性が高いと思われ、相輪請花の一部と想像される。同型状のもの4～8枚を金属製の輪にリベット止めし、請花としたものではないだろうか。

## 5. その他の金属製品

第1・3基壇の調査では、釘類を中心に多くの鉄製品が出土した。

23-1～4は鉄釘である。23-4は2点が接着している。いずれも18-1Trから出土した。23-7も釘先か。

23-5は18-2Trから出土した大型の釘である。30cm以上の長さがあり、頂部付近で太さ2.2cmを測る。頂部は折り曲げられておらず、叩かれて潰れたような形状を呈し、僅かに広がっている。23-6も18-2Trで出土した鉄製品であるが、頂部がT字形に加工されており、通常の釘とは異なる。

23-8は18-2Trから出土し、鉄線を環状に曲げたもので、吊り金具と思われる。

23-9は、頂部に小さな折り曲げが見られる釘状の鉄製品だが、先端近くで、急激に細くなり、鉤の手状を呈するものである。X線画像では先端は尖っていないが、欠損によるものかどうかは判

断できない。

23-10～14は第3基壇で出土した鉄釘である。23-14には木質が遺存している。

23-15は、頂部を小さく折り曲げた鉄製品で、23-9と同様である。下端部の形状は、欠損のため判らない。18-3Trで出土した。

23-16・17は、かすがい状の鉄製品である。23-16は、断面が薄い長方形を呈しており、釘とは異なる。いずれも18-4Trから出土した。

第24図に示したものは、第3基壇から出土した鉄・銅製品である。24-1・2は、18-3Trから出土した大型の鉄釘で、24-3も釘の可能性がある。24-1・3は、残存長20cm以上の大型品で、23-5と同程度であろう。

24-4～6は、板状の鉄製品で、24-5の鋸には断面円形の棒状製品のスタンプが残る。

24-7・8は環状に曲げられた鉄線である。確認できる部分は、断面方形である。24-8は2本が連結されている。同じグリッドから出土しており、一連のものと考えられる。

24-9は、環状の鉄線に別材が組み合わされたもので、環状になった中に通っている部材は断面方形、環状の部材の断面は鋸により確認できない。

24-10は先端を鉤状に曲げた鉄製品で、23-9に似る。基部が太く、鉤状に曲がった部分を、やや細く造っており、釘とは思えない。

24-11・12は18-3Tr P 2から出土した銅線である。表面はほとんど剥落しており、本来はもう少し太いはずである。P 2は、風鐸設置痕を残す九輪部材(19-3)が出土しており、それに伴う可能性が高い。

## 6. 瓦類

平成13年度報告では、分類の上、基壇毎の数量比・重量比が求められている。よって、特に第2基壇との数量比較を容易に行うため、前報告で採用された分類にできるだけ合わせて行った。

**軒丸瓦** 軒丸瓦は5類7種に分類されている。この内、今回の調査で出土した軒丸瓦は5類6種に止まり、IVb類とされたものは出土しなかった。

25-1はI類軒丸瓦である。過去の調査では3片が知られているが、瓦当部の大きな破片ではなく、詳細な文様構成は判らなかった。中房を一段高くシャープに作り、蓮子の数は不明である。単弁14～16葉に復元でき、蓮弁は圓線で縁取る。間弁の表現は無い。過去の出土品から、1段高い外縁に連珠文が廻る事が判っている。瓦当面には黄緑色の自然釉が薄く付着しており、非常に堅く焼成されている。過去の出土品は、外縁から丸瓦部が一体となっており、別造りした瓦当内区を丸瓦部凹面に接合していることが判っている。丸瓦部凹面には、模骨痕は見られない。18-3Trから出土しているが、表土中のため、第2基壇から落ちてきた可能性も否定できない。

25-2・3はII類軒丸瓦である。上淀廃寺式(註3)の退化形式と言われるもので、単弁10葉蓮華文である。圓線で画された中房に1+4の蓮子を置くことが判っている。外区には太い圓線を巡らせるが、いずれも圓線上に繊維状の压痕が多数見られる。過去の出土例により、丸瓦部には模骨痕が残っていることが知られ、25-2では瓦当最上部に薄い補強粘土で取り付けられている。いずれも、内区には範の木目が写し取られており、傷も確認できる。いずれも緻密な胎土で、還元炎焼成される。この軒丸瓦に似た胎土・焼成の軒平瓦は見られないが、既報告で「須恵器造りの平瓦」と呼ばれる

ものや鶴尾に近い。25-3 瓦当裏面は、外周部に沿って幅1.5cm程度が盛り上がっている。同様の特徴は過去の出土品でも知られている。この部分には、切断されたような痕跡ではなく、瓦当裏面中心部と緩やかな連続面を形成しており、一本造り成形台を思わせる痕跡は見えない。祖形と思われる上淀磨寺1類では、この部分をむしろナデ窪めている(註6)ことが知られている。

25-4～6はⅢa類軒丸瓦で、いずれも第1基壇付近から出土している。単弁14葉蓮華文で、間弁を珠文で表現する。中房は1+6で、范傷は確認できない。いずれも酸化炎で硬質に焼成され褐色を呈す。出土数は極めて少なく、過去の出土品を合計しても、第2・3基壇では各1点しか見られず、第1基壇でも3点に過ぎない。

25-7～14はⅢb類軒丸瓦で、29-1～3も同様であろう。Ⅲa類、南新造院Ⅲ類軒丸瓦と同范である。瓦当部が厚く造られ、丸瓦部取り付け方法が異なる。中房に明瞭な范傷を残すものが多く、25-12には、蓮弁とその圓線を繋ぐ傷が見える。范傷の進行により、Ⅲa類→Ⅲb類に変化したことは明白である。25-8は、丸瓦部頂部の小片であるが、瓦当蓮弁間の珠文が残っており、Ⅲb類軒丸瓦と断定できた。25-13は逆に丸瓦部が剥離したもので、接合部にはヘラによる刻みが見られる。25-8、29-2は還元炎で焼成されるが、多くは酸化炎で焼成され、褐色を呈す。基壇毎の出土数では、第2・3基壇で最多である。

25-15・16、29-4はⅣa類軒丸瓦である。いずれも瓦当部の小片で、丸瓦部の形状は判らない。25-16は、青灰色を呈し、硬質に焼成されているが、白っぽく軟質に焼成されるものが多い。29-4は、裏面を中心に摩滅が進んでいる。

第2図にはV類軒丸瓦を図示した。長門深川磨寺系(註5)と呼ばれる瓦当文様で、天寺平廃寺(註6)、南新造院跡採取品(註7)と同文異范である。瓦当部周囲の2ヶ所に楕型痕があることが知られている。26-1は、ほぼ全体の形状が分かる資料で、全長は30.7cmあり、丸瓦部凹面に模骨痕は見られない。丸瓦部凸面はナデ調整される。瓦当部への取り付け位置はかなり低い。丸瓦部の接合は、瓦当側を窪めて差し込んでいるが、丸瓦部にキザミは入れていない。なお、同文異范の天寺平廃寺軒丸瓦は、丸瓦部にキザミが入っている。V類軒丸瓦は各基壇から出土するが、最も出土数の多いのは第1基壇である。第1基壇での数量割合を見ると、軒丸瓦の大半を占めており、第1基壇での出土割合からIV類軒平瓦とセット関係にある事が明白である。主に第1基壇の建立に使用された瓦と考えられる。

軒平瓦 軒平瓦は既報告で4類6種に分類されているが、1b類軒平瓦は出土しなかった。

27-1は1a類軒平瓦の顎部である。顎面に数条の突帯を配し、その間に指ナデによる波状文を施している。この破片は、瓦当部から最も離れた突帯を中心とした部分で、突帯より後方には波状文が見られない。淡黄白色を呈し、やや軟質である。過去の出土品で見ると、瓦当文様は二重弧文で、青灰色を呈し、硬質に焼成されるものが日立ち、白色に近い軟質のものも見られる。

27-2・3は1c類軒平瓦の顎部である。顎面の突帯間に波状文を施さず、ナデによって仕上げている。いずれも凹面には模骨痕を明瞭に残し、27-2の側面には分割痕跡を残していることから桶巻造りによる成形と考えられる。27-2は淡褐色を呈すが、27-3は還元炎気味に焼成され、白色に近い。

今回出土しなかった1b類には顎面の突帯間に長方形のスタンプ文を組み合わせ、波状文状に見せた文様が付く。

1類軒平瓦は、第2基壇の瓦積み基壇に使用されているほか、第2基壇で最多出土の軒平瓦となっ

ている。一方、第1基壇ではほとんど出土しておらず、主に第2基壇の建立に使用されたと考えられる。

27-4はII類軒平瓦で、教吳寺跡2形式軒平瓦(註8)、南新造院跡1類軒平瓦と同范と考えられる。過去の出土品や南新造院跡出土品で見ると、主文様は両脇から派生する均整唐草文で、上下外区と脇区には珠文を配している。少なくとも下外区と脇区の間は斜めに界線を置き文様帯を分けている。27-4は、凹面側が剥離している可能性が高く、瓦当上部に上外区文様が全く存在しない。平瓦部凹面に統一しているように見えるが、平瓦部凹面に補強粘土を追加しているかも知れない。平瓦部凹面は弧深が非常に深く、模骨痕を残している。下外区には小さな外縁が残っているが、顎部は剥離している。顎部の剥離の状態から、段顎の可能性が高い。酸化炎気味に焼成され、明褐色を呈すが、過去の出土品では青灰色を呈す個体が目立つ。過去の出土品でも基本的に段顎だが、一部には曲線顎に近い傾斜を持ち、小さな段で段顎を表現する個体が知られる。

27-5~9はIII類軒平瓦である。南新造院2類軒平瓦、南新造院瓦窯跡出土軒平瓦(註9)と同范と考えられ、六所神社付近表採軒平瓦(註10)、常楽寺瓦窯跡採集軒平瓦(註11)と同范の可能性が高い。過去の出土品で見ると、II類軒平瓦との違いは中心飾・外区珠文帯・界線の有無で、基本的な文様構成は変化がない。27-5は瓦当部から顎部の小片で、段顎である。27-7・9は小片ではあるが、曲線顎と思われ、27-7も曲線顎の可能性が高い。II・III類軒平瓦は過去の出土品を含め出土点数は少なうないが、小片が目立つ。基本的には還元炎焼成され曲線顎であるが、少数の酸化炎焼成個体や段顎の個体を含んでいる。南新造院跡関連遺跡からの出土品は多くが曲線顎である。

II・III類軒平瓦は、出土個体数では、第3基壇で多数を占め、第2基壇においても比較的多い。第1基壇では例外的な出土に留まっている。

27-10~14、28-1~8はIV類である。長門深川庵寺系(註12)と呼ばれる瓦当文様で、天寺平廃寺(註13)、長者原廃寺(註14)に同文の軒平瓦が知られるが、中心飾とその周囲の子葉が異なり、異范である。IV類軒平瓦は、瓦当幅約24cmと小型で、緩い曲線顎を持つ。平瓦部は一枚造りで凹面の側部・端部を丁寧に削る。顎部や瓦当部の接合が明確に見える例はない。黄褐色を呈すものが多い。北新造院跡で確認できるIV類軒平瓦の全てが、曲線顎であるが、同文異范の天寺平廃寺・長者原廃寺軒平瓦は段顎で顎部を貼り付けている。IV類軒平瓦は北新造院跡で最も多く出土する軒平瓦であるが、基壇毎の出土割合では、第1基壇で圧倒的に多く、第4基壇でも多数を占めていた。

28-9~11は凹面を強く削る平瓦で、軒平瓦であろう。28-9・11は曲線顎になる可能性が高く、28-9は側部の形状からIV類軒平瓦であろう。いずれも17-1Trから出土した。

**丸瓦** 既報告では繩目印きの有無と方向・模骨状の痕跡の有無から7類10種に分類されている。基本的に過去の部類基準に合わせたが、さらに焼成によって、須恵質・土師質に細分した。また、行基式・玉縁式が確認できたものには分類の最後にGまたはTの記号を記して細分している。既報告の分類基準に合わせていて、全ての分類は図示していない。17-1・18-1・2Trを第1基壇、17-3・18-3・4Trを第3基壇、17-4Trを第4基壇、17-2・5~7Trを参道推定地とし、出土数量を第5表に示した。

丸瓦I~III類としたものは、凹面に模骨状の痕跡を残している。

丸瓦I類は繩目が乱雑に斜行するもので第1基壇ではほとんど見られないが、第3基壇では40点

あまりが出土している。行基式となる狭端部を2点確認できたが、玉縁は確認できない。31-1・2はいずれも行基式狭端部で、凹面に横骨の連結が見える。凹面側面の面取りは深くではなく、狭端部の面取りは行っていない。

丸瓦II類は縄目が整然と直行するもので、第1・3基壇とも少量が出土している。狭端部の形状は確認できる破片が無かった。31-3の凹面側部にはケズリ残しの窪みが見られ、分割時の目印であった可能性がある。31-3・4とも、凹面広端部先端まで布が届いておらず、布端のまつり縫いが見える。凹面側面の面取りは深く、側部断面をシャープに作る。広端面の面取りは明瞭でない。

丸瓦III類は凸面が調整され、タタキ痕を残さないもので、第1基壇ではほとんど見られない。第3基壇では、破片点数は一定量あるが、小片が多い事から平瓦I・II類の部分的な破片が含まれている可能性が高い。

丸瓦IV～VI類は、凹面に横骨痕の見られないものである。丸瓦IV類は凸面の縄目が斜行するもので、第1・3基壇共に出土量は少ない。行基式の狭端部が存在することを確認している。

丸瓦V類は凸面の縄目が直行するもので、縄目の間隔が密なものをVa類、縄目が大きく、粗雑なものをVb類としている。第3基壇では多くはないが、第1基壇では土師質に焼成されたVa類が非常に多く見られる。また、第3基壇出土品に須恵質に焼成されたVa類に玉縁が一定量見られた。31-5は断面に粘土帯の維ぎ口を残している。31-6・7は第1基壇から出土した丸瓦Va類で、狭端部は行基式となっている。31-9は玉縁式の個体で、青灰色を呈し、非常に硬質に焼成される。

丸瓦VI類は凸面を調整し、タタキ痕を確認できないものである。第1・3基壇とも土師質に焼成されたものが多量に出土しており、両基壇で最多を占める。狭端部は行基式を確認できる破片が一定量見られる。側面の面取りや器壁の厚さに差異が見られ、さらに細分が可能である。

丸瓦VII類は極端に小型化する行基式丸瓦で、特に凹面に横方向のハケメ状の調整があるものをVb類としている。両者には凸面調整以外の明確な差が無いうえに、VII類自体が器壁の厚さ・凸面の調整具合にばらつきが多いことから、同一の丸瓦と考えて差し支えないように感じられる。両基壇で丸瓦VI類に次ぐ出土量となっている。32-9は凹面にナデを施し、布目を残していない。

33-5は凹面に、須恵器に使用されるものと同様の平行タタキを施しハケメで消すもので、凹面に布目丘痕が見られない。凹面は横方向の強いナデで、型を使用せずに成型した可能性がある。既報告では須恵器造りの平瓦とした平瓦が知られているが、32-5はその出率から丸瓦と考えた。須恵質に焼成され、粒のそろった粗い胎土などは軒丸瓦II類に似る。図示した以外の個体は確認できない。

33-6は土師質に焼成され、凹面に横骨痕を残す丸瓦III類の小片であるが、凸面に赤色顔料が付着している可能性がある。第3基壇から出土した。赤色顔料の可能性があるものは、他には確認できない。

第1基壇出土丸瓦で一定量認められるのは丸瓦Va・VI・VII類で、玉縁式は少ない。既報告で少ないと見られていた丸瓦VII類が一定量以上を占めている。第3基壇でも丸瓦VI・VII類が多い点は変わらないが、V類の割合がやや少なくなっている。一方、凹面に横骨痕を持つ丸瓦I～III類は、第1基壇では例外的にしか見られないが、第3基壇ではやや多くなっている。

**平瓦** 既報告では縄目叩きの有無と方向・横骨状の痕跡の有無から6類8種に分類されている他、平行叩き・格子叩きが施されるもの、凸面布目の平瓦、須恵器と同様の整形を行った平瓦が紹介さ

れている。個々の瓦を見ていくと、同様の調整であっても胎土・焼成の違いがあるものや、離れ砂使用の有無などの差があり、さらに多くに細分可能である。

平瓦Ⅰ類は凹面に模骨痕を残し、凸面に細かい縦目タタキを不定方向に施している。34-1は広端部を厚く作っており、広端面は丁寧なケズリを施している。臺き足は確認できないが、無文軒平瓦の可能性がある。タタキは弧状を描く。34-2・3は端部の小片で、いずれも凹面端部まで布が届いていない。凸面側の端部は未調整である。36-1は縱方向に直線的に割れた平瓦Ⅰ類であるが、割れは、凸面側から連続的な打撃によって割れているように見え、割裂斗瓦の可能性がある。全形の判る36-2では、広端と狭端の差が少なく、長方形に近い平面形を持つことが判る。36-2は模骨痕が明瞭でなく、凹面に糸切り痕を残し、粘土板の接合面が見られる。36-5も模骨痕が明瞭でないもので、隅切り瓦である。隅部分は焼成前に切断され、面取りを行わない。37-3は、平瓦Ⅰ類に含めているが、極端に薄い。第3基壇周辺から13点が出土している。平瓦Ⅰ類は、第1・3基壇とも少量が出土している。

平瓦Ⅱ類は模骨痕を残し、縦目タタキが直行するもので、縦目が細かいものをⅡa類、やや粗いものをⅡb類としている。35-1は、凸面に僅かに横方向のナデが施されており、軒平瓦Ⅰc類の可能性がある。Ⅱa類に分類される35-3・5は模骨の幅が狭いが、Ⅱb類の35-2はやや広く、側面の調整も異なる。36-3はⅡb類の小片と考えられるが、凹面には斜め方向に延びる幅2~3cmの粘土帶の痕跡がある。平瓦Ⅱ類のはほとんどは粘土板によると考えられるが、一部に粘土帶の痕跡を残すものがあり、厚さと側面調整から細分できる可能性がある。36-8は凹面の模骨痕をハケメ状の工具で消している。37-8は、Ⅱa類かⅣa類と考えられる。凹面をハケ状工具で丁寧に調整しており、模骨痕の有無が確認できない。側部の断面形状はⅡ類に近い。平瓦Ⅱ類は、第1基壇ではほとんど出土しないが、第3基壇では少量が出土した。

平瓦Ⅲ類は、凹面に模骨痕を残す平瓦の内、凸面が調整され、タタキ痕が見えないものである。35-7は薄く作られている。36-9は側面調整を2段に行っており、凹面側から分割界線が入り、凸面側から斜めに側面調整を行おうとしているが、凹面側まで達していない。両切断面間の水平部分は折れ未調整である。37-3は土師質に焼成された平瓦Ⅲ類で、側面はケズリのみで面取りは行わない。また、広端面は未調整である。凸面はⅡa類と同様の縦目タタキをナデ消そうとしている。平瓦Ⅲ類は、第1基壇ではほとんど見られないが、第3基壇では一定量が出土している。

平瓦Ⅳ~VI類は縦目タタキを残す平瓦の内、模骨痕を持たないものである。各分類の最後に、凸面に離れ砂を有すものにはSを、凹面にハケ状工具で調整を加えるものにはHを加えている。

平瓦Ⅳ類は凹面に模骨痕が見られないものの内、凸面に縦方向の縦目タタキを明瞭に残すものである。縦目が整然と並ぶものをIVa類(30-4、37-5・6・8、38-1・4~6、39-1~6)、粗雑に直行するものをIVb類(37-7、38-2・3・7、40-1)としている。30-4・37-6凹面には、一見すると模骨痕に見える縦方向の圧痕が残る。この圧痕部分では布目が消えており、模骨痕ではない。一枚造りの成型台から外した後の側面・端面成型時か、乾燥時に付いた痕跡と判断される。数枚が多くはないところから、数枚単位で乾燥させる場合の最初の1枚を支えるスノコ状の台であった可能性がある。同様に板状の圧痕を残すものには、分類の最後にIを記している。30-4は、広端部右面を斜めに切断した隅切り瓦である。37-7凹面はスノコ状に組まれた圧痕を明瞭に残している。37-8は凹面にハケメを施し、布目を消す。平瓦Ⅳ類は第1基壇で突出して多く、第3基壇でも一定量を占める。

平瓦V類は、模骨痕の無いものの内、凸面の繩目が乱雑に施され、繩目間に透き間の空くもの(39-7)である。39-7は原体幅約4.6cmの繩目タタキを1cm程度の隙間を開けて施している。凹面は糸切り痕を明瞭に残す。端面・側面とも凹面側から面取りするが、面取り幅は約1cm程と狭い。第1基壇では一定量が見られるが、第3基壇ではほとんど見られない。

平瓦VI類は模骨痕の無い平瓦の内、繩目タタキの方向がそろわないもの(30-1・2、39-9)である。30-1・2はいずれも軒平瓦の可能性があるが、単位の短い繩目タタキを不規則に施している。凹面側には糸切り痕を残す。39-9は、横方向を中心細かい繩目タタキが見られる。平瓦VI類の大多数は斜め方向が中心のタタキで、横方向が優位となる個体は少ない。平瓦VI類は各基壇で見られるが、数量は多くはない。

平瓦VII類は模骨痕がなく、凸面の繩目タタキを消すものである。タタキの消し方にはケズリが目立つもの(30-1)と、ナデ主体(38-8~10、39-8)のものがあり、ケズリが中心になるもの多くは軒平瓦であろう。ナデが主体の平瓦VII類は各基壇で多く出土している。

模骨痕が見られず、凸面の離れ砂によってタタキが認識できないものを平瓦VIII類とした。

平瓦IX~XII類は、繩目以外のタタキによるもので、いずれも凹面に模骨痕は確認できない。

斜め方向に間隔の広い平行タタキが施される平瓦をIX類とした。40-3は、隅切り瓦の可能性があるもので、凹面には糸切り痕を明瞭に残している。端面・側面共に凹面側から面取りを行う。

菱形に見える斜格子タタキが施される平瓦をX類とした。40-4は第3基壇SD01から出土しており、表面が黒変し火を受けた可能性がある。側面の面取りは明瞭でない。

小さな格子タタキを施すものをXI類(40-5)とした。タタキが当たっていない部分が多い。既報告では繩目タタキと併用するものが知られている。第1・3基壇からごく僅かに出土した。

およそ20×15mmの大きな格子タタキを施すものをXII類とした。第3基壇から少量が出土しているが、他のトレンチでは見られない。良好に残存する個体が無く、図示しなかった。

40-6~10は既報告で須恵器造りの平瓦と呼ばれている瓦である。凸面は深く乱雑な平行タタキを施すもの(40-6)と須恵器壺に見られる平行タタキの後、横方向のハケメを入れるもの(40-7~10)がある。40-6凹面は縦方向に板状の浅い溝みがあり、模骨状の型を使用した可能性がある。凹面側は縦方向のハケメ調整が加えられており、型の有無を確定できない。40-7~10の内面は横から斜め方向の強いナデが施される。型が無い可能性が高い。これらの瓦は、各基壇から数点ずつが出土している。

また、既報告で鋸歯状タタキとしているタタキを持つ平瓦は、平成17・18年度には出土しなかった。

40-11・12は凸面布目の平瓦である。40-11は凹面側にも僅かに布目が見える。凹面はハケメ調整が施される。側面ナデ、端面ケズリである。平成17・18年度調査で出土した凸面布目瓦はこの2点だけである。

基壇別の出土数量では、第1基壇では平瓦IV類が卓越し、VII類も多いが、第3基壇ではまとまりがない。模骨痕を持つ平瓦I~III類を比較すると、第1基壇では少量しか見られず、第3基壇では一定量が見られる。

**道具瓦と考えられる瓦** 41-4は平瓦IV類であるが、片側の端部を丸く打ち欠いたもので、面戸瓦の可能性がある。狭端側左側部は凸面側から、広端側左側部は凹面側から連続的に打ち欠いている

ように見え、作業地で回しながら打ち欠いた様子がうかがわれる。

41-2は熨斗瓦と考えられる。平瓦IV類と似た成型で、極端に薄く、湾曲が見られない。41-3は無板状を呈し、端部に小さな切り欠きを設けている。41-4も小さな板状を呈する。文様等は見られない。熨斗瓦か埠であろう。

41-5～7は片面の側部に側縁に沿った沈線を入れるもので、埠であろう。41-6・7は糸切り痕を残すのみだが、41-5には文様が有った可能性もある。

41-8は鬼瓦である。既報告の鬼瓦と同范で、右日の上の部分である。右目が剥離し脱落している。

**鶴尾** 北新造院跡では鶴を突き出で表現し、縦帶の前方に鱗状の文様を持つ、いわゆる山陰系の鶴尾が知られている。今回の調査で鶴尾片は、第2基壇正面の参道推定地と第1基壇の東よりで小片2点(41-9・10)が出土した。この内41-9は既報告の第43図・44-2と接合し、両者をつなぐ事となった(41-9左下)。41-9は脊稜をまたぐ小片で、外面は平行タタキの後ハケメで調整される。脊稜を挟み左右面で、調整の程度が異なる。また、湾曲も右面が緩やかに湾曲するのに対し、左面は直線的で、左右対称ではない。内面には同心円文の押さえ具痕跡が残るが、外面と同様に左右面で押さえ方が異なる。接合資料では、左面の一部から脊稜を跨ぎ、右腹部接合痕まで続く破片ができ、全体像の復元に大きく貢献した。41-10は鱗状文様の一部を含む小片で、全面にハケメが施されている。既報告掲載資料の再検討の結果、鶴尾全体像がある程度推定できるようになったほか、部位の同定作業から2個体が存在する可能性が高まった。2個体分の鶴尾は、製作技法や胎土・焼成に差は見られず、ほぼ同様の鶴尾が対になって使用されたと思われる。過去の調査を含め、第2基壇周辺からしか出土していない事から、これらの鶴尾は金堂である第2基壇で使用されたと考えられる。

一方、旧大社町(現出雲市)が保管する資料には北新造院跡付近で採集された鶴尾片が少なくとも2点(注1)知られている。1点は鱗状の文様を残す山陰系鶴尾片であるが、焼成がやや軟質で、41-9・10や既報告鶴尾とは別個体の可能性がある。旧大社町保管の鶴尾片には「山代射的場」と注記されており、北新造院跡から山代二子塚古墳付近まで広がっていた旧陸軍演習場内のどこかで採取されたようである。もう1点は鱗状の文様が無く、等間隔の沈線文が描かれるもので、やや小型らしい。北新造院跡発掘調査では、いずれの個体も確認できないことから、既に削平され、調査が及んでいない講堂や中門・南門などのいずれかで鶴尾が使用されていた可能性がある。

註1 石材については、島根県立三瓶自然館主任学芸委員会中村唯志氏、米待ストーンミュージアム館長永井泰氏から指導を受け、両者によって、米待石であるとの指摘を受けた。

永井氏によると、米待石の岩脈は松江市宍道町から松江市乃白町あたりまで採掘が可能であり、傾向として、東に向かうほど(乃白町側へ向かうほど)細密になる。第3基壇出土の米待石は、米待石としては非常に細密で、乃白町近辺で採掘された可能性が高い。米待石としては比較的丈夫で、風化にも強いとのことであった。

註2 現存する五重塔で、相輪に天蓋が存在するのは室生寺しかなく、室生寺五重塔では宝瓶に天蓋が架かっている。

『因宝家生寺五重塔(災害復旧)修理工事報告書』奈良県教育委員会2002年

註3 『上淀廃寺』淀江町教育委員会1995年

註4 妹尾修三「山陰に広がる上淀廃寺式軒丸瓦」『考古論集一川越哲志先生退官記念論文集一』2005年

註5 『長門深川廃寺』山口県教育委員会1977年

- 内田律雄『出雲長者原魔寺と神門郡口置郷』『青山考古』第7号青山考古学会1989年
- 註6 穴道年弘「大寺平魔寺」『八雲立つ風七記の丘84』島根県立八雲立つ風七記の丘1987年
- 註7 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書IV』島根県教育委員会1985年  
以下、南新造院跡出土瓦の分類は、上記報告書による。
- 註8 『教吳寺跡』安来市教育委員会1985年
- 註9 『小無田II遺跡発掘調査概報』松江市教育委員会1997年
- 註10 『島根県文化財調査報告5』島根県教育委員会1978年
- 註11 『島根県生産遺跡分布調査報告3』島根県教育委員会1985年
- 註12 註5に同じ。
- 註13 註6に同じ。
- 註14 『出雲・上塙冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』島根県教育委員会1980年
- 註15 内田律雄「『出雲國風土記』の教吳寺と新造院」『出雲古代史研究』第六号1996年

## 第4章 考 察

### 第1節 瓦について

軒丸瓦・軒平瓦 軒丸瓦・軒平瓦の各基壇毎の出土数量は第2表のとおりである。出土数量は平成13年度までに主要部の大半を調査した第2基壇が145点で最も多い。第1基壇からは65点ではば半分となり、第3基壇は50点で約1/3の量にしかならない。

軒丸瓦I類は、文様構成や丸瓦部の取り付け方法から、非常に古いと考えられるが、出土量が極めて少ない。外縁に連珠文を持つ軒丸瓦は県内の古代寺院では知られていないが、大井古窯跡群の四反田窯跡（平林窯）で、丸瓦部が連続する軒丸瓦の小片が採取<sup>(註1)</sup>されており、注意される。

軒丸瓦II類は、上淀廃寺式の影響下にあるもので文様構成はかなり崩れているが、瓦当が薄く、接合部が高い位置にあり、古式の様相を残している。上淀廃寺では瓦当裏面の下半外周をナデて窪ませる特徴が知られているが、軒丸瓦II類はむしろ盛り上げた形状になっている。外区の太い巻線には繊維状の圧痕が多数見られる一方、内区主文様と外区巻線の高低差がほとんど見られない。このことから、範から外した瓦当を、瓦当面を下にして置き、丸瓦部の接合が行われたという想像はできないだろうか。本来、高さのある外区巻線を形成しておきながら、それを下に向けて設置したために、巻線が潰れ、その分裏面が盛り上がったとも考えられる。軒丸瓦II類は須恵質に焼成されるものが多く、瓦当面に離れ砂を使用し、ざらついた印象の特徴的な胎土となっており、同様の胎土の軒平瓦が見られない。最も近いと思われる瓦類としては、須恵器造りの平瓦となるが、軒丸瓦II類の丸瓦部には模骨痕が有ることから須恵器造りの平瓦と技術的な共通点はない。

既報告で創建期の瓦に想定されているのは軒丸瓦III類である。これに組み合う軒平瓦は出土頻度から軒平瓦I類が想定されていた。しかし、酸化炎で褐色系に焼成されるものが多い軒丸瓦III類と、焼成にばらつきの多い軒平瓦I類がセットとして良いかどうかは躊躇する。軒平瓦I類は第2基壇の基壇外装に多用されていたもので、第2基壇でのIII類軒丸瓦との数量比を素直に見ることはできない。また、第3基壇出土品で見ると、額面だけでも判断できるI類軒平瓦6点に対し、III類軒丸瓦は18点にもなる。III類軒丸瓦は、丸瓦部の接合方法の違いからIIIa類とIIIb類に分けられ、範囲の進行からIIIa類→IIIb類への変化が判っている。この内、古相のIIIa類は第2・3基壇とも1点しか見られず、第2・3基壇では主体的には使用されていない。

軒平瓦II・III類は、今回の調査では第3基壇のみから出土しており、第1基壇では見られない。過去の調査分を含め、第3基壇から計9点が出土したことになる。両者の珠文帯の有無と中心飾り以外に文様の差はない。また、軒平瓦II類は段頸が、III類は曲線頸が主体だが、それぞれ両者が見られ、暫時的な変化が伺われる。軒平瓦II・III類と同範（同文）と考えられるものは、山代郷南新造院跡<sup>(註2)</sup>、南新造院瓦窯跡<sup>(註3)</sup>、教吳寺跡（野方廃寺）<sup>(註4)</sup>、から出土している他、出雲国府跡<sup>(註5)</sup>、常楽寺瓦窯跡<sup>(註6)</sup>で採集されている。南新造院跡II類（北新造院跡のIII類）は、特徴的な四葉蓮華文である南新造院跡II類軒丸瓦とセットとなると考えられており、その同範軒丸瓦は中竹矢遺跡<sup>(註7)</sup>で出土し、大寺遺跡<sup>(註8)</sup>でも採取されるなど、出雲地方一円で見られる。南新造院瓦窯跡では考古地磁気測定や流入土中の七器から8世紀中頃の年代観が与えられている。南新造院跡II類軒丸瓦は、シンプルな単弁四葉蓮華文で、同様の文様構成を持つ軒丸瓦としては、松の前廃寺、平の

前廐寺が知られている。松の前廐寺軒丸瓦は蓮弁の鏽部分が窪んでいるほか、丸瓦部取り付け位置も極端に下がっている。瓦当面径が13cmしかなく、その小ささはむしろ軒丸瓦V類に近い。

第1基壇出土の軒丸瓦・軒平瓦には少量の軒丸瓦III・IV類、軒平瓦I・III類を含んでいるが、86%を軒丸瓦V類、軒平瓦IV類が占めている。よって、第1基壇の建物に主として使用されたのがこの組み合わせと言え、この軒丸瓦・軒平瓦はセット関係と考えられる。長門深川廐寺系<sup>(註10)</sup>と言われるこのセットと同様の組み合わせは、斐川町天寺平廐寺<sup>(註10)</sup>で知られているほか、山雲市長者原廐寺<sup>(註11)</sup>に軒平瓦が知られている。また、調査では出土していないが、南新造院跡でも表採資料が知られている。長門深川廐寺軒丸瓦は、唐草文が反転しないと言う文様上の違いの他、瓦当面径が約18cmと大振りな瓦である。一方、県内の天寺平廐寺や北新造院跡V類は、13cm前後しかなく、特徴的な小ささとなっている。年代を確定する根拠は持ち得ないが、軒平瓦III類が8世紀中頃とすると、それ以降と考えざるを得ない。

軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせについては、むしろ混沌を極める状況となつたが、創建期に使用される軒丸瓦の候補としては軒丸瓦I・II・III類のいずれかが考えられ、軒平瓦には軒平瓦I類が妥当であろう。また、無文の軒平瓦も古い可能性がある。

軒平瓦II・III類は、南新造院瓦窯跡などの成果から8世紀中頃と考えられるが、それに組み合う軒丸瓦が、今回ほとんど出土していない軒丸瓦IV類とは考えにくい。軒丸瓦IIIb類が継続使用されている可能性がある。

8世紀後半以降に軒丸瓦V類・軒平瓦IV類が使用され、同時に鬼瓦の付け替え（新設？）も行われた、と考えられる。

第3基壇ではIIIb類軒丸瓦が卓越しているので、その造営開始は第2基壇よりやや遅れると判断される。第1基壇は軒丸瓦V類・軒平瓦IV類が主的なので、8世紀後半以降に造営されたと考えられる。

**丸瓦・平瓦** 整理期間が短いため、丸瓦・平瓦については十分な考察ができなかつたが、気づいたことを列記しておく。

丸瓦は既報告では模骨痕のあるものから模骨痕の無いものへの変化が想定されているが、軒丸瓦I・III類の丸瓦部に模骨痕が見られないことは無視できない。第1・3基壇川土丸瓦は、いずれも模骨痕が無く、凸面を調整する丸瓦VI類が主的となつてゐる。

平瓦IV類などには、凹面に板状の圧痕が見られる個体がある。圧痕内では布目が消えており、桶巻造りによる模骨痕でないことが明確である。南新造院瓦窯跡では、平瓦IVb類に似た一枚造りの平瓦が生産されており、凹面に板状圧痕を持つものが含まれる。南新造院3号瓦窯跡からは軒平瓦III類と同様の瓦が含まれておらず、平瓦IVb類の多くは、8世紀中頃であろう。南新造院瓦窯跡では、丸瓦の割合が少ないが、知られているものは模骨痕の無い凸面調整した行基式で、丸瓦VI G類に似る。北新造院跡第1・3基壇での出土割合でも、丸瓦VI類と平瓦IV類が多く、組み合わせとして矛盾はない。

極端に小さく見える丸瓦VII類は、既報告では大きな数量割合を占めていない。明確に規格が異なることから個別の差し替えには向かないこの丸瓦は、最低でも屋根単位の葺き替えでなければ使用できないと考えられるが、既報告での数量割合では屋根単位となるような数量割合に見えなかつた。しかし、今回の調査では、第1・3基壇とも一定の割合を占めており、屋根単位程度の葺き替えを

想定できる。既報告では「極端に小さく小片でも確認できる」としていたが、分類を進めていくと厚さのばらつきや歪みによる差異が非常に大きい事が判り、狭端部以外の破片は迷うものが多く、他の分類に紛れ込んだものは少なくないだろう。また、丸瓦VII類の内面調整は縄目タタキ未調整のものから完全にナデ消すものまで様々にあり、小片の分類漏れは、各分類中にバラバラに含まれる。丸瓦VII類は、大きさが軒丸瓦V類に近く、軒丸瓦V類・軒平瓦IV類に伴う可能性が高い。平瓦は数量割合からはVII類が考えられるが、確証はない。

須恵器造りの平瓦としたものの内、深い平行タタキを施すもの(40-6)は、四反田窯跡表探資料(註12)に似たものがある。大井古窯跡群では、山津窯跡(註13)で山陰系鶴尾2点が知られているほか、少量の瓦が採集されている窯跡がある。

鬼板瓦は過去の調査では第1基壇から2点(内1点は完形)、第2基壇から12点が出土しており、今回の出土も第2基壇正面の17-5Trからであった。過去の調査を含め、出土した鬼板瓦は全て同範と考えられ、軒丸瓦V類・軒平瓦IV類と同時に使用されたと考えられる。既報告の鬼板瓦には、鼻の穴の表現が有るものと無いものがある。鼻上部に釘穴があり、前歯直下に丸瓦受け部が空くものは、鼻の穴の表現があり、釘穴が無く、前歯下端から2cm程度の無文帯が付くものには鼻の穴の表現が無い。両者は使用場所が異なると考えられる。

**鶴尾の復元(第43図右)** 今回の調査で出土した鶴尾片は、小片がわずかに2点出土しただけであるが、脊稜(註14)の小片1点が、既報告の2点を繋いで接合できることが判明した。非常に大きな破片となつたことから、鶴尾の全体像を復元する手がかりになると想え、過去の出土鶴尾片全てを再検討した。これ以上の接合資料は見られなかったが、既報告において基底部と考えられていた既報告15-2が右側面頭部近くの破片であることが判明したのは、前述のとおりである。

各破片から確定した位置関係は次のとおりである。

左面においては基底部から半円形スカシ下端までの破片があり、半円形スカシ下端の高さは22.5cmである。

左面の一部から脊稜を経て右内面腹部接合位置まで及ぶ破片があり、右半円形スカシの一端をかすめている。脊稜と半円形スカシの位置関係、脊稜と腹部の位置関係が決定した。

右面鶴端部から腹部接合痕までの破片があり、鰐の出は約15cmである。なおこの破片は、鰐の位置関係から脊稜を含む破片と重なる位置関係にあり、別個体である。胎土・焼成に差はなく、金堂大棟上で対になる個体と考えられる。

頭部の破片から、当初縦帯と考えられていた突帯と鱗状文様が頭部近くまで達する。頭部が半円形に近い断面であるとすると、頭部基底部の幅は約50cmになる。

**山陰系鶴尾** 北新造院跡で出土した鶴尾は段型を突帯で表現し、胸部に鱗状の文様を持つ山陰系鶴尾と呼ばれるものである。完全に復元できる例が無いが、縦帯前方に鱗状文様を沈線で表し、段型がほとんど見られず、内外面にタタキ成型の痕跡を残すとされるもので、玉鉢塔ヶ坪廃寺(註15)や上淀廃寺など(註16)で出土が知られる。今回の検討から、北新造院跡出土鶴尾は、從米、縦帯と考えられていた突帯が、頭部直近まで続き、鰐部の突帯に正段型の愈縫はあったと考えられる。山陰系鶴尾の分布は山陰両県にまたがるが、その分布については以前から上淀廃寺式軒丸瓦や頭面施文の重弧文軒平瓦の分布に重なる可能性がある事が指摘されている。

一方、鶴尾に見られる平行タタキや同心円文押さえ具の痕跡は須恵器工人の製作によることが推

定される。事実、山津窯跡からは山陰系鶴尾の破片2点が出土しており、須恵器生産を中心に操業していた山津窯跡で鶴尾を生産していたことが判っている。しかし、山津窯跡で知られる鶴尾片は突帯の隆起が小さく、北新造院跡出土の鶴尾とは異なる。

## 第2節 第3基壇出土の相輪関係遺物

第3基壇からは石製の相輪部材がまとまって出土した。

第3基壇出土相輪関係遺物には、石製の伏鉢・擦管・九輪と、小型の風鐸5点がある。また蓮弁状銅製品は、出土状況から相輪請花の可能性がある。一方、凝灰岩製で傘状を呈した石製品(19-1)は風鐸設置痕跡があり、出土状況でも風鐸と共に出土したことから平頭ではなく天蓋の可能性が高い。

露盤と考えられる部材は出土しておらず、木芯金属貼り、若しくは金属製だった可能性がある。その上に乗る石製伏鉢(20-8)は基部径51cmで、内面上部に深さ11.5cm、復元径20.5cmの擦を受ける穴が見える。蓮弁状銅製品は、一連の出土であることから請花の1葉と考えた。基部にリベット留めされた別材が残存していることから金属製のリングに固定され、擦管の周囲にはめ込まれたと考えられるが、伏鉢上面や擦管にそうした痕跡は確認できない。

擦管は、両端が残る破片が少ないが、少なくとも最も小さい20-6、最も大きい20-7は各1点しか見られず、図示していない擦管の小片についても、中間的な高さである20-4・5にはほぼ等しいと考えられる。これらの擦管が九輪間に位置する可能性が高い。20-7だけが高さが高いことから相輪最下層で伏鉢の直上に載ると判断した。極端に小さい20-6は、九輪より上の龍車や宝珠に関わると思われる。

外径や形状が判断できる九輪は5点あり、この内、比較的口径の大きな20-2・3は軸下面が削り取られ、外輪を垂下させているが、口径の小さい19-2・3、20-1は外輪下面と軸下面が一致している。通常の銅製九輪であれば、外輪を支える軸は上面にあり、外輪を垂下させる形状となっているが、20-2・3の外輪の垂下は、銅製九輪を忠実に模したものと推定でき、見える可能性の高い下層の九輪に使用したと考えられる。一方、垂下させないものは口径の小さいものに限られており、下からは見えにくい上層側の九輪に使用されていたと思われる。

19-1は、出土状況から風鐸を伴う天蓋と判断でき、平頭ではない。通常の塔相輪は、九輪の上部に水煙を乗せているが、水煙を欠き、天蓋を乗せる例は室生寺五重塔のみが現存<sup>(註1)</sup>する。室生寺五重塔では天蓋の下に宝瓶が置かれている。北新造院跡に置いても天蓋を架ける必要がある何かが存在したと考えられる。出土遺物にはそれを思わせるものがないが、室生寺五重塔と同様に金属製の宝瓶が用いられたのではないだろうか。

相輪が乗る塔であれば、三重塔か五重塔であろう。両者の初層の平面形は同じなので、造構の状況からどちらであるかを判断することはできない。第3基壇出土瓦は各種が混在し、相輪関係遺物にも火を受けた可能性があるものを含んでいるので、ある程度長期間に渡って建っていたことが想定できる。五重塔は柔構造であり、地震や大風に対し揺れることによって耐えているが、脆い石製相輪が五重塔の大きな揺れに長期間耐えることは考えにくい。よって、五重塔よりは揺れの少ない三重塔であったと思われる。以上のことから、北新造院第3基壇の塔は、水煙が無く、天蓋を架けた宝瓶を乗せる三重塔であったと想像される。

古代の塔で相輪に石材を使用する例については、既に原田憲二郎氏などの研究<sup>(註18)</sup>があり、全国で約20例が知られている。その内訳は第12表のとおりであるが、その多くは露盤だけを石材で作るもので、九輪などの相輪本体を石材で作る例は、山村廃寺（ドドコロ廃寺）、三須廃寺・多田廃寺、中西廃寺の4例に過ぎない。九輪に石材を使用した山村廃寺（ドドコロ廃寺）、三須廃寺・中西廃寺では、いずれも6軸で、外輪の高さが低く径が大きい扁平な九輪になっている。北新造院跡第3基壇の石製相輪は4軸で、径が小さく分厚い外輪であり、上記3遺跡との技術的な関係は全く想定できない。しかしながら、三須廃寺出土品に天蓋とされているものが含まれている点は注意を要する。

### 第3節 伽藍配置と整備の過程

**各基壇の位置関係** 今回の調査によって、各基壇の位置・規模が概ね判明した。各基壇の規模と主軸方向は、第11表のとおりである。金堂である第2基壇に最も近い主軸を取るのは第3基壇で、瓦から推定される建設時期の近さを追認する。第1基壇は、第3基壇東側の第5区掘立柱建物や第1基壇西上の第6区掘立柱建物などに近い。下方に位置する第4基壇は、真北に近い。各基壇間の距離は、第1基壇東縁から第2基壇西縁までが約9.6m（約32尺）となっている。一方、第2基壇東縁から第3基壇西縁までは約9m（約30尺）となっており、第3基壇が僅かに近い。第1基壇南縁から第4基壇北側雨落ちまでは約26.4m（88尺）となっている。面的な位置関係では、第2基壇を軸とすると、第3基壇は約2m北へ下がった位置に当たるが、第1基壇はほぼ第2基壇に揃えている。また、第1基壇と第4基壇は基壇中心軸を揃えている可能性があるが、第4基壇の建物規模を確定できないので不明である。

**第4基壇** 今回の調査によって、第3基壇が塔であった事が確定的となった一方、第4基壇が塔ではなかったことが推定できるようになった。第4基壇は、身舎の柱間が10尺に復元でき、北新造院跡においては最も大きな建物である。東西の柱間が3間で収まらないこと、身舎の柱間が大きいことから講堂が想定される。既報告によって、北西隅の位置は確定しているので、東西棟の建物を復元すると、金堂正面を塞ぐ事になる。よって、第4基壇の建物は南北棟と考えられ、東西4間、南北5間以上であったと想定できる。金堂南西側に東向きの講堂を置く例は、夏見廃寺<sup>(註19)</sup>が知られており、夏見廃寺講堂は南北7間の規模である。

平成17年度の調査では、第4基壇からは軒丸瓦・軒平瓦は、出土しなかった。既報告の出土数量では、軒丸瓦V類、軒平瓦IV類が卓越しており、第1基壇と同時期の可能性があることを指摘されている。しかしながら、第4基壇は第1基壇の真下に当たり、第1基壇の瓦が相当量混入していると考えられる。第1基壇でほとんど出土しないIII類丸瓦を一定量含んでいることから、第1基壇に先行する可能性も考えられる。

**第1基壇** 第1基壇は3×3間の方形堂と考えられるが、第3基壇と共に心礎の痕跡が見られない。しかしながら、金堂の真横に立地していること、塔である第3基壇と対称に近い位置関係で、基壇規模が一致すること、第3基壇とは別規格の石製相輪片と思われる石材が出土していることから、塔の可能性が考えられる。

**第1基壇** 第1基壇は北側柱列の礎石が残っており、主軸方向はN-9°-Eを指す。金堂である第2基壇がN-6.5°-E、礎石位置が確定できない第3基壇がN-7°-E辺りと考えられる事から、僅かに東へ振って

いる。第1基壇から出土する軒丸瓦・軒平瓦は、北新造院跡で最も新しいと考えられる軒丸瓦V類、軒平瓦IV類が大半を占める事から、北新造院の主要伽藍の内、最後に建てられたと考えられる。

第1基壇下層には須恵器・土師器を含む加工段が存在したと考えられる。出土土師器には、煮炊き具など生活に直結した器種が目立つ一方、仏具は含まれていない。これらの土器は、小型の蓋坏とカエリの付く蓋に代表される時期と8世紀後半以降の2時期が存在するようである。直径10cm前後の小型の須恵器蓋坏は、7世紀後半台まで下げて考える向きもあり<sup>(註20)</sup>、カエリの付く蓋に近い可能性もある。輪状つまみ付き蓋の存在を考えると、第2基壇建設に携わった工人に関わる可能性もあり得る。これらの土器が寺院建設に携わった工人に関わるとすると、第2基壇建立時には、第1基壇付近を造成する意図が無かったことになる。

**参道** 参道の構造は明瞭でなかったが、第2基壇正面に付く可能性が高いと推定した。金堂の東西に双塔を置く場合、金堂正面が中軸となることから、当然の位置であるが、前述のとおり、第1基壇は当初計画に無かった可能性がある。金堂の東に塔を置く法起寺式伽藍配置を計画していた場合には、主軸が第2・3基壇中間線になるはずだが、17-8Trには参道の痕跡が見られなかった。参道の位置が、第2基壇正面だったとすると、第3基壇すら当初計画に無かった可能性があり、創建当初は金堂だけを計画していたのかもしれない。

**第3基壇** 第3基壇には天蓋を戴く三重塔を想定した。その建立時期は既報告では「第2基壇と同時かやや遅れる」としていたが、参道位置の推定から、当初計画に無かった可能性も高く、確実に遅れると思われる。第2基壇が鶴尾と重弧文軒平瓦に示される時期とすると、第3基壇の建立は軒平瓦II・III類が大きく関係するのではないだろうか。

**伽藍配置の変遷** 前述したように、北新造院跡で最も早く造られたのは第2基壇の金堂で、その時期は7世紀後半から8世紀初頭であろう。しかし、金堂建立時点では他の堂塔を計画していかなかった可能性がある。金堂に次いで、第3基壇に東（？）塔が建てられたと考えられる。第4基壇の建設については検討する材料が少ないが、第3基壇より新しく、第1基壇には先行する可能性が高い。北新造院跡の主要堂塔で最も最後に建設されたと考えられるのが第1基壇の西塔（？）で、8世紀後半から9世紀初頭頃であろう。

創建当初に計画されていなかった堂塔を建設する理由は想像の域を出ないが、建物毎に寄進者が異なる可能性や、時間の経過と共に北新造院そのものの性格や四天王信仰との関わり、造塔意識の変化などが考えられる。

**『出雲国風土記』との関係** 大平13（733）年の年記を帯びる『出雲国風土記』には、北新造院跡について「建立嚴堂也」と記されている。嚴堂は金堂（第2基壇）を指すと考えられ、出土瓦の状況からも第2基壇が733年以前に建っていた可能性は高い。一方、第3基壇は733年時点ではまだ完成していなかった可能性もあり得る。『出雲国風土記』の記載が、造営の途中の状況を記したもので、最終的な新造院の伽藍を示していない可能性はある。一方、『出雲国風土記』の教吳寺と10ヶ所の新造院についての記載は、全ての新造院について1堂しか記されておらず、複数の堂塔を記した新造院記事は無い。このことから、各新造院を代表する建物だけを記していた可能性があり、733年時点での完成していた堂宇の数を示さない事も考えられ、『出雲国風土記』の記述は第3基壇の完成時期とは直結しては考えられない。

**新治廢寺式伽藍配置** 北新造院跡の最終的な伽藍配置は、金堂の東西に塔を配し、南西側に東面講

堂を置いていた可能性が高まった。双塔を建てる伽藍配置は、薬師寺式などが知られているが、多くは金堂よりも前面に塔を配している。金堂の東西に双塔を置く伽藍配置は新治庵寺式と呼ばれ、常陸新治庵寺・丹波三ツ塚庵寺・播磨奥村庵寺の3ヶ所しか知られていない(註21)。3遺跡とも双塔を南に出そうと思えば問題なく出せる敷地を有しながら配置しており、地形的制約もある北新造院とは異なる。北新造院では、双塔を置く当初計画が無かった可能性も含め、新治庵寺式とは呼びにくいと言える。山陰両県で複数塔が確認されている古代寺院には、鳥取市の栃本庵寺(註22)・米子市の上淀庵寺がある。栃本庵寺は金堂の南と東に塔を配する配置、上淀庵寺も金堂の東側に南北に2~3塔を置く独特の伽藍配置となっており、薬師寺式やそれに類する双塔伽藍は、近隣では知られていない。上淀庵寺では講堂が確定しておらず、金堂南西側に出す配置が考えられている。

北新造院跡では、第4基壇が東面講堂であった可能性がある。北新造院跡で想定される伽藍配置から第1基壇を除くと伊賀夏見庵寺と同様となることは注意される。

**北新造院の廃絶** 第1基壇北側に集中してみられる土器群よりも新しい遺物は見られない。これらの土器群は既報告では11世紀末から12世紀頃と考えており、本報告でも異論はない。北新造院跡の廃絶は、第2基壇の火災が主因で、他の基壇は自然倒壊と推定されていたが、第3基壇塔相輪には火を受けた痕跡が見られる。釘などの金属製品が残ることから全焼したとは考えにくいが、廃絶の原因が新造院全体に影響する火災であった可能性が高い。

註1 内田律雄「『出雲国風土記』大井浜の須恵器生産(下)」『古代学研究』第120号1990年

註2 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書IV』島根県教育委員会1985年

『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書V』島根県教育委員会1988年

註3 『小無田II遺跡発掘調査概報』松江市教育委員会1997年

以下、南新造院瓦窯跡に関する記述は、この報告書による。

註4 『教吳寺跡』安来市教育委員会1985年

以下、教吳寺跡に関する記述は、特に記す場合を除き、この報告書による。

註5 『島根県文化財調査報告書5』島根県教育委員会1978年頃

註6 『島根県生産遺跡分布調査報告3』島根県教育委員会1985年頃

註7 『国道9号線松江バイパス建設予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』島根県教育委員会1989年

註8 松本岩雄「6まとめ」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書IV』島根県教育委員会1985年

註9 内田律雄「『山雲国風土記』の教吳寺と新造院」『山雲古代史研究』第六号1996年

註10 宽道年弘「大寺平庵寺」「八雲立つ風上記の丘84」島根県立八雲立つ風七記の丘1987年

註11 『出雲・上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』島根県教育委員会1980年

註12 内田律雄「『山雲国風土記』大井浜の須恵器生産(ト)」『古代学研究』第120号1990年

藤原哲「古代出雲の須恵器生産と瓦生産」『出雲古代史研究』第一四号2004年

註13 『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会2006年

註14 鶴尾各部の名称は、次に示した文献を参考にした。

『日本古代の鶴尾』飛鳥資料館1980年

大脇潔「日本の美術I No.392 鶴尾」至文堂1999年

註15 『玉姫塔ケ坪庵寺跡発掘調査報告書』国府町教育委員会1991年

註16 『上淀庵寺』淡江町教育委員会1995年

註17 鈴木嘉吉「五重塔」「大和古寺大觀第六卷室生寺」岩波書店1984年

註18 原田憲二郎「古代の石製相輪について一考察」『文化財学論集』文化財学論集刊行会1994年

三柄庵寺出土品には連弁を陽刻した凝灰岩製の部材がある。報告では天蓋とされており、塔の他に

八角円堂が存在した可能性を指摘する場合もある。

註19 『夏見庵寺』名張市教育委員会1988年。

註20 小森俊寛「基調報告」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器』1997年。

註21 高井悌三郎『常陸國新治郡上代遺跡の研究』1944年。

『丹波三ツ塚遺跡Ⅲ』丹波三ツ塚遺跡発掘調査団1981年。

『奥村庵寺』龍野市教育委員会1997年。

註22 『史跡柄本庵寺塔跡II・鳥取藩主池田家墓所』国府町教育委員会2003年

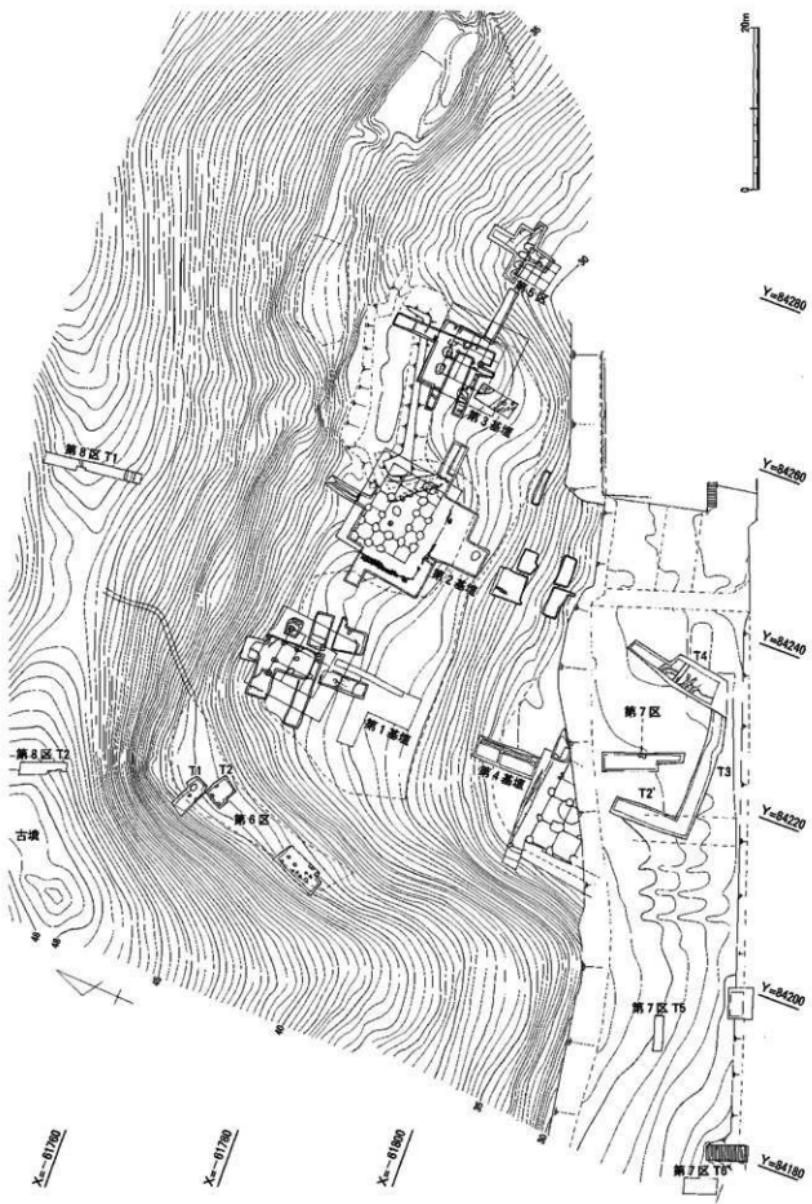
#### 第4節 総括

山代郷北新造院跡は『出雲國風土記』によって、造立者の個人名などが判断できる古代寺院で、地方寺院としては極めて希な遺跡であった。平成13年度までの調査によって金堂須弥壇、三尊仏の設置痕跡が発見され、その重要性が増していた。平成17・18年度の調査および整理作業によって、更に次のことが判明した。

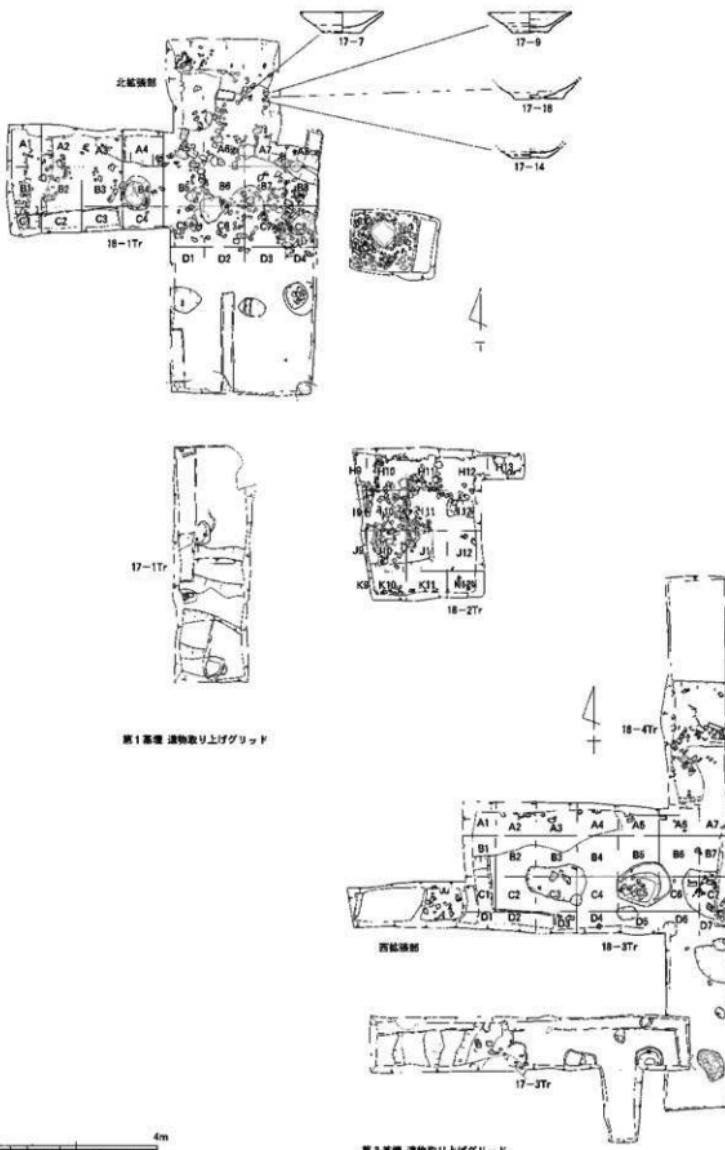
発掘調査によって古代の地方の塔の細部形状が判明したことは、特筆に値する。北新造院東塔（第3基壇）には、全国的にも数少ない石製の相輪が乗っていたことが判明し、通常あるはずの水煙を欠き、天蓋を乗せていた可能性が高い事が判った。水煙を欠き天蓋を乗せた塔相輪は、国内では室生寺以外では知られておらず、特異である。以前から、出雲地方で出土する古代の瓦に新羅的な要素が含まれることは多くの研究者が指摘しており、北新造院跡出土瓦も例外ではない。今回の調査によって国内に類例の少ない水煙を欠く石製相輪が確認でき、双塔伽藍の可能性が高まったことは、金堂の瓦積み基壇も含め、改めて渡来人との関わりを考えさせる。

金堂の屋根に乗っていた山陰系鶴尾の全体形状が推定でき、金堂の屋根が入母屋造りであったことが確定した。

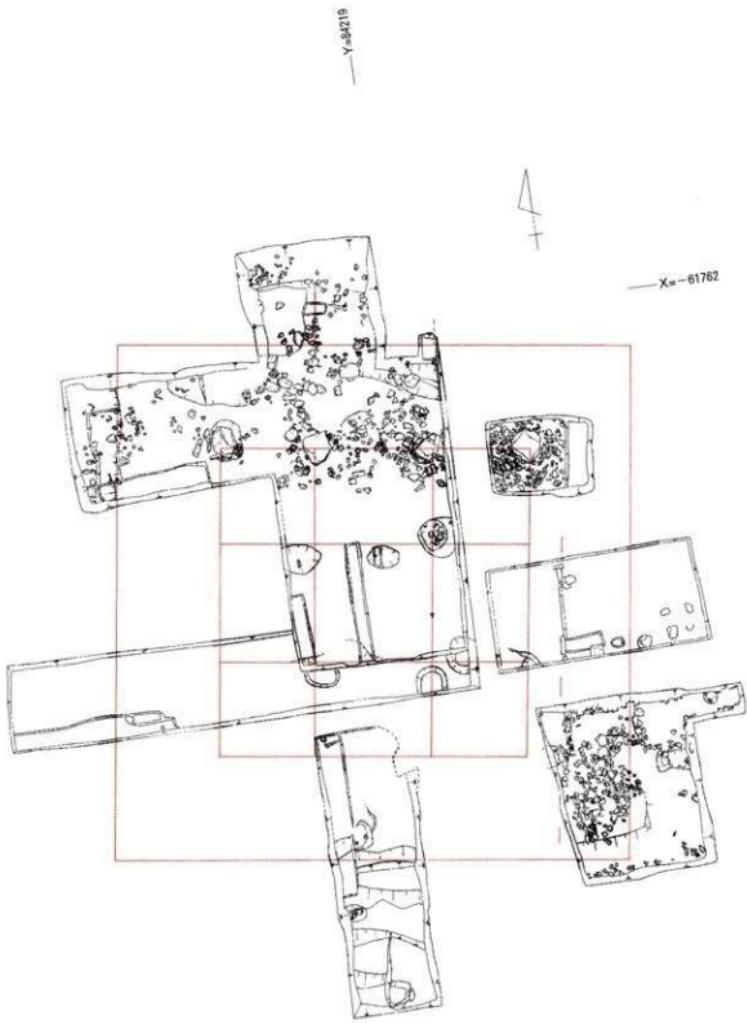
北新造院跡の伽藍配置は、金堂の東西に塔を建て、東面する講堂を金堂南西に出す、変則的な伽藍配置を取っていたと考えられる。また、その伽藍配置は当初から計画されていたものではなく、整備の過程でその都度追加されて行った可能性が高い。建立当初の金堂一字のみの寺から、最終的に双塔を建て、講堂を構える寺院に変遷して行った過程からは、寺院整備とその背景の変化が想像される。



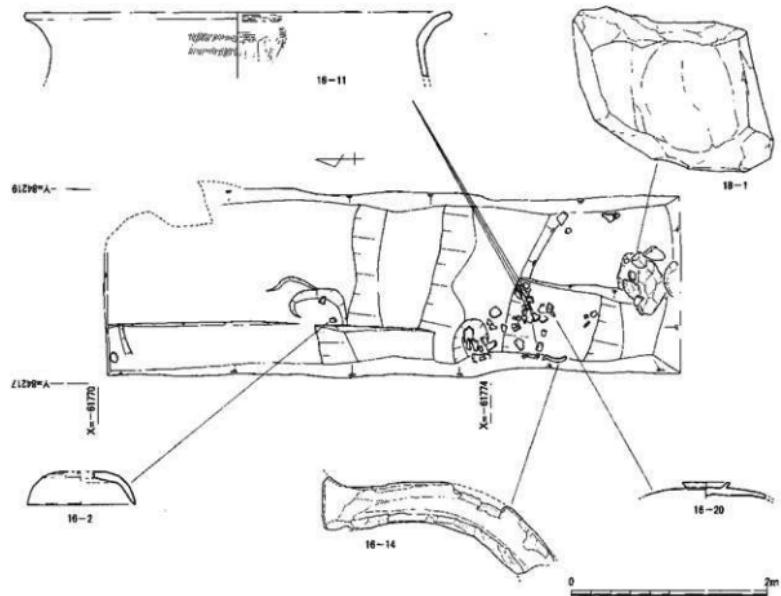
第4図 山代郷北新造院跡調査区配置図 (S = 1 : 600)



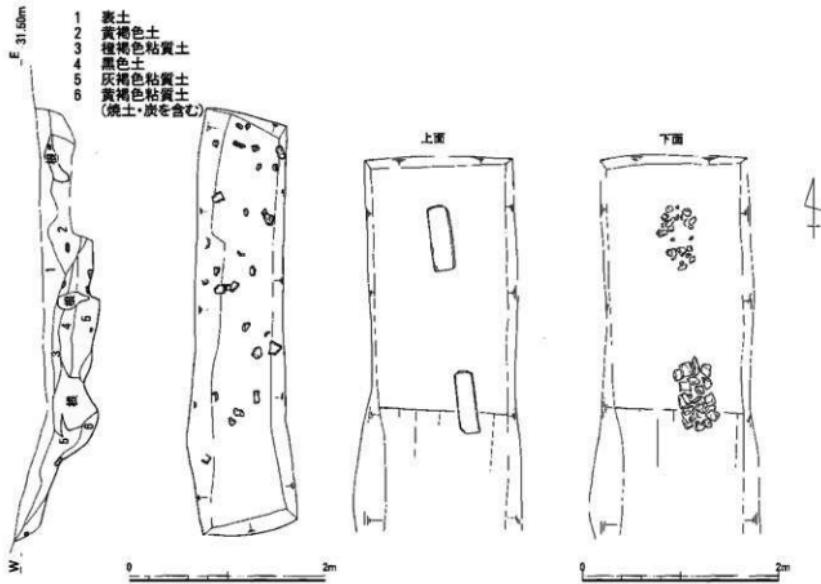
第5図 第1・3基壙 遺物取り上げグリッド図 (S = 1 : 120)



第6図 第1基準遺構実測図 ( $S = 1 : 100$ )

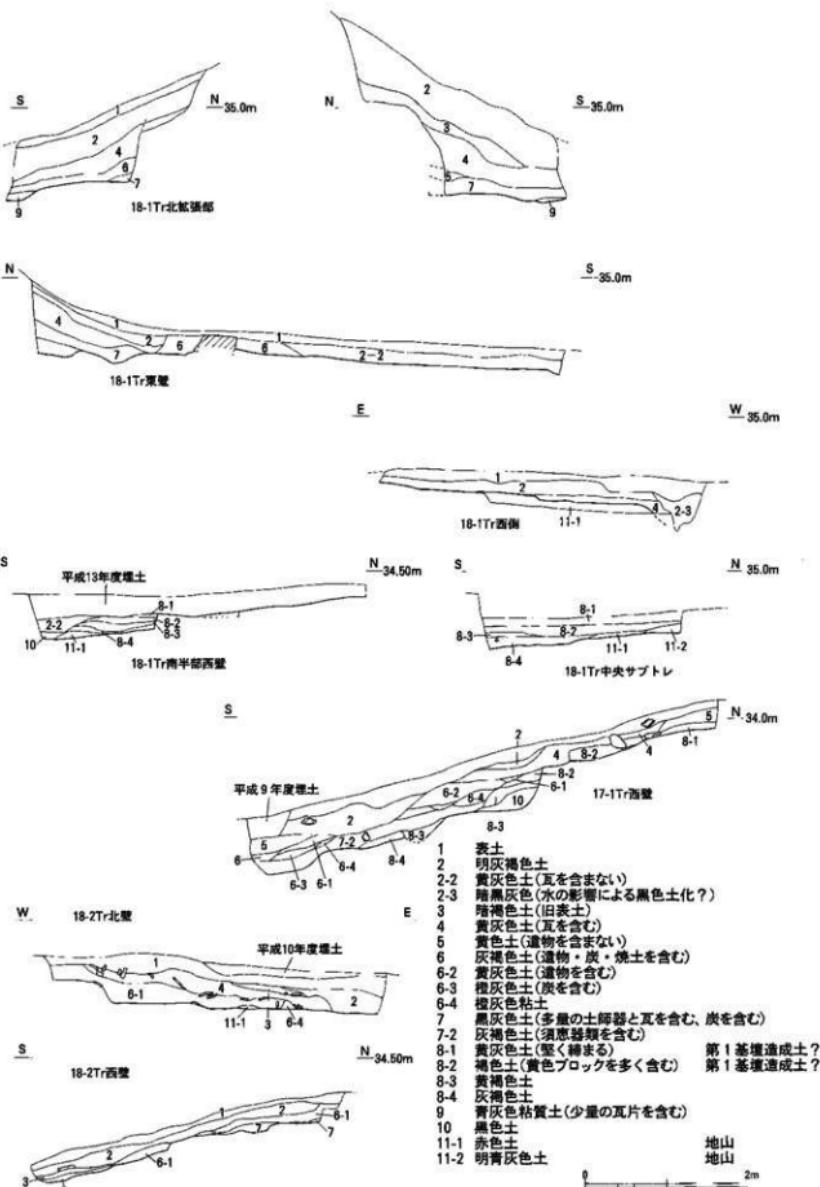


第7図 17-1Tr 下層遺物出土状況 ( $S = 1 : 50$ )

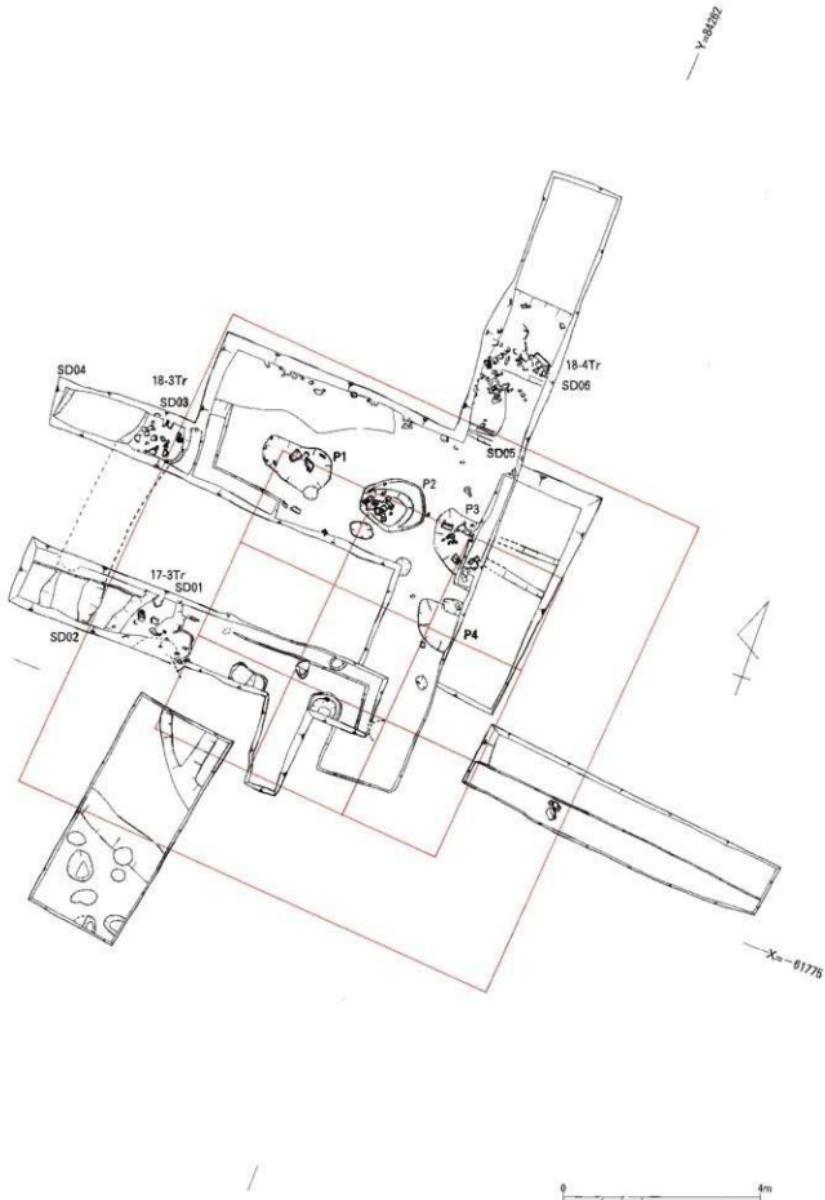


第8図 17-8Tr 実測図 ( $S = 1 : 50$ )

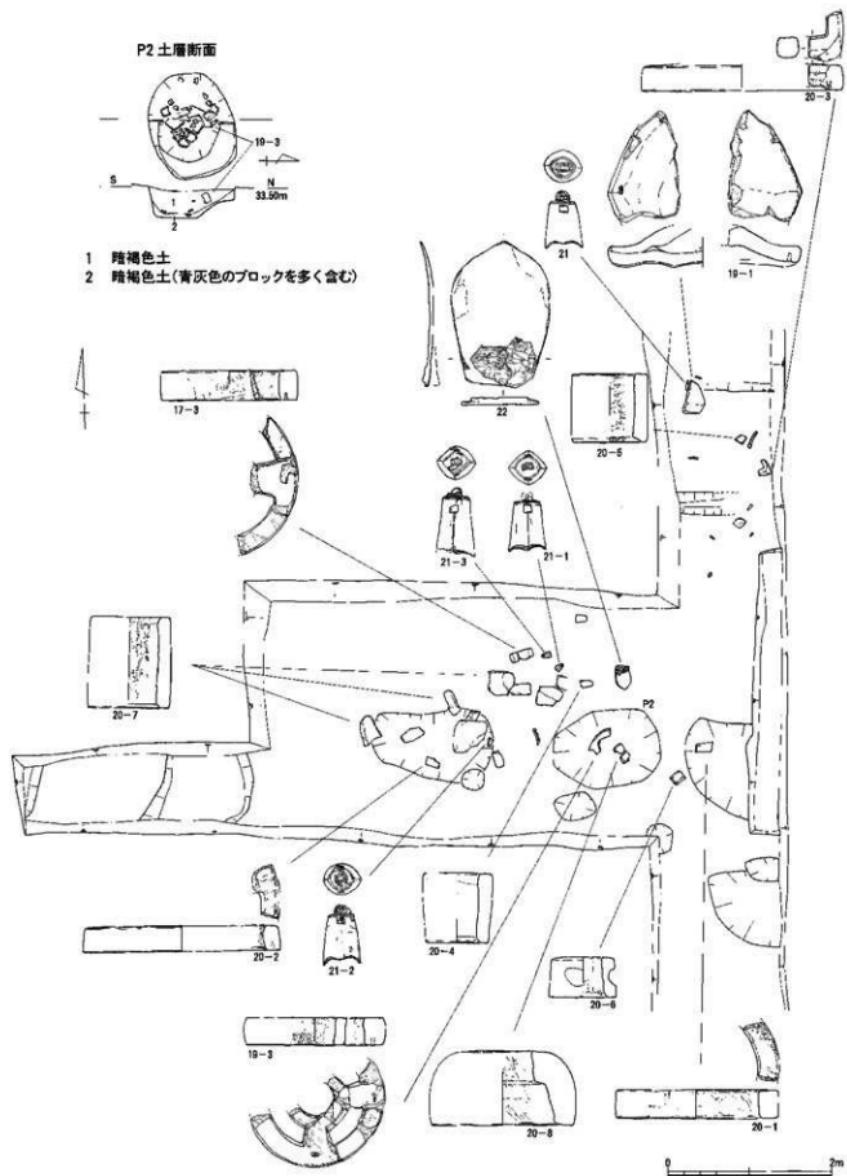
第9図 18-4Tr 援体壁関係遺構実測図 ( $S = 1 : 50$ )



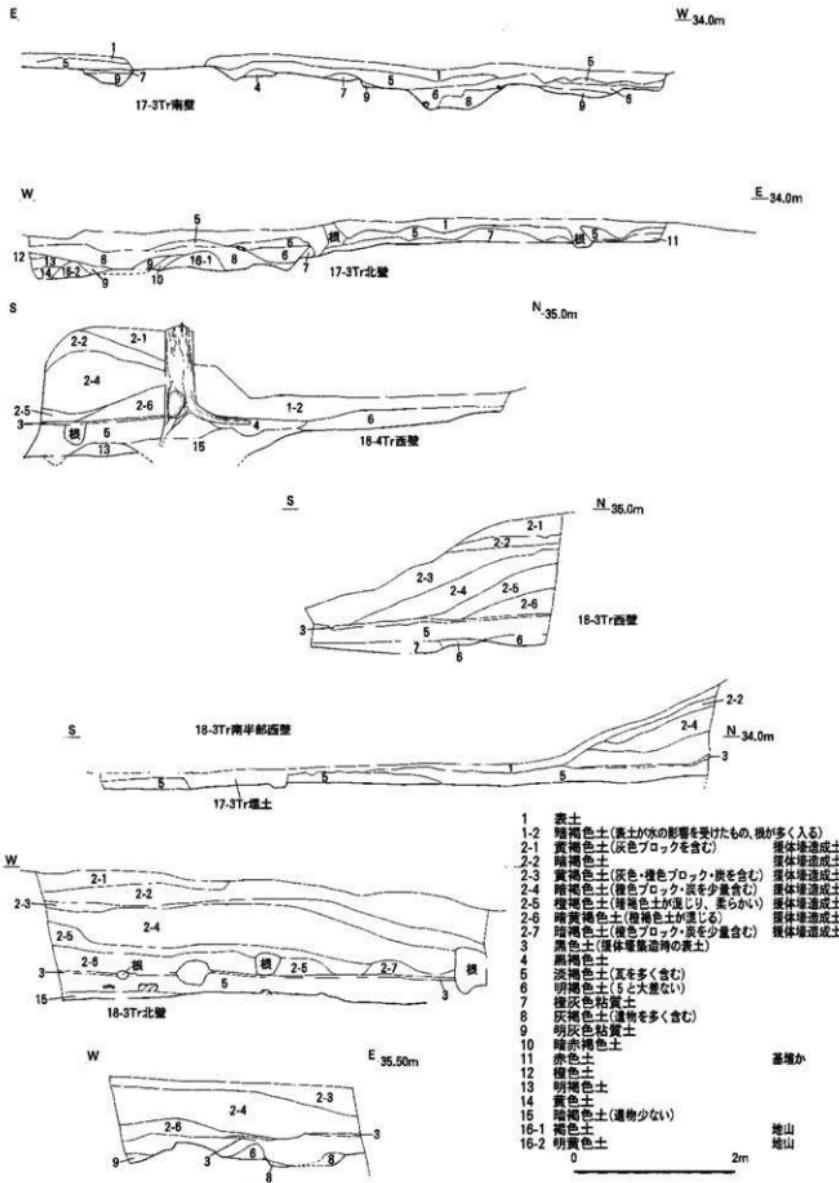
第10図 第1基壇土層堆積状況 (S = 1 : 60)



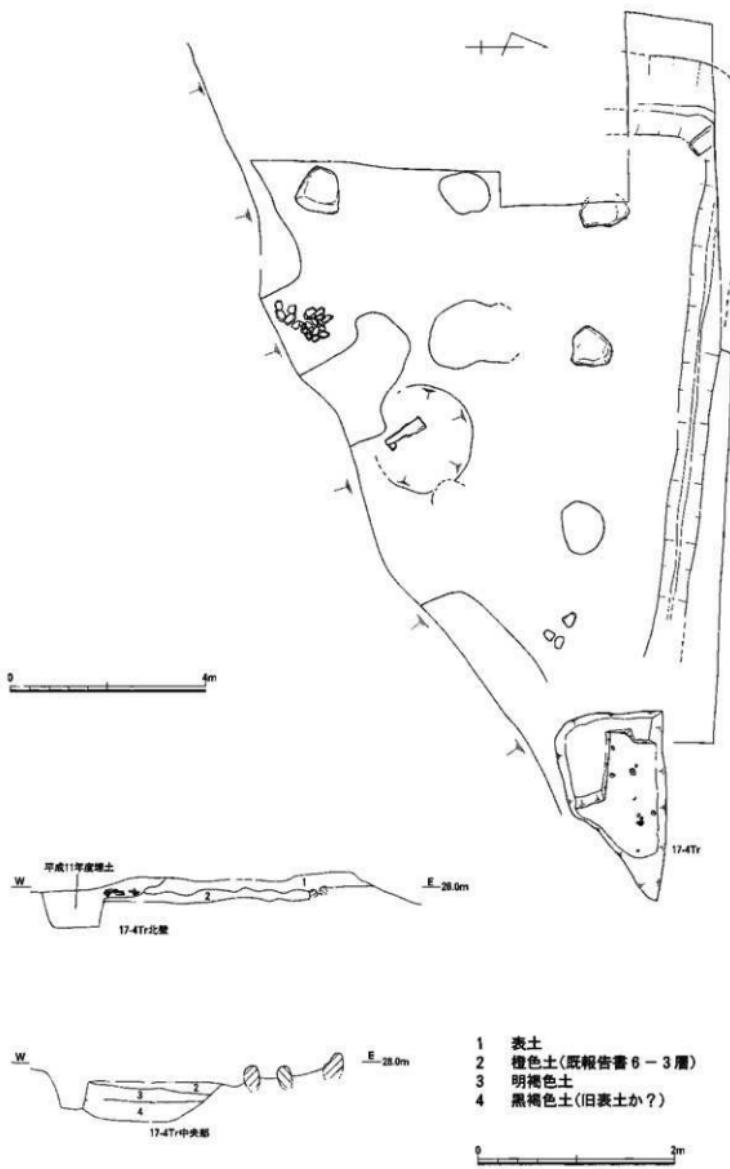
第11図 第3基壇遺構配図 ( $S = 1 : 100$ )



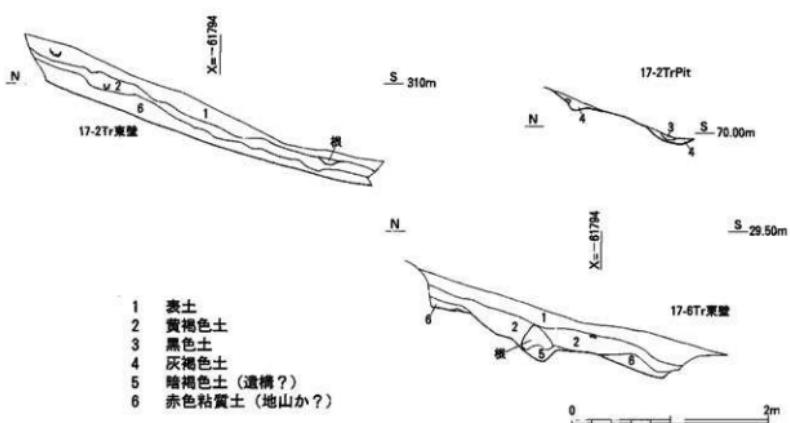
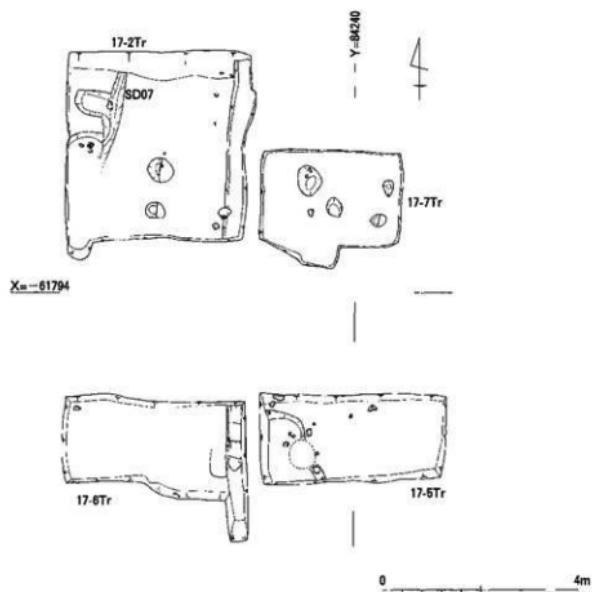
第12図 第3基壇相輪関係遺物出土状況 (S = 1 : 60)



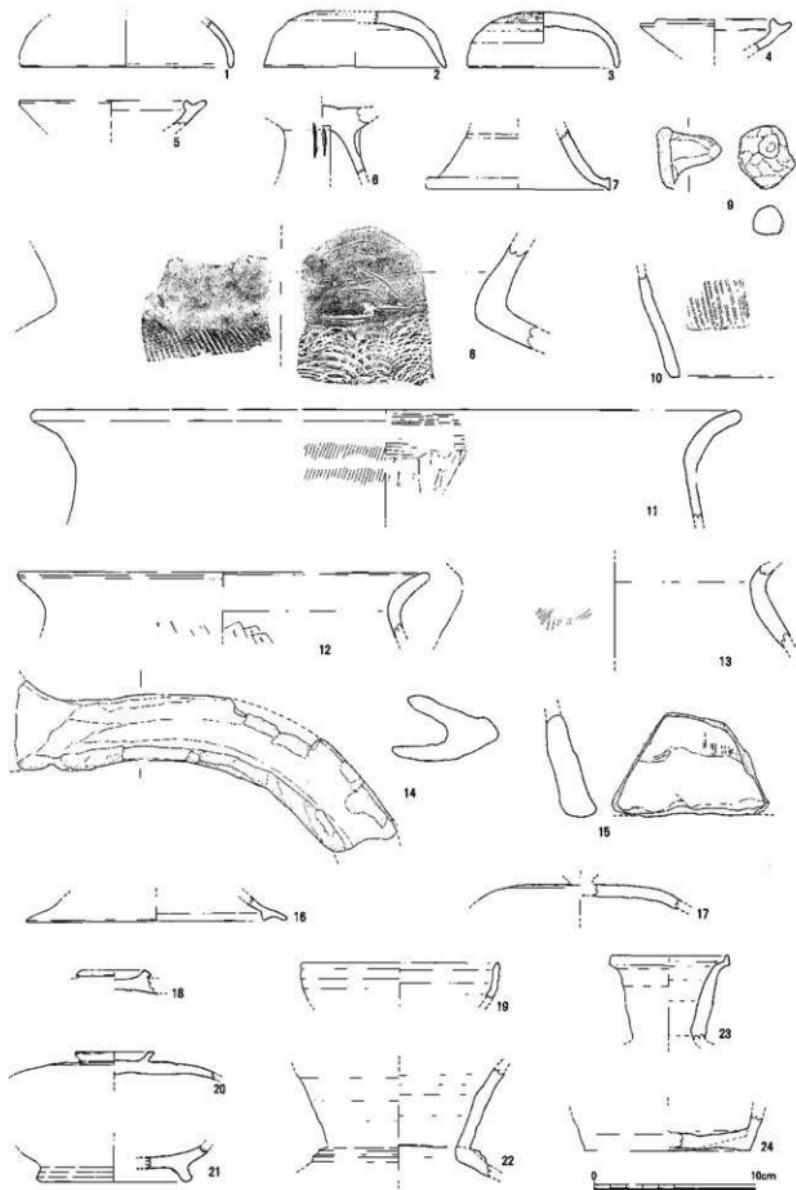
第13図 第3基壌土層堆積状況 (S = 1 : 60)



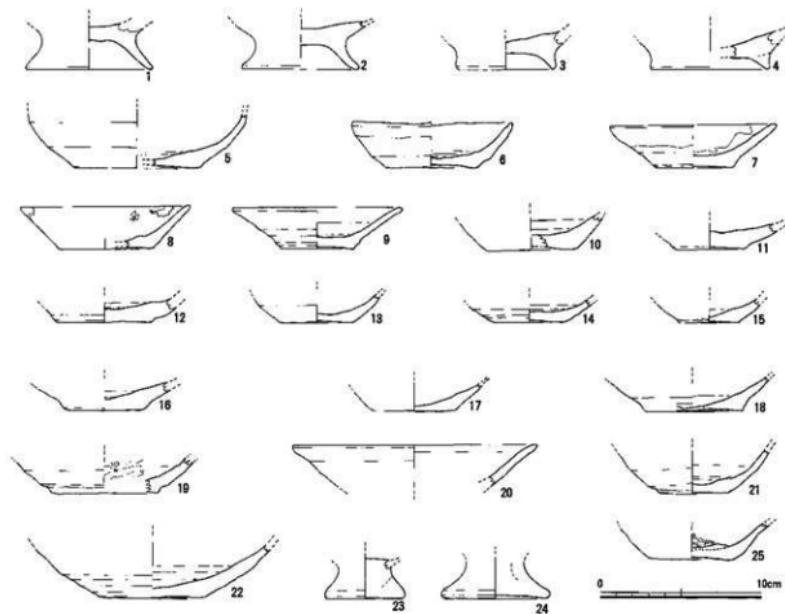
第14図 第4基壇実測図 (S = 1 : 50)



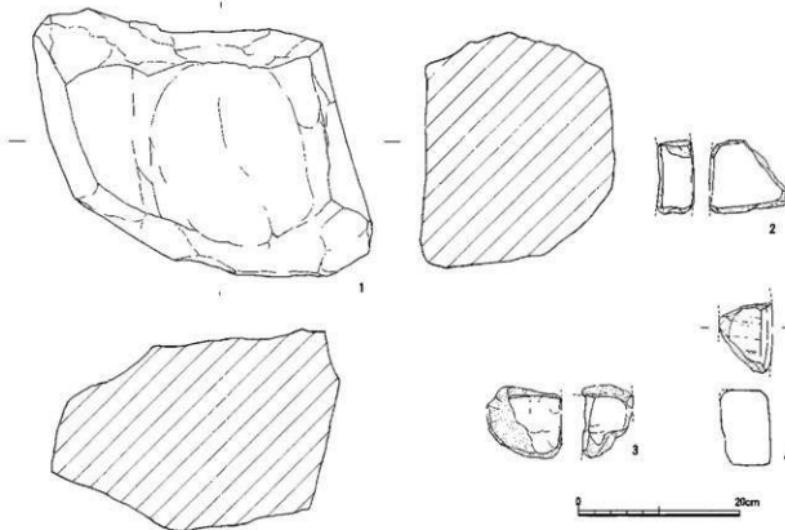
第15図 参道推定地実測図 (S = 1 : 50)



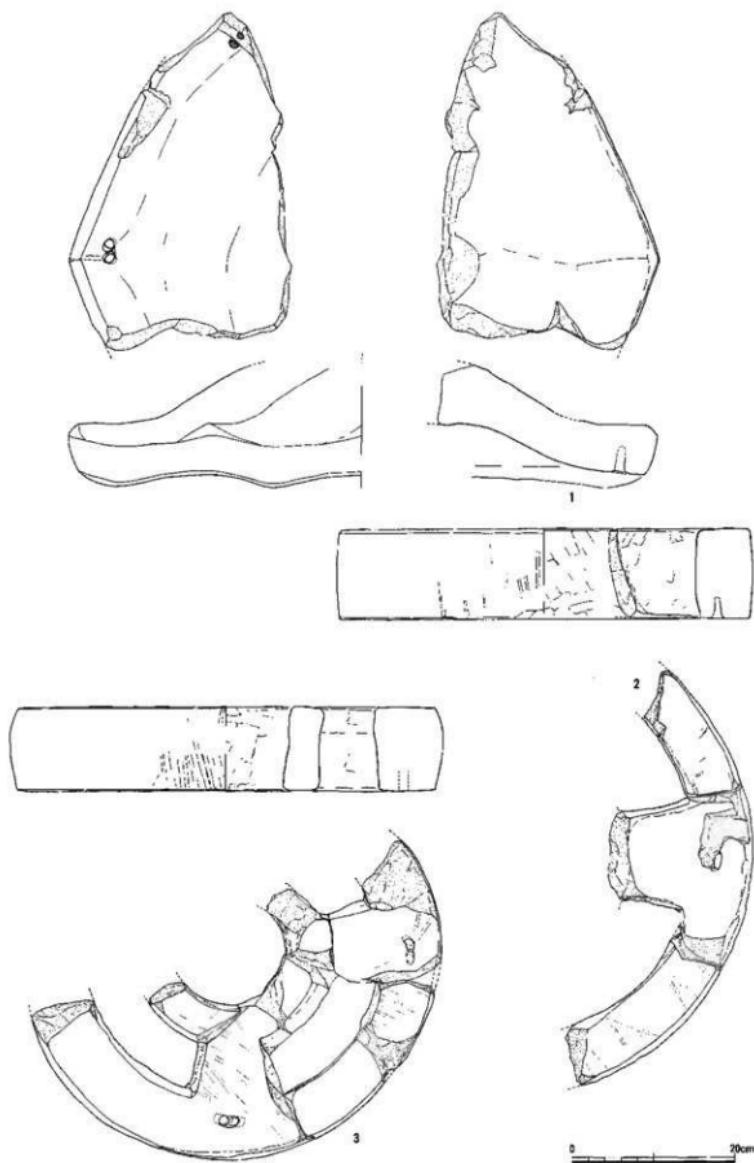
第16図 第1・3基壇出土須恵器・土師器実測図 ( $S = 1 : 3$ )



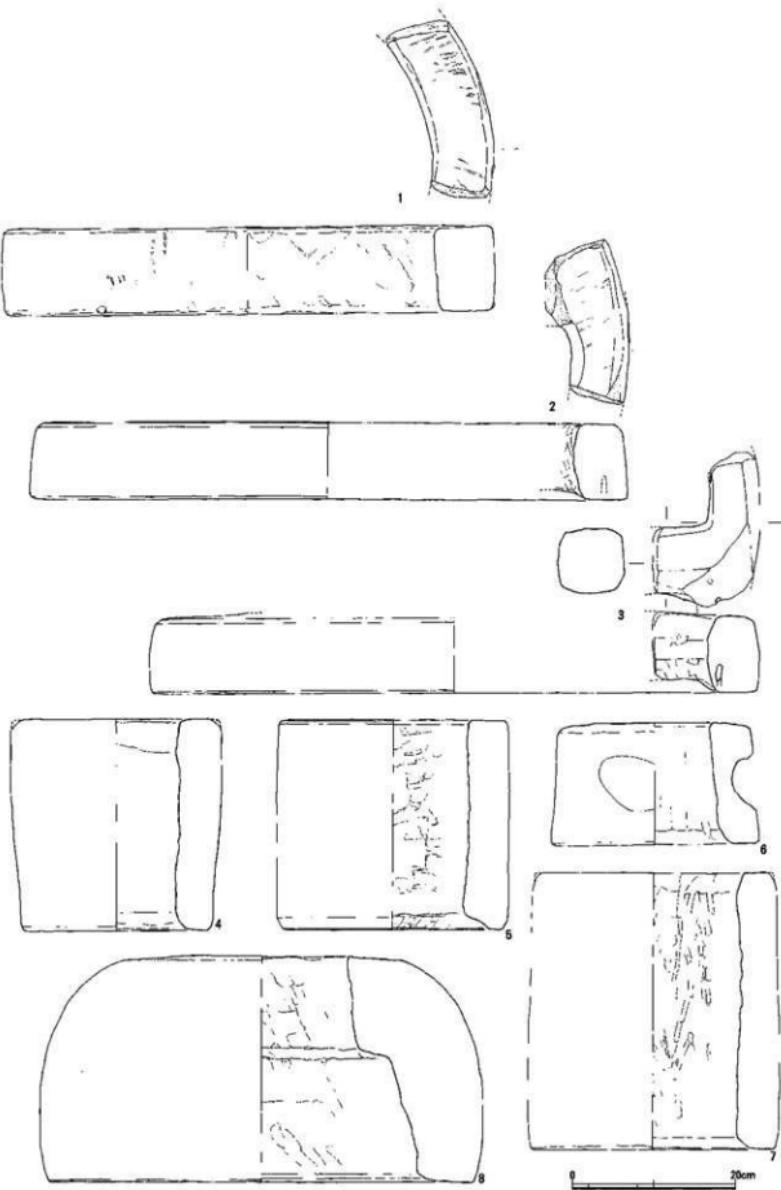
第17図 第1基壇出土土器実測図 ( $S = 1 : 3$ )



第18図 第1基壇出土石製品実測図 ( $S = 1 : 6$ )



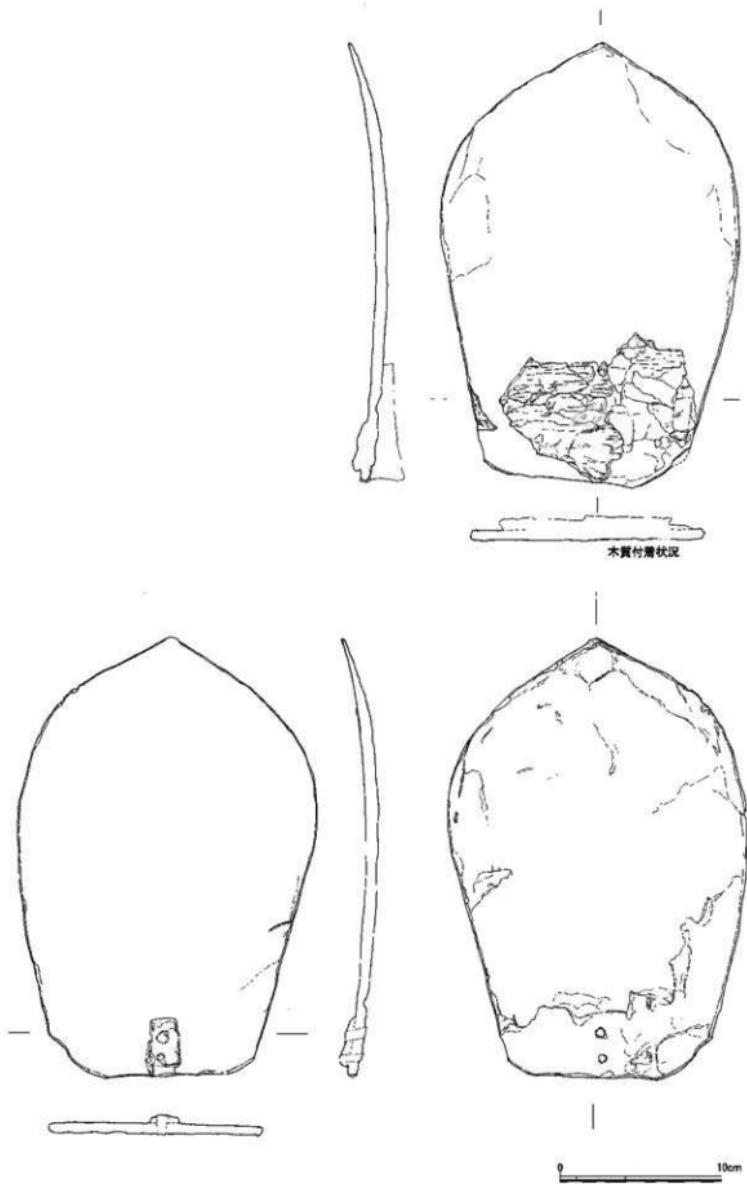
第19図 第3基出土石製車輪実測図(1) ( $S = 1 : 6$ )



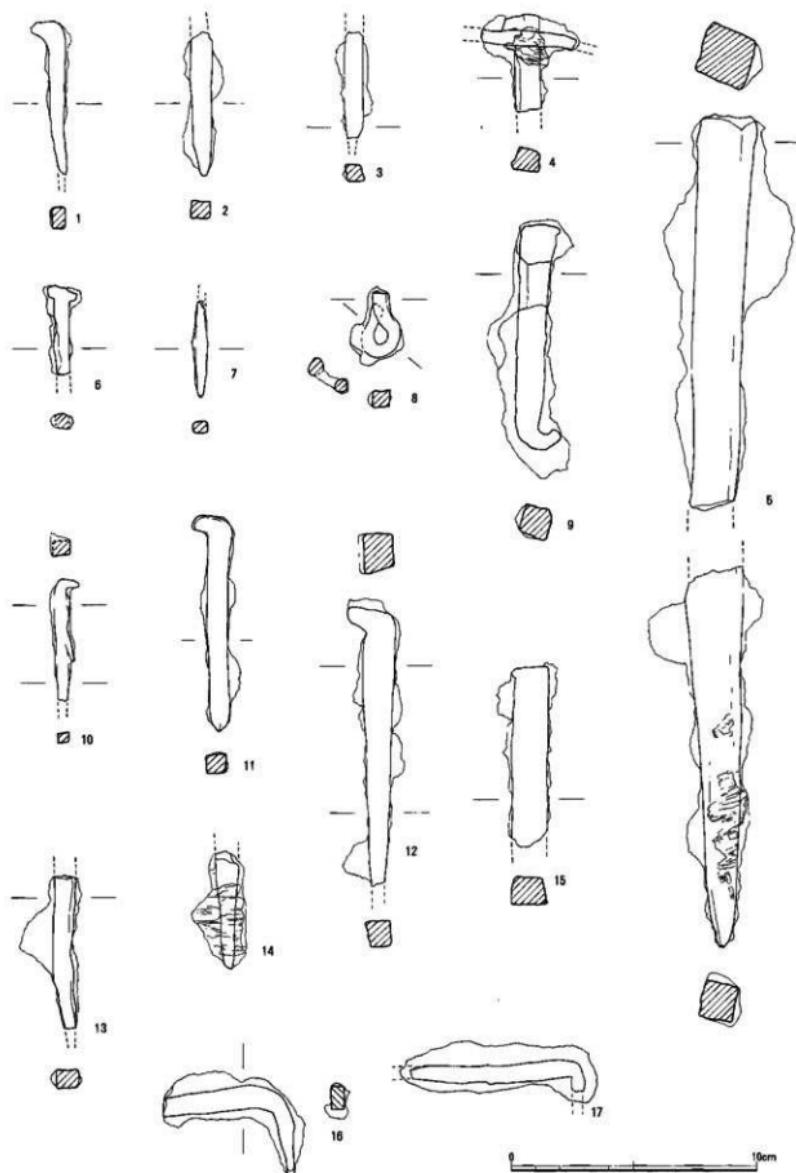
第20図 第3基壇出土石製相輪実測図(2) ( $S = 1 : 6$ )



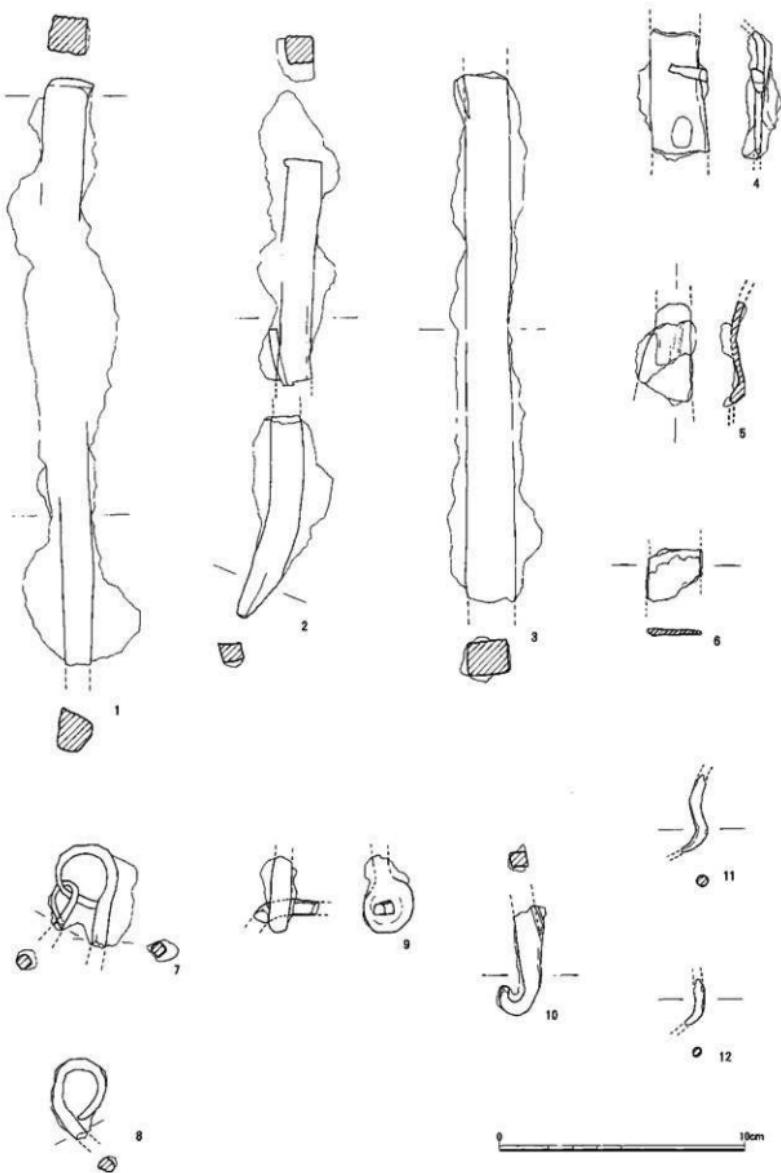
第21図 第3基塚出土風鐸実測図 ( $S = 1 : 3$ )



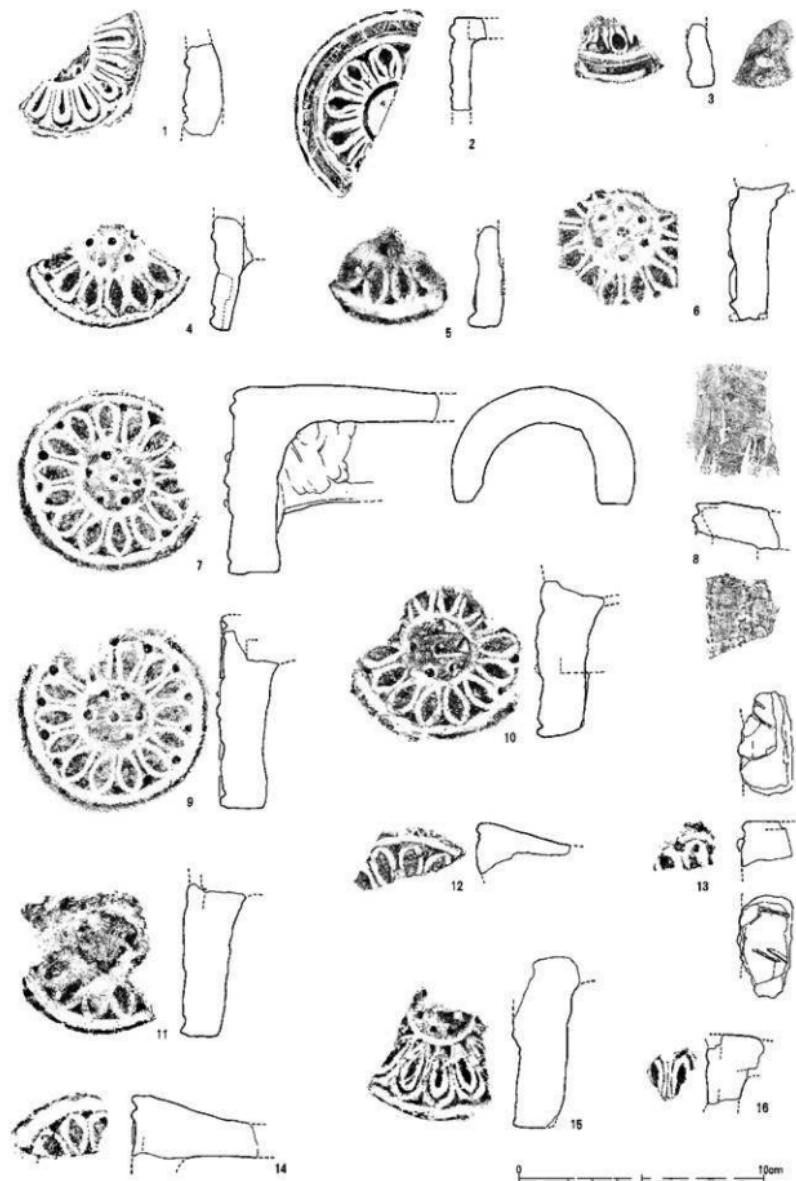
第22図 第3基壇出土蓮井状銅製品実測図 (S = 1 : 6)



第23図 第1・3基壇出土鉄製品実測図 ( $S = 1 : 2$ )

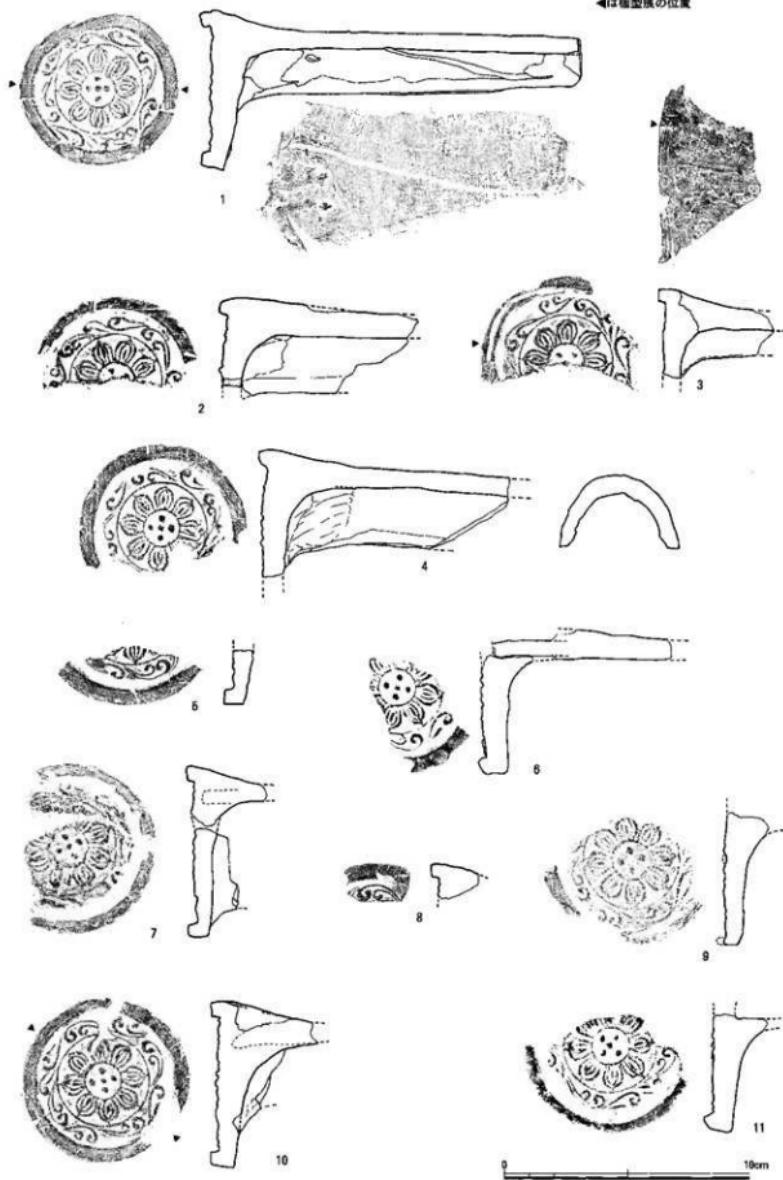


第24図 第3基壇出土鐵・銅製品実測図 (S = 1 : 2)

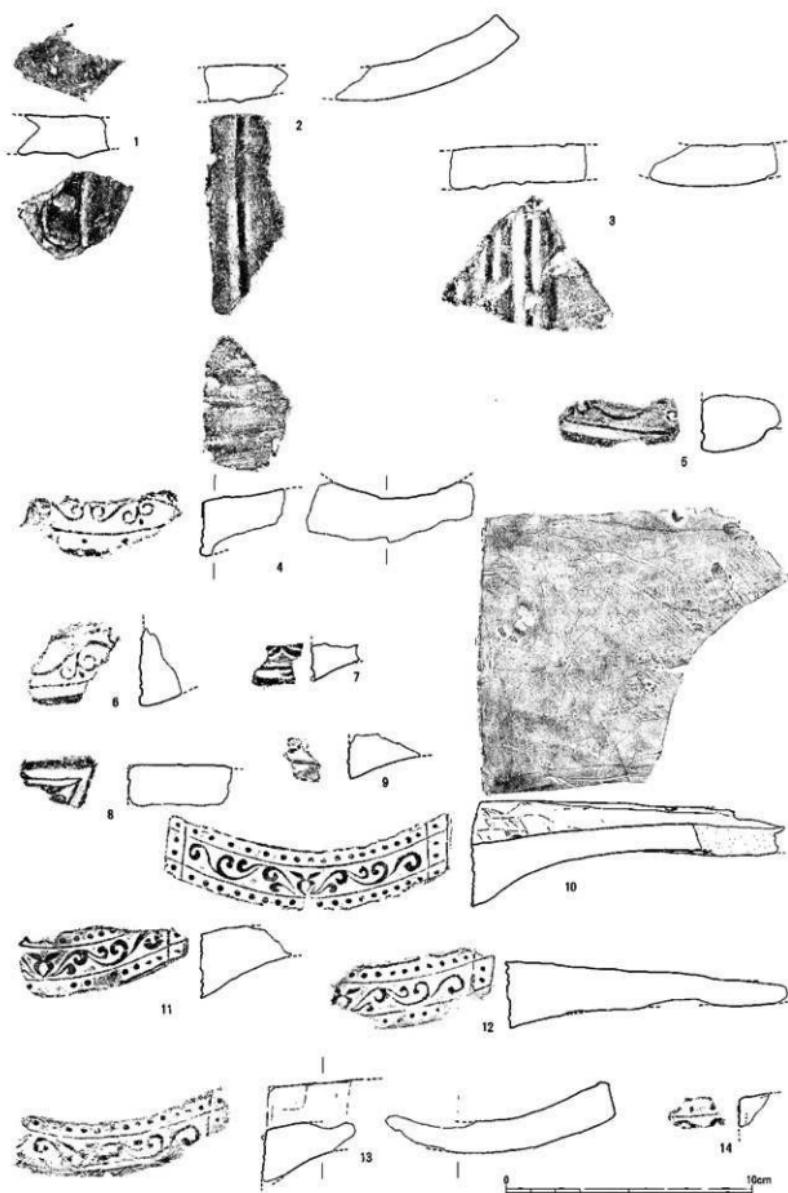


第25図 第1・3基壇出土軒丸瓦実測図(1) (S = 1 : 4)

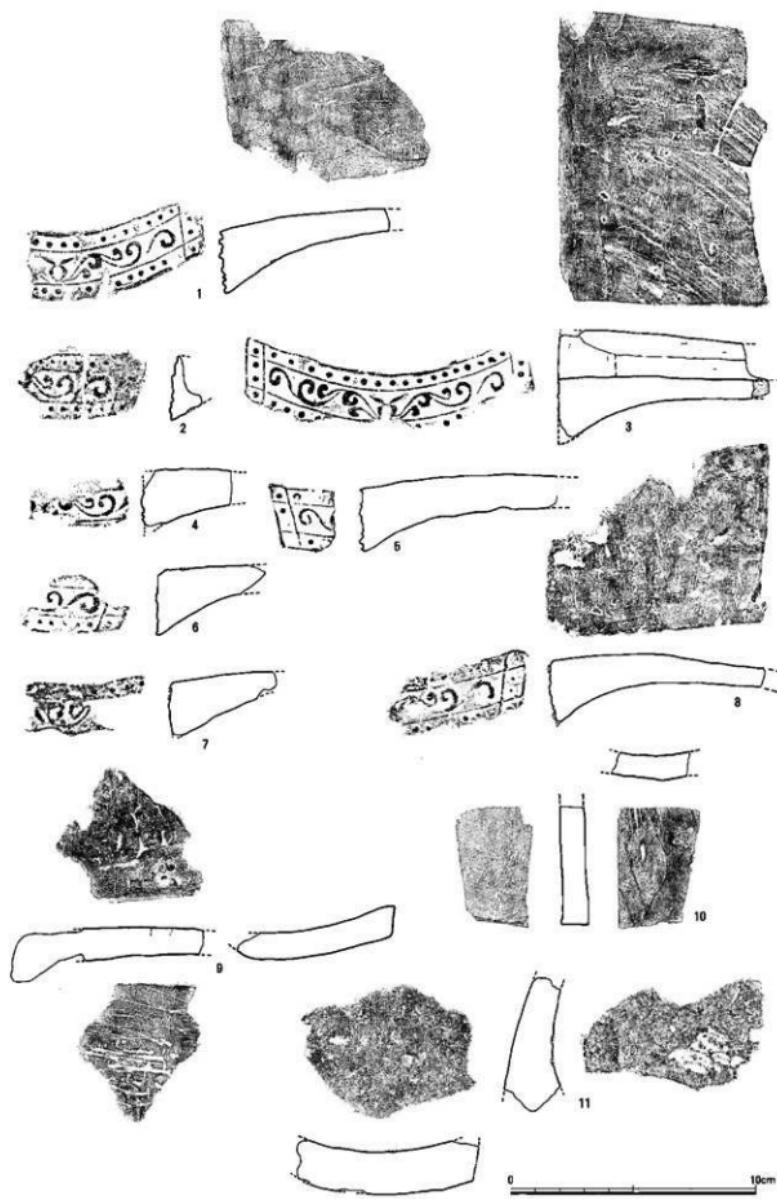
▲は軸型痕の位置



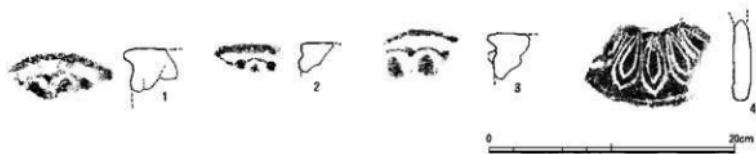
第26図 第1・3基出土軒丸瓦実測図(2) (S = 1 : 4)



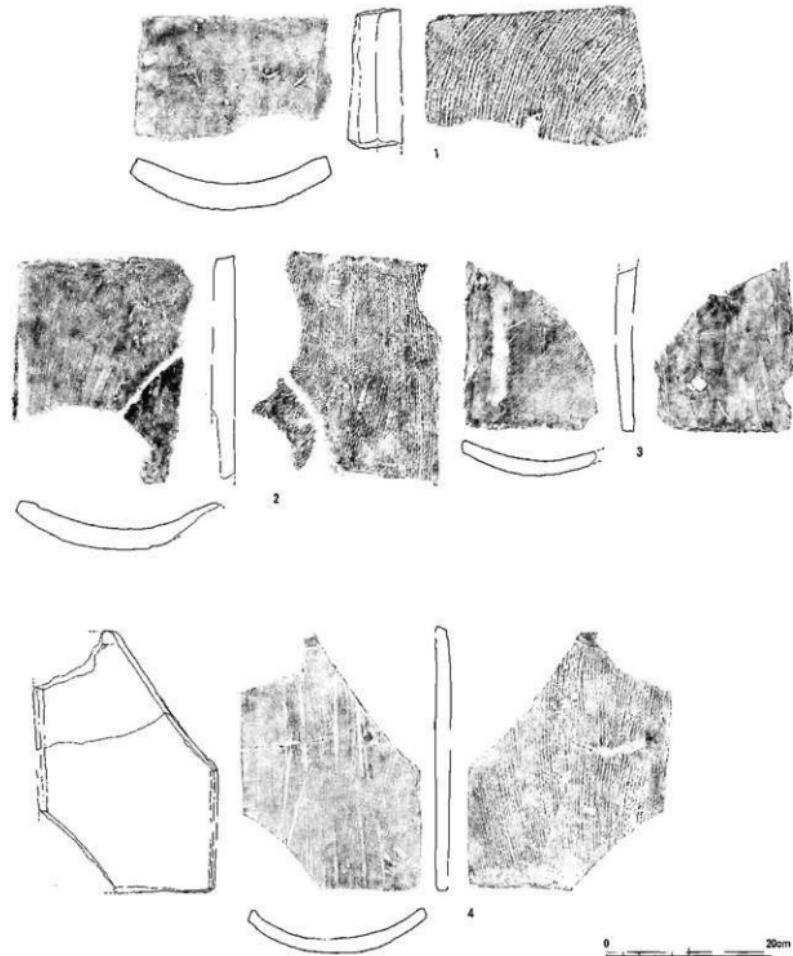
第27図 第1・3基壇出土軒平瓦実測図(1) (S = 1 : 4)



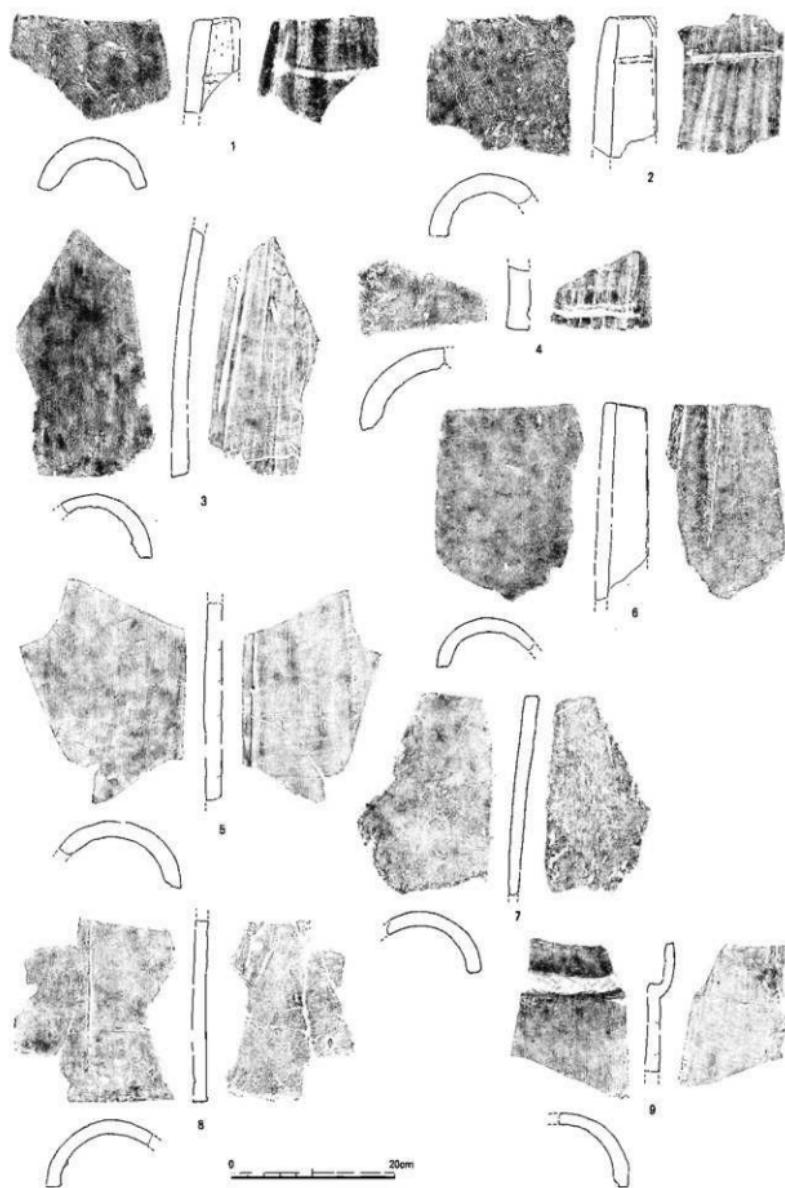
第28図 第1・3基址出土軒平瓦実測図(2) (S = 1 : 4)



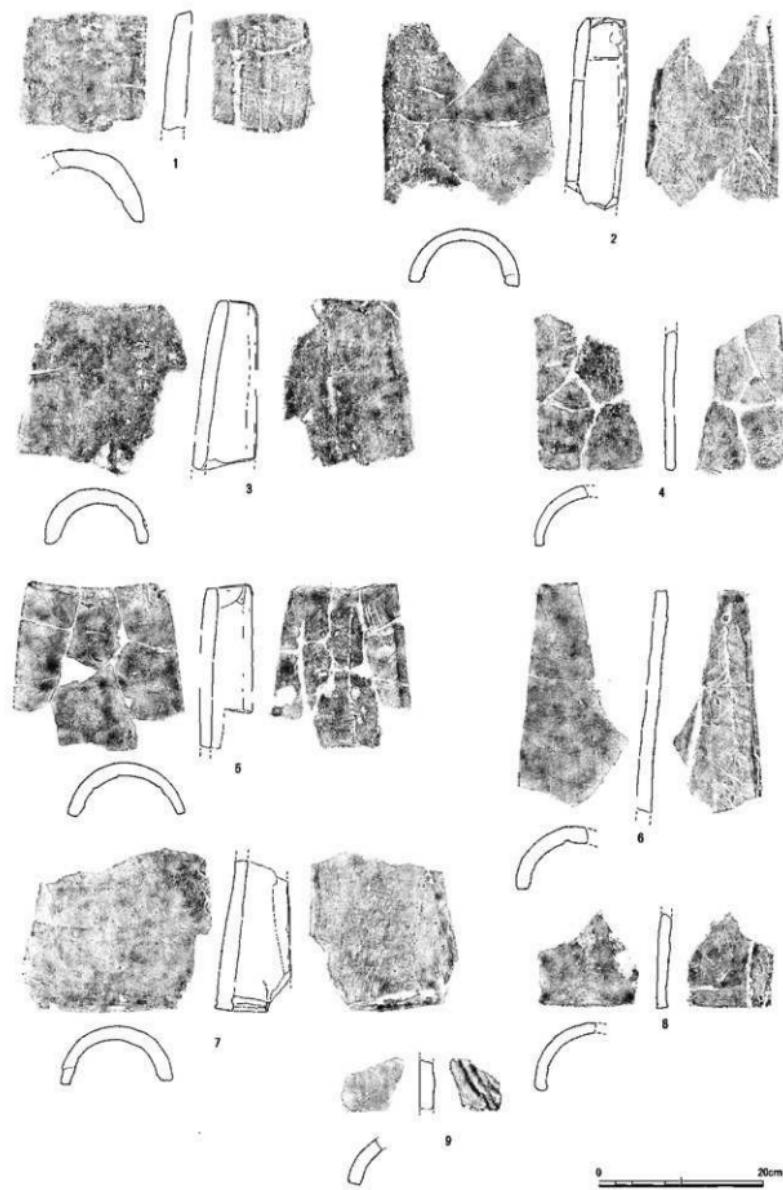
第29図 第1・3基壇出土軒丸瓦実測図(3) (S = 1 : 4)



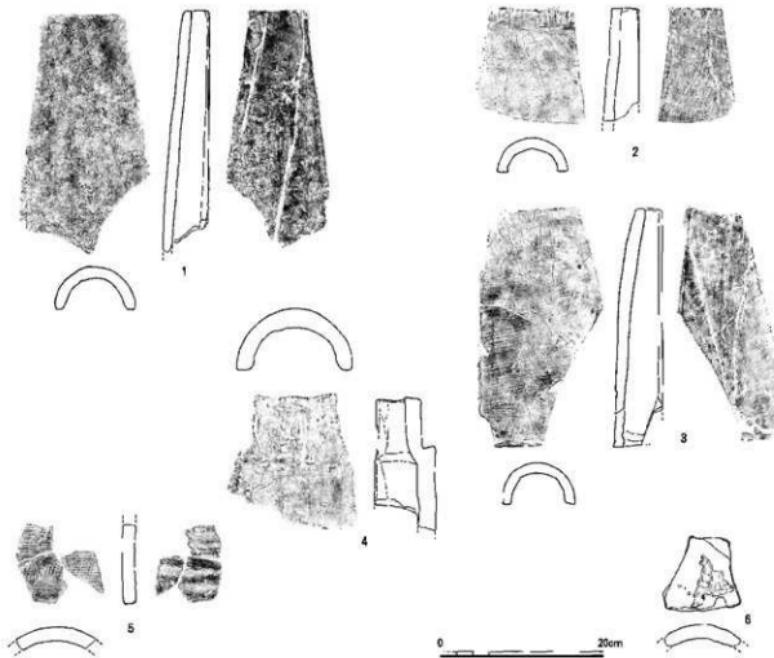
第30図 第1・3基壇出土軒平瓦・隅切り瓦実測図 (S = 1 : 6)



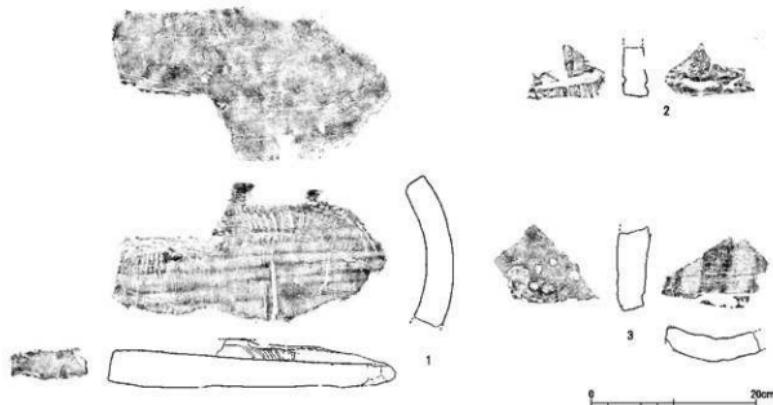
第31図 第1・3基壇出土丸瓦実測図(1) (S = 1 : 6)



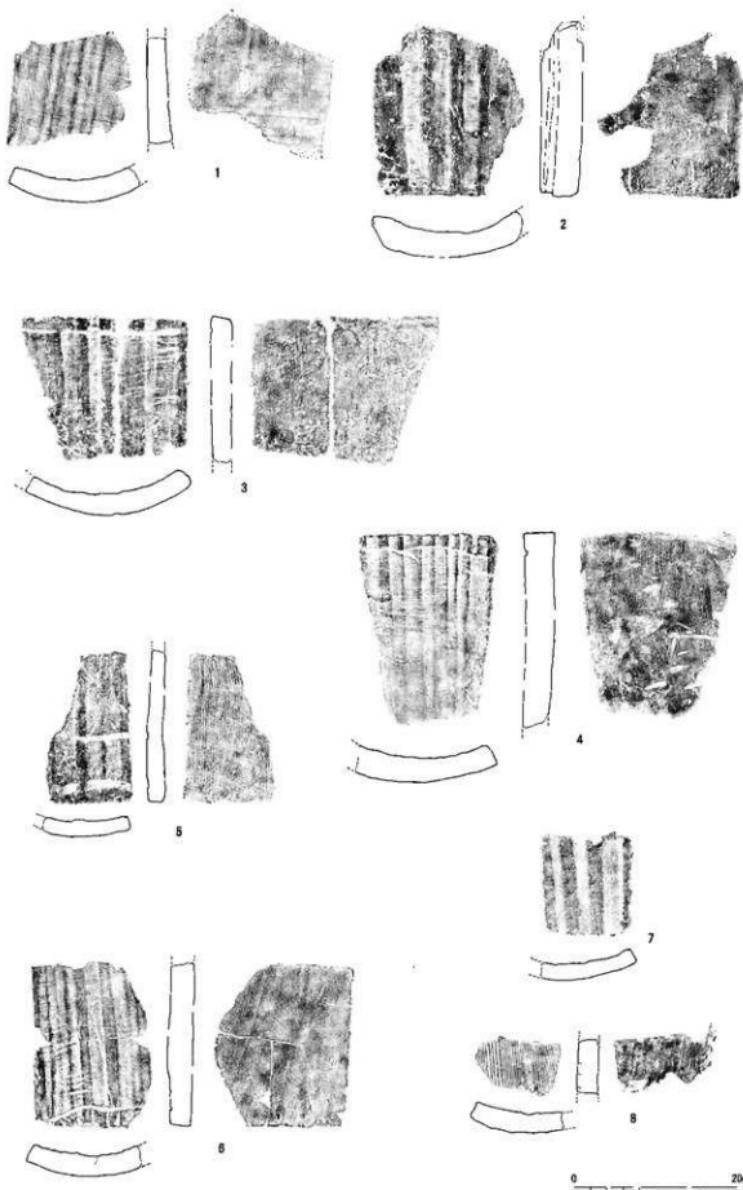
第32図 第1・3基壇出土丸瓦実測図(2) (S = 1 : 6)



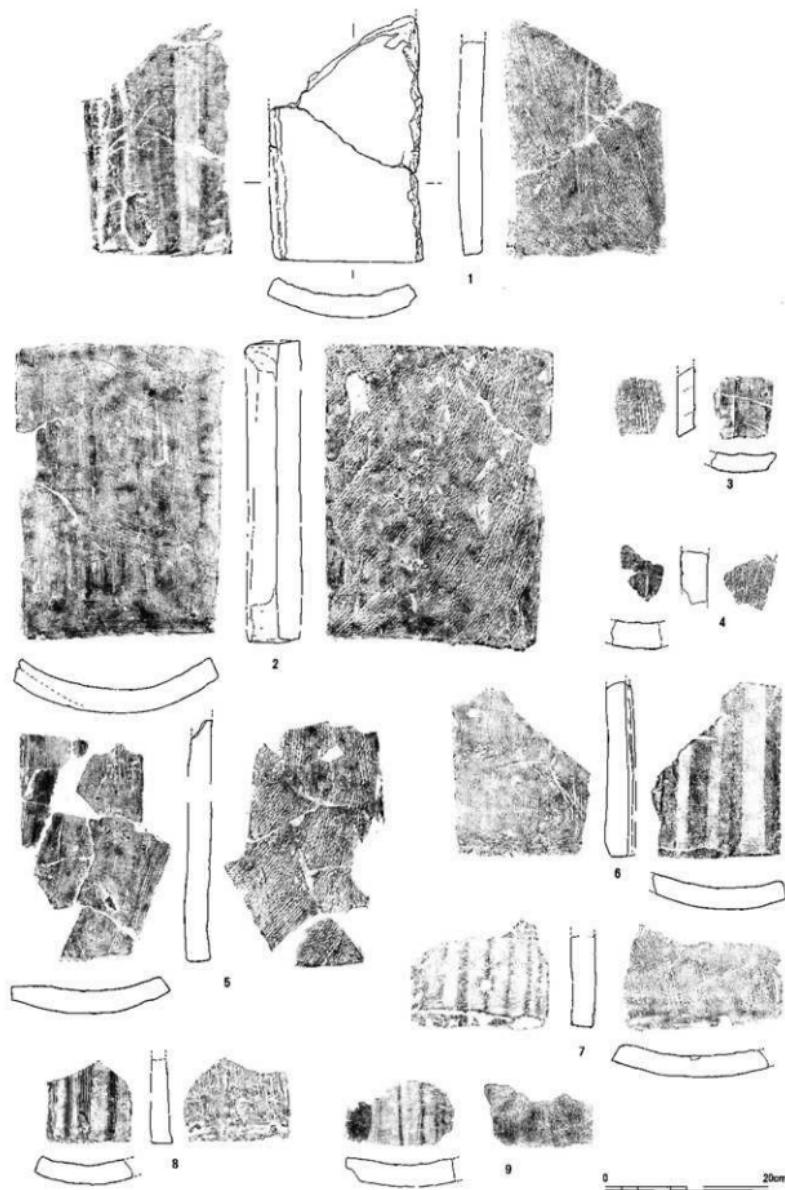
第33図 第1・3基壇出土丸瓦実測図(3) (S = 1 : 6)



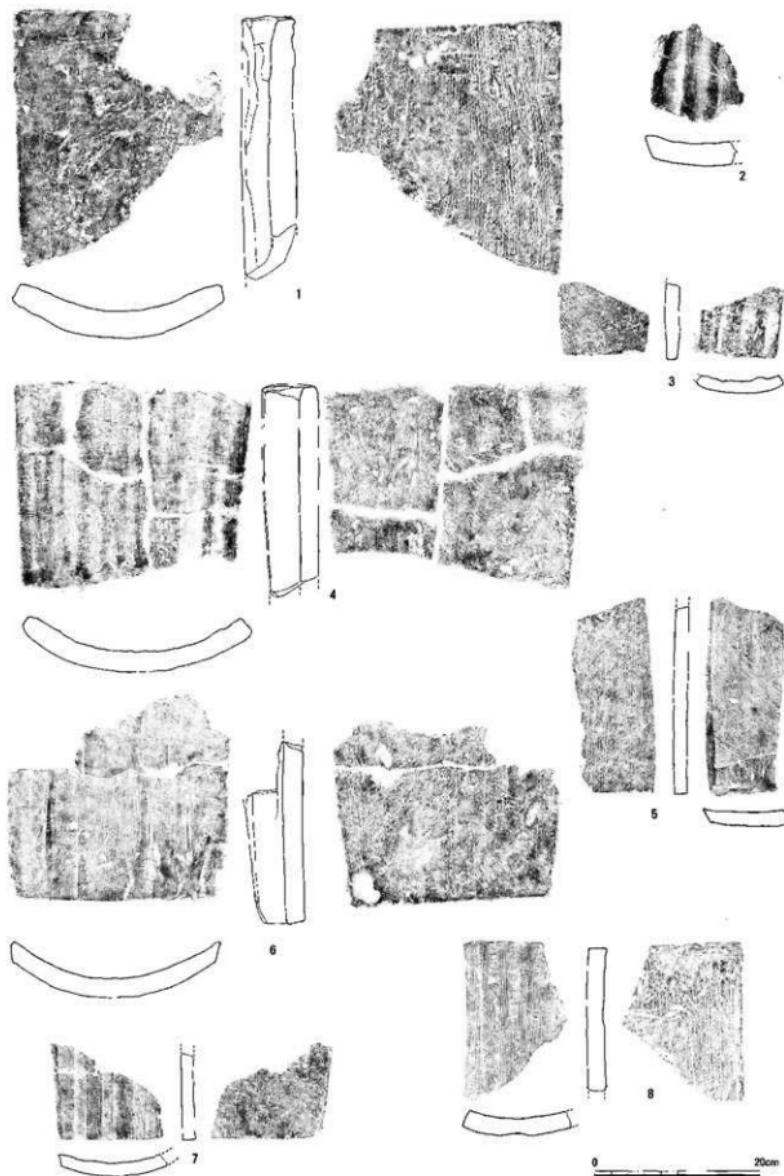
第34図 第1・3基壇出土平瓦実測図(1) (S = 1 : 6)



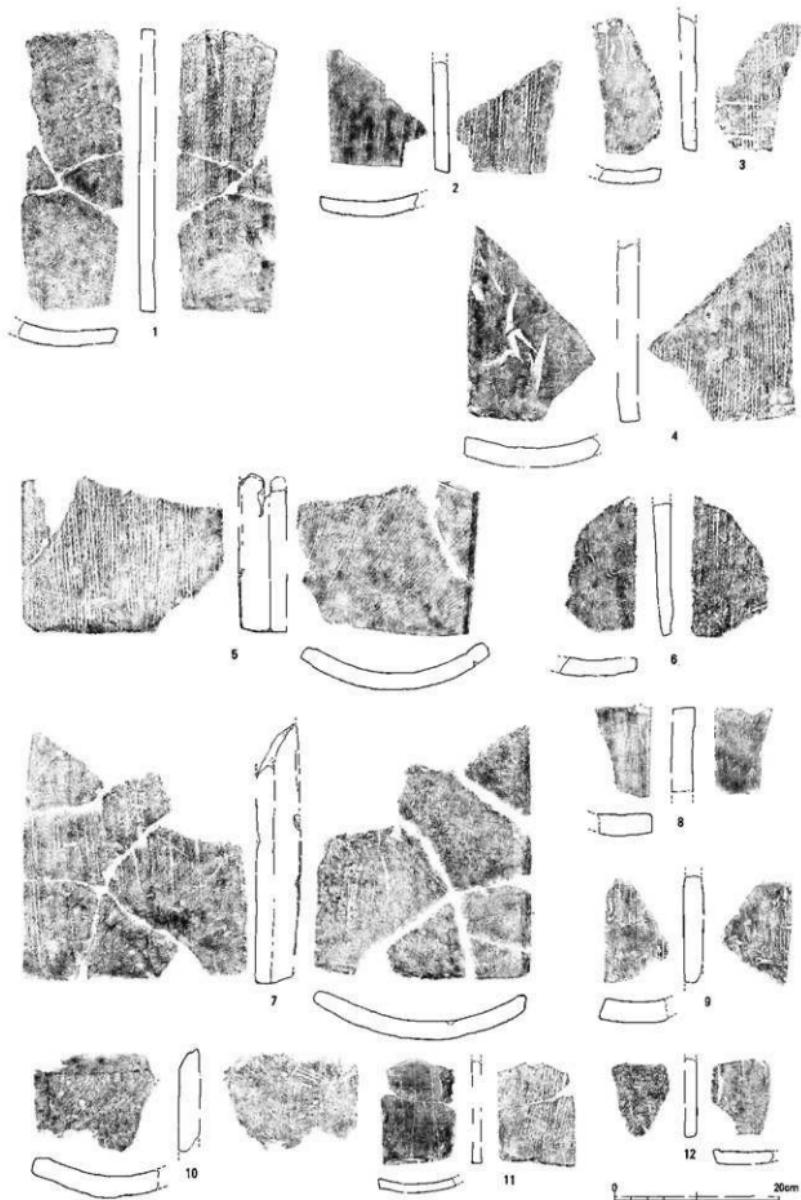
第35図 第1・3基出土平瓦実測図(2) (S = 1 : 6)



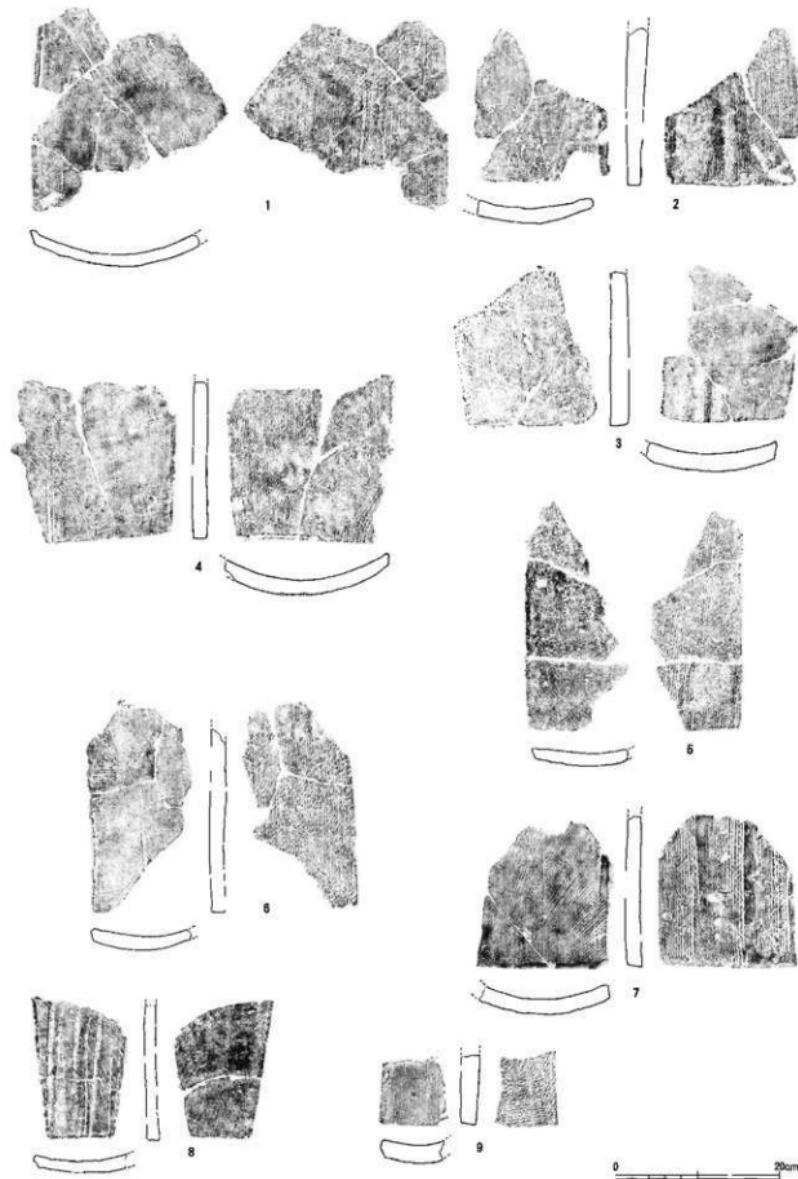
第36図 第1・3基壙出土平瓦実測図(3) ( $S = 1 : 6$ )



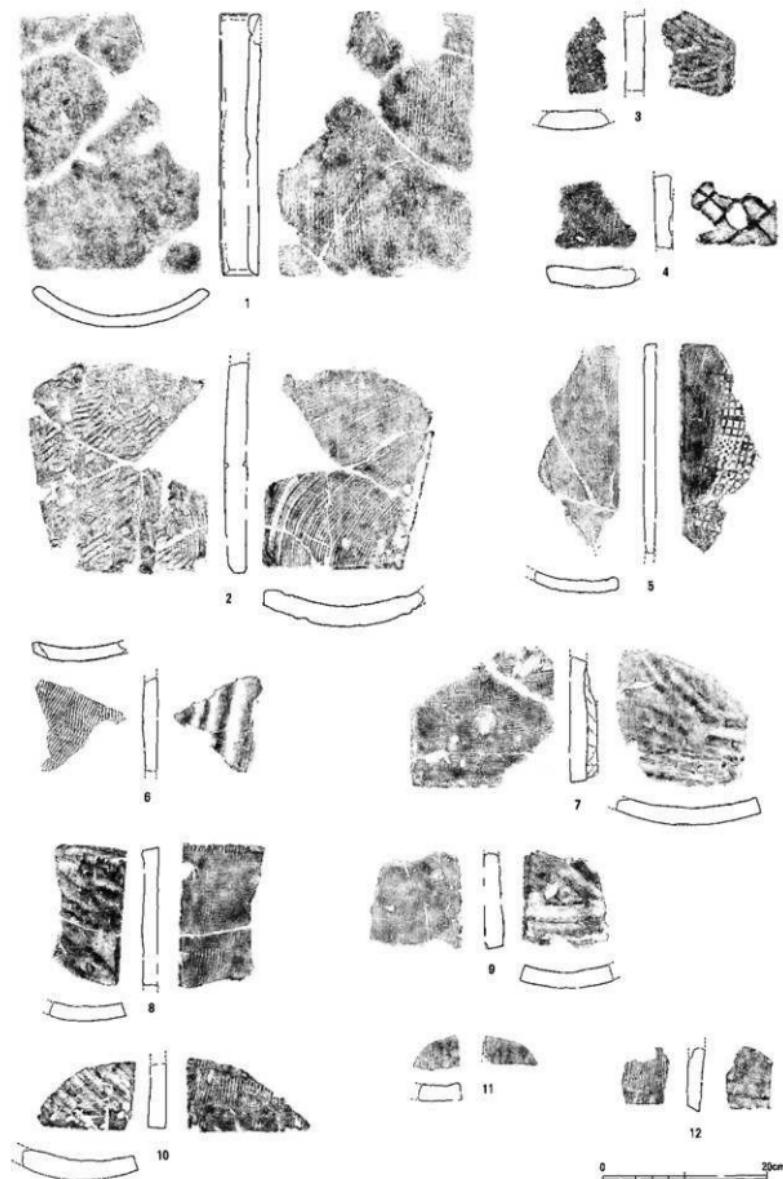
第37図 第1・3基壙出土平瓦実測図(4) (S = 1 : 6)



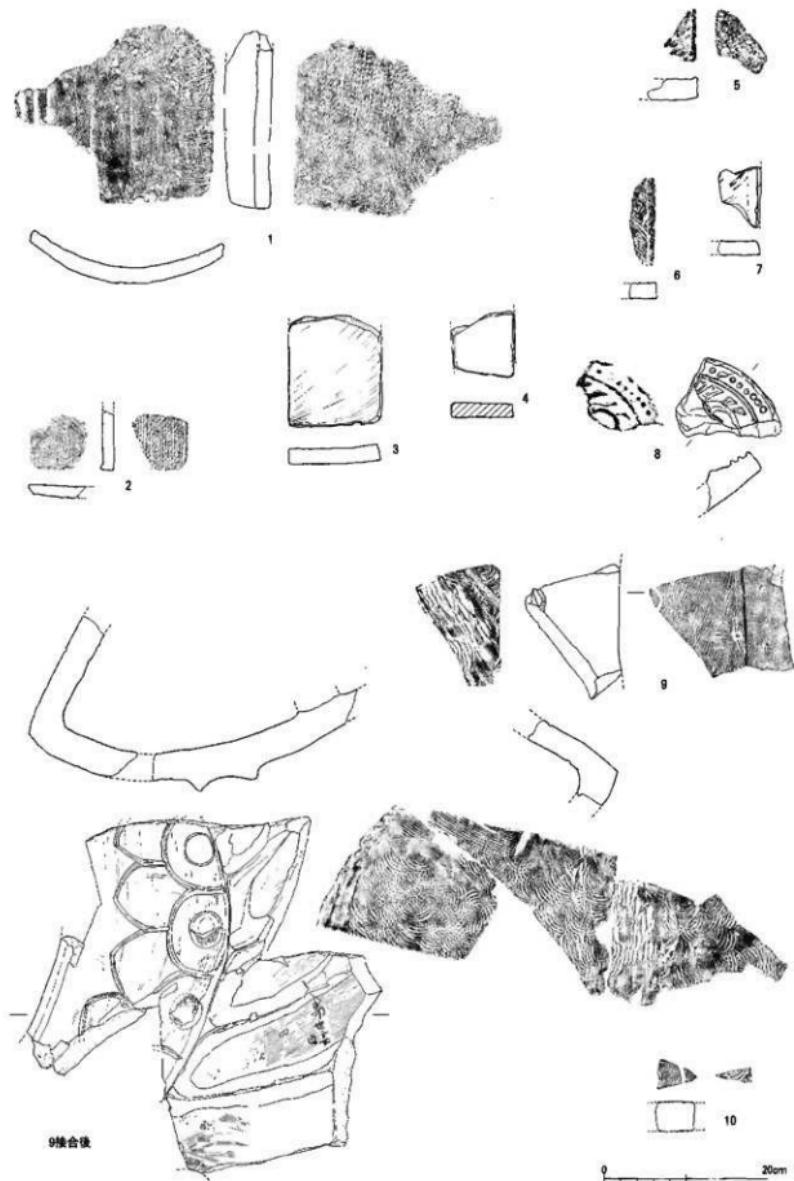
第38図 第1・3基塩出土平瓦実測図(5) (S = 1 : 6)



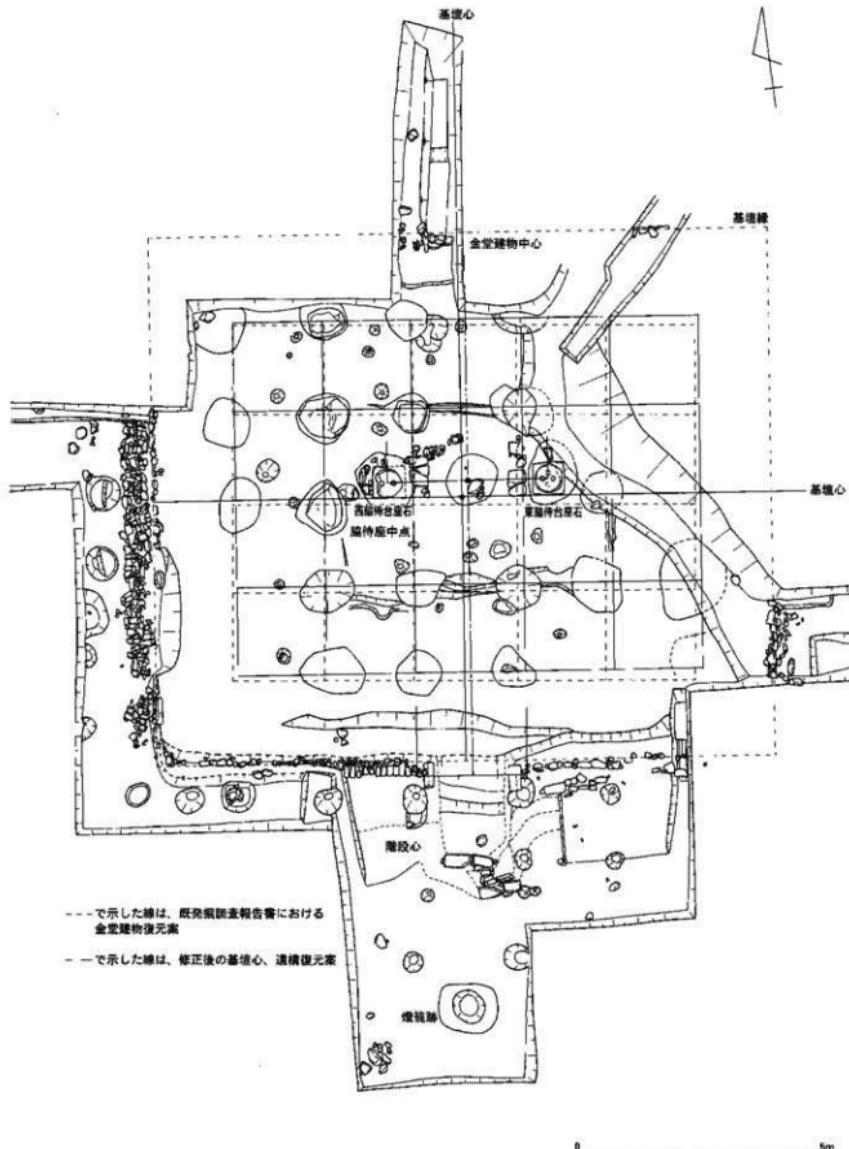
第39図 第1・3基壇出土平瓦実測図(6) (S = 1 : 6)



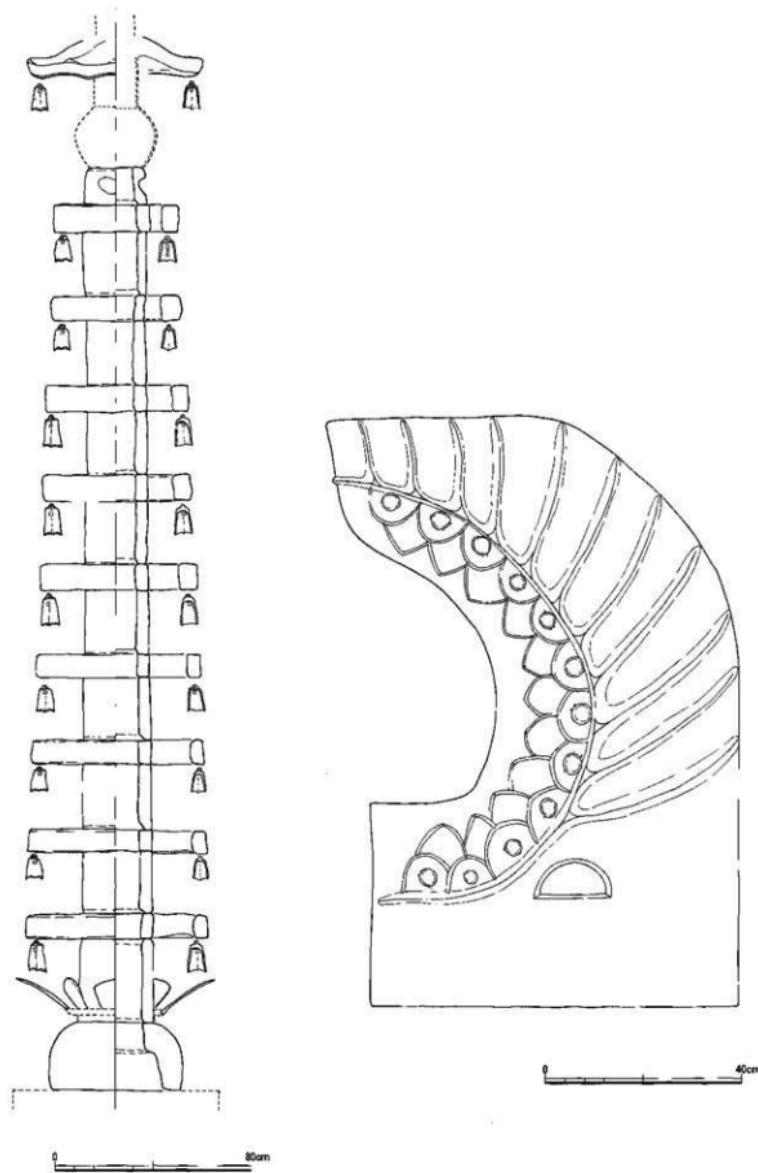
第40図 第1・3基壇出土平瓦実測図(7) ( $S = 1 : 6$ )



第41図 面戸瓦・熨斗瓦・鬼瓦・鶴尾実測図 ( $S = 1 : 6$ )

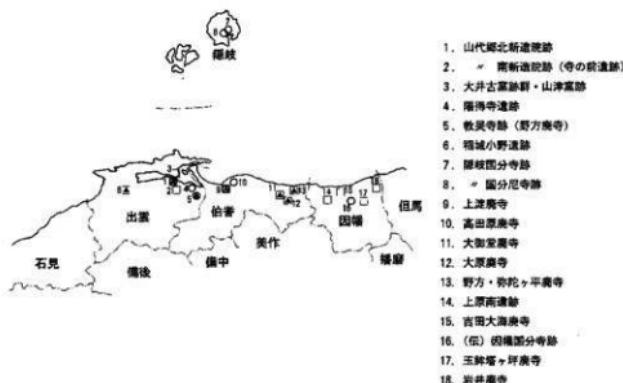


第42図 第2基壇実測図 ( $S = 1 : 100$ )



第43図 東塔相輪・金堂鰐尾復元想像図（相輪S=1:20、鰐尾S=1:10）

△山陰系鶴尾  
○上淀庵寺軒丸瓦  
▲額面施文軒平瓦



第44図 山陰系鶴尾・上淀庵寺式軒丸瓦・額面施文軒平瓦出土地



第45図 北新造跡 II・III類軒丸瓦・V類軒平瓦関係遺跡位置図

第2表 出土遺物観察表

拂図	拂図番号	図版番号	器種	石材	出土場所	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	形態・手法等	備考
第3図			石鏡	黒曜石	第4墓埋付 近表探	2.5×1.6×0.4	0.95	円基式	

拂図	拂図番号	図版番号	分類	器種	部位	出土場所	口径：器高： 底径(cm)	色調：胎土：焼成	形態・手法等	備考
第16図	1	須恵器	蓋	口縁部 北裏表	18-3Tr	口径12.7	色調：淡灰色 胎土：黄白色 内外面回転 の砂粒をや多く含む 焼成：ナデ 良好	内面に煤付着		
	2	須恵器	蓋	口縁部 SK03	17-1Tr	口径11.2	色調：灰色 胎土：2mm大の白色の砂粒を含む 焼成：ナデ、頂部へラケズリ 良好	内外面回転		
	3	須恵器	蓋	17-1Tr サブトレン 下唇	器高3.4	口径9.0	色調：青灰色 胎土：2mm回転ナデ、頂 の大白色の砂粒を含む 焼成：部へラケズリ 良好	内外面回転		
	4	須恵器	环	口縁部 北拡張表土	18-1Tr	口径7.5	色調：黄灰色 胎土：白色の 砂粒を含む 焼成：良好	内外面回転 ナデ		
	5	須恵器	环	口縁部 北拡張表土	18-1Tr	口径11.4	色調：黄灰色 胎土：砂粒を ほとんど含まない 焼成：良好	内外面回転 ナデ		
	6	須恵器	高坏	脚部 表土	18-4Tr	底径11.2	色調：暗灰色 胎土：白色の砂粒を含む 焼成：良好	内外面回転 ナデ、1面に 線状のスカシ 2条		
	7	須恵器	高坏	脚部	18-4Tr No.19	底径11.2	色調：灰色 胎土：1~2mm の白色の砂粒を含む 焼成：内山ナデ 良好	外表面被り、 内山ナデ		
	8	須恵器	甕	頸部 北拡張表土	18-1Tr	口径25.0	色調：黄灰色 胎土：白色の 砂粒を多く含む 焼成：良好	外表面平行タタ キ、内面押さえ 心円押さえ		
	9	土師器	甕？	把手？	17-1Tr 赤褐色土	口径43.6	色調：黄褐色 胎土：1~2mm の白色の砂粒を含む 焼成： 良好	指押さえ		
	10	土師器	甕？	端部	17-1Tr No.32	口径25.0	色調：暗褐色 胎土：1~2m の白色の砂粒を含む 焼成： 良好	外表面タタキ か？内面摩滅		
	11	土師器	甕	口縁部 No.290 サブレ下唇、 暗褐色土	17-1Tr	口径43.6	色調：黄褐色 胎土：2~3mm の白色の砂粒を含む 焼成：内面ケズリ 良好	外表面ハケメ 内面ケズリ		
	12	土師器	甕	口縁部 黄色粘質土	18-1Tr	口径25.0	色調：橙褐色 胎土：砂粒を 多く含む 焼成：良好	外表面ハケメ 内面ケズリ		
	13	土師器	甕	頸部 黄色粘質土	18-1Tr	口径25.0	色調：橙褐色 胎土：砂粒を 含む 焼成：良好	外表面ハケメ、 内面摩滅		
	14	土師器	甕	底	17-1Tr No.315	口径25.0	色調：黄褐色 胎土：1~2m の砂粒を含む 焼成：良好	外表面ナデ、内 面ケズリの後 ナデ		
	15	土師器	甕？	基底部？	18-1Tr A1黄色粘 質土	口径15.8	色調：明黄褐色 胎土：灰。 赤色の砂粒を含む 焼成：良 好	外表面ハケメ、 内面摩滅		
	16	須恵器	蓋	口縁部 北拡張表土	18-1Tr	口径15.8	色調：黄灰色 胎土：白色の 砂粒を含む 焼成：良好	内外面回転 ナデ		
	17	須恵器	蓋	頂部附近 北拡張黄色 粘質土	18-1Tr	口径25.0	色調：黄灰色 胎土：黄白色的 小砂粒を含む 焼成：良好	外表面の一部に つまみ脱 回転ケズリ脱 落を残す		
	18	須恵器	蓋	つまみ	18-1Tr 北拡張黄色 粘質土	つまみ径4.6	色調：灰色 胎土：1mm以 下的砂粒を含む 焼成：良好	外表面灰被り、 内面ナデ		
	19	須恵器	环	口縁部 黄色粘質土	18-1Tr	口径12.0	色調：明灰色 胎土：白色の 砂粒を含む 焼成：良好	内外面回転 ナデ		

20	須恵器	壺	頂部付近	17-Tr No.192	つまみ径4.9	色調：灰色 胎土：砂粒を含む 焼成：良好	重ね焼きの痕跡を残す。 つまみ外側に回転ヘラケズリ	
21	須恵器	高台付壺	底部	18-Tr A3表土	底径9.6	色調：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を含む 焼成：良好	高台内側に重ね焼き？付着痕有り	
22	須恵器	壺	頸部	18-Tr 表上	頸部径8.8	色調：黄灰色 胎土：砂粒をやや多く含む 焼成：良好	頸部に突帯をめぐらす	
23	須恵器	壺	口縁部	18-4tr 表上	口径7.2	色調：黄灰色 胎土：1mm程度の砂粒を含む 焼成：良好	口縁部を強く屈曲させる	
24	須恵器	壺	底部	18-3Tr 西版強表土	底径10.2	色調：淡灰色 胎土：白色の砂粒を含む 焼成：良好	断面に接合痕？ 焼成時にひび割れ	
第1 17 回	土師器	高台付壺	底部	18-1Tr 北拡張区	底径7.7	色調：橙褐色 胎土：1mm程度の砂粒を含む 焼成：良好	外面横ナデ、 他はナデ 高い高台を外へ張り出す。	
2	土師器	高台付壺	底部	18-1Tr 北拡張区	底径7.0	色調：明褐色 胎土：1mm程度の砂粒を含む 焼成：良好	外面横ナデ、 他はナデ 环部は内溝 氣味に立ち上 がる。高台を外へ張り出す。	
3	土師器	高台付壺	底部	18-1Tr 北拡張区	底径5.7	色調：橙褐色 胎土：1mm程度の砂粒を含む 焼成：良好	外面横ナデ、 他はナデ 低い高台は直立気味	薄く煤付着
4	土師器	高台付壺	底部	18-1Tr 北拡張区	底径7.2	色調：橙褐色 胎土：やや大きめの砂粒を含む 焼成：良好	外面回転ナデ、 内面ナデ、高台の断面二角形	
5	土師器	壺	底部	18-1Tr 北拡張区	底径7.4	色調：橙褐色 胎土：1~3mmの砂粒を多く含む 焼成：良好	内面・底部 はナデ、外面 調整不明。大 部は内湾する	
6	土師器	壺		18-1Tr 北拡張区 灰色土	口径9.7：器 高2.8：底径 5.5	色調：橙褐色 胎土：透明な 微細砂粒を含む 焼成：良好	底面回転糸 切り、内外 面回転ナデ	内面の全 部に煤付着。灯 明皿
7	土師器	皿		18-1Tr No.86	口径10.0：器 高2.6：底径 4.7	色調：淡褐色 胎土：砂粒を 多く含む 焼成：良好	底部回転糸 切り、内面 回転ナデ	内面と口 縁部外面に 煤付着。灯 明皿
8	土師器	皿		18-1Tr 表上	口径10.4：器 高2.7：底径 5.6	色調：橙褐色 胎土：砂粒を 多く含む 焼成：良好	摩滅により調 整不明	口縁部内 外面に煤付着。灯 明皿
9	土師器	皿		18-1Tr No.89	口径10.4：器 高2.5：底径 4.4	色調：淡黃褐色 胎土：1mm程度の砂粒を含む 焼成：良好	底部回転糸 切り、他の調 整は摩滅によ り不明	
10	土師器	壺	底部	17-2Tr 表土	底径5.4	色調：黄褐色 胎土：1mm以下 の砂粒を含む 焼成：良好	調整は摩滅に より不明	
11	土師器	皿	底部	18-1Tr 北拡張区 黄色粘質土	底径4.1	色調：橙褐色 胎土：白色の 砂粒を多く含む 焼成：良好	底部回転糸 切り、外面ナ デ、内面摩 滅	
12	土師器	皿	底部	18-1Tr 北拡張区	底径5.6	色調：橙褐色 胎土：砂粒を 多く含む 焼成：良好	底部回転糸 切り、外面ナ デ、内面ナデ	
13	土師器	皿	底部	18-1Tr 北拡張区	底径4.2	色調：黄褐色 胎土：砂粒を 含む 焼成：良好	底部回転糸 切り、他の調 整は摩滅によ り不明	口縁部内 外面に煤付着。灯 明皿

14	土師器皿	皿	底部	18-1Tr No.87	底径4.3	色調：淡黄褐色 胎土：1mmの大砂粒を含む 焼成：良好	底部回転糸切り、他の調整は摩滅により不明	
15	土師器皿	皿	底部	18-1Tr 北拡張区	底径3.8	色調：明橙色 胎土：1mm:底部回転糸程度の白色の砂粒を少し含む 焼成：良好	見込み部を除き少く保付着。灯明皿	
16	土師器皿	皿	底部	18-1Tr C1 灰色土	底径10.5	色調：黄褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：良好	僅かに煤付着	
17	土師器皿	皿	底部	18-1Tr 北拡張区	底径5.0	色調：棕褐色 胎土：白色の砂粒を多く含む 焼成：良好	底部切り離し不透明、内面ナデ、内面不明	
18	土師器皿	皿	底部	18-1Tr No.88	底径6.0	色調：明褐色 胎土：1mm以下の砂粒を含む 焼成：良好	底部回転糸赤色顔料切り・板状の造布底部穿孔内外面回転ナデ?	
19	土師器皿	皿	底部	18-1Tr	底径6.6	色調：明灰褐色 胎土：黒・灰色の微細粒を含む 焼成：良好	内面に煤付着。灯明皿	
20	土師器皿	皿	口縁部	18-1Tr 北拡張区	口径14.8	色調：明褐色 胎土：白色の底部切り離し小砂粒を多く含む 焼成：良好	僅かに煤付着	
21	土師器皿	环	底部	18-1Tr 北拡張区	底径4.3	色調：黄褐色 胎土：透明な小砂粒を多く含む 焼成：良好	底部回転糸切り、内外面回転ナデ	
22	土師器皿	环	底部	18-1Tr B6 表上	底径5.2	色調：暗褐色 胎土：1~3mm程度の砂粒を多く含む 焼成：良好	見込み部に煤付着	
23	土師器皿	柱状高台付皿	底部	18-1Tr 黄色粘質土	底径4.6	色調：淡褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：良好	底部回転糸切り、外面回転ナデ、内面ナデ	
24	土師器皿	柱状高台付皿	底部	18-1Tr A3 表上	底径6.0	色調：淡褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：良好	底部回転糸切り、外面回転ナデ	
25	土師器皿	环	底部	18-1Tr 北拡張	底径5.1	色調：明淡橙褐色 胎土：赤・白色の小砂粒を含む 焼成：やや軟質	見込み部に煤付着。内面に剥離により不明	

標因 種	因版 番号	器種	石材	部位	出土場所	法量	形態	特徴等	備考
第18 回	1	巖石?	砂岩質		17-1Tr SK01	30.4×35.3× 23.5 43.6kg		鉄分が付着	
	2	右製相輪	米待石	九輪 外輪	18-2Tr H10 灰色土	高さ9.2 厚さ4.2	推定直徑約72cm	内面側に 煤付着、 一部が赤変	
	3	石製相輪	米待石	九輪 外輪	18-1Tr D8 黄色粘質土	厚さ5.7	軸部の基部を僅かに残す	下面・内面 に煤付着。 内面の一部が 赤変	
	4	石製相輪	米待石	九輪 外輪	18-2Tr No.79	高さ9.3 厚さ6.0			

第 19 回	1	石製相輪	凝灰岩	大蓋	18-4Tr No.43	復元直径72.4 厚さ6.9	平面八角形 所存り	風鐸設置痕 2ヶ			
	2	石製相輪	米待石	九輪 外輪	18-3Tr No.6・9・15	外径51.0 内径36.8 高さ11.2 厚さ7.2	軸部を残す		風鐸設置痕		
3	石製相輪	来待石	九輪 外輪	18-3Tr No.46・47・55・64・70・76・P2	外輪外径53.0 内径36.1 内輪外径24.1 内径14.2 高さ10.4	4軸、風鐸設置痕 2ヶ所					
第 20 回	1	石製相輪	来待石	九輪 外輪	18-3Tr No.56	外径60.5 内径45.8 高さ10.6 厚さ7.5					
2	2	石製相輪	米待石	九輪 外輪	18-3Tr No.13	外径 71.6 ~ 73.2 内径59.8 高さ9.4 厚さ6.4 軸部高さ8.2	軸部下面を削り、外輪を垂下させる。		風鐸設置痕		
	3	石製相輪	来待石	九輪 外輪	18-4Tr No.38	外径74.6 内径62.0 高さ9.5 厚さ6.3 軸部高さ8.2 軸部幅8.2	軸部下面を削り、外輪を垂下させる。		風鐸設置痕		
4	4	石製相輪	来待石	擦管(中)	18-3Tr No.4・33	外径 23.6 ~ 25.8 内径 14.3 ~ 14.6 高さ26.1 厚さ5.5	下端部に雨仕舞いの傾斜加工 有り	内面の調整は難	内面の調整は難 劣化が著しい		
	5	石製相輪	米待石	擦管(中)	18-4Tr No.39	外径28.4 内径17.1 高さ25.9 厚さ5.6	下端部に雨仕舞いの傾斜加工 有り		内面の調整は難		
6	6	石製相輪	来待石	擦管(小)	18-3Tr No.32	外径 23.2 ~ 25.2 内径 13.2 ~ 15.8 高さ15.0 厚さ4.7	下端部に雨仕舞いの傾斜加工 有り	外面に精円形の鑿み			
	7	石製相輪	来待石	擦管(大)	18-3Tr No.8・13・15	外径 29.9 ~ 30.5 内径 20.1 ~ 20.3 高さ34.1 厚さ4.9	下端部に雨仕舞いの傾斜加工 有り		外面に煤が付着し一部黒度する		
8	8	石製相輪	来待石	伏鉢	18-3Tr No.48・86	最大径54.6 基底部外径 52.4 高さ27.8 擦管部内径 21.1 ~ 22.0 擦管当たり外 径33.2 擦管部長20.2			火を受けた跡があり、外面に煤付着。		

押 印 番 号	拂 図 版 番 号	器種		出土場所	法 量	形 態	特 徴 等	備 考
第 21 回	11	相輪風鐸		18-3Tr No.1	鋸身高9.5 鋸長6.9 鋸幅径6.3 鋸厚3.0	横断面菱形	紐のみ鉄製で、はめ込み	

2	相輪風 鐸	18-3Tr No.27	総高11.0 紐高1.9 鐸身高9.1 幅長径7.0 幅短径5.9 紐厚さ1.4	横断面楕円形	内面に鉄製 風招吊り金具 が接着	同時に鉄 製金具片 3点が山 土
3	相輪風 鐸	18-3Tr No.2	総高13.1 紐高1.7 鐸身高11.4 幅長径8.4以 上 幅短径6.4 紐厚さ1.2	横断面菱形	紐を丁寧に面 取りする。型 持たせ孔が不 整形	より外 型は3分 割。風招 吊り金具 が見えない。 吊り金具 が残存
4	相輪風 鐸	18-4Tr No.44	総高10.6 : 鍔、横断面楕円形 高1.9 : 鍔身 高8.7 : 幅長 径7.0 : 幅短 径6.1	紐を丸く作る	紐 内面に風 招吊り金具を 差し込む? 丁 寧な作りで、 残存状態も 良好	同時に鉄 製吊り金 具、鉄製 風招吊り 金具が出 土
22 回	蓮弁状 銅製品	18-3Tr	長さ26.9 幅18.3 厚さ0.8	断面長方形	鉄製紙で別 材を固定	出土時に、 有機質の 付着物あり
23 回	鉄釘	18-1Tr 表土	残存長7.3 太さ0.65~0.8	断面長方形		
2	鉄釘	18-1Tr 表土	残存長6.0 太さ0.7~0.8	断面長方形		
3	鉄釘	18-1Tr C3表土	残存長4.3 断面0.8	断面長方形		
4	鉄釘?	18-1Tr C7黄色粘 質土	主材残長3.9 太さ0.8~1.1 別材残存長3.8	釘2点が接着しているか?		
5	鉄釘	18-2Tr No.77	残存長31.2 基部太さ2.2	木質付着		
6	鉄製品	18-2Tr H9表土	残存長3.7 太さ0.6	断面長方形		
7	鉄製品	18-1TrA3 黃色粘質土	残存長4.9 太さ0.4~0.6	断面長方形		
8	鉄製吊 り金具	18-2Tr 表土	残存長2.7 太さ0.7	断面長方形		
9	鉄釘	18-2Tr No.80	全長9.2 太さ1.2	頂部の狭い釘か、吊り金具		
10	鉄釘	17-3Tr No.193	残存長4.9 太さ0.6	断面長方形		
11	鉄釘	18-3Tr 北表土	残存長8.8 太さ0.8	断面長方形		
12	鉄釘	18-3Tr B4表土	残存長11.4 太さ0.9~1.5	断面長方形		
13	鉄釘	18-4Tr No.41	残存長6.3 太さ0.8~0.9	断面長方形		
14	鉄釘	17-3Tr SD01褐色 土	残存長4.7	木質が多く付着		
15	鉄釘?	18-3Tr B4灰色土	残存長7.3 太さ1.1~1.4	断面長方形		
16	鉄釘?	18-4Tr 灰色土	残存長5.2 太さ0.5~0.8	断面長方形		
17	鉄製品	18-4Tr 灰色土	残存長6.1		釘ではない	
24 回	鉄釘	18-4Tr No.40	残存長24.1 太さ1.0~1.8	頂部が狭い		鉛に瓦の スタンプが 残る
2	鉄釘	18-3Tr No.49	残存長17.5 太さ1.2~1.4	頂部が狭い	頭中に薄い別 材が接着	

3	棒状鉄 製品	18-3Tr No.25	残存長21.7 太さ1.2~1.5	鍛造特有の剥離が見える	大型の鉄 釘か?
4	板状鉄 製品	18-3Tr A4灰色土 接合端瓦溜 まり	残存長5.3 幅2.0~2.3 厚さ0.4		不明鉄製品
5	板状製 品	18-3Tr 接合端瓦溜 まり	残存長4.5 幅1.4~2.2 厚さ0.4	S字状に湾曲	棒状製品 のスタンプ が見える
6	板状製 品	18-3Tr B6灰色土	残存長2.1 幅2.2 厚さ0.25		
7	鉄製吊 り金具	18-3Tr A4灰色土	残存長4.2 太さ0.4~0.6	2点連結	
8	鉄製吊 り金具	18-3Tr A4灰色土	残存長3.3 太さ0.5		
9	鉄製吊 り金具	18-3Tr 北表土	土材残存長 3.1 別材残存長 2.7 太さ0.6	2点連結	風鐸に開 わるか?
10	鉄製吊 り金具	18-3Tr B6灰色土	残存長4.5 太さ0.6	鉤形を呈す、剥離が見える	風鐸に開 わるか?
11	鋼製金 具	18-3Tr P 2	残存長3.2		表面剥落、地 金のみ
12	鋼製金 具	18-3Tr P 2	残存長1.9		表面剥落、地 金のみ

拂 拭 図 版 番 号	拂 拭 部 分 名	分類	部位	出土場所	法 量	色調・胎土・焼成	形態・特徴等	備 考
第 25 回	軒丸瓦	I	瓦当部	18-3Tr 抵張表土	重さ0.34kg	色調：灰色 胎土：やや粗 黑・白色の砂粒を含む 還元炎で硬質	外区に板状の 軒丸瓦部接合位置は 板付着	裸色自然
1	軒丸瓦	II	瓦当頂部	18-3Tr C2灰色土 西脇抵張部	瓦当厚さ1.5 丸瓦部 厚さ1.7 重さ0.28kg	色調：淡灰色～淡褐色 胎土：少量含む 燒成：還元炎が軟質	外区に板状の 丸瓦部接合位置は 瓦当最上部	
2	軒丸瓦	II	瓦当下部	18-3Tr 西脇抵張部		色調：黃褐色 胎土：白色の 砂粒を少量含む、ザラザラした 感じ 燒成：還元炎で良好	外区に板状の 庄屋	
3	軒丸瓦	IIIa	瓦当下部	18-1Tr 北脇張 黄色粘土土	瓦当厚さ2.0 重さ0.29kg	色調：淡褐色 胎土：赤・暗 褐色の粒を含む 燒成：酸化 炎味味だが良好	中房の高価は ほとんど見え ない	
4	軒丸瓦	IIIa	瓦当下部	18-2Tr I.9	瓦当厚さ2.3	色調：褐褐色 胎土：赤色の 粒を含む 燒成：酸化炎でやや 軟質	全面摩滅	
5	軒丸瓦	IIIb	瓦当下部	17-2Tr No.405	中房径5.5~ 5.6 瓦当厚さ3.1 重さ0.52kg	色調：橙褐色 胎土：白色の 小砂粒、赤色の粒を含む 燒成：酸化 炎味味だが良好	中房に疤痕が 目立つ	
6	軒丸瓦	IIIb	瓦当下半	17-2Tr No.83	瓦当径14.9~ 15.7 内区径 13.4~13.8 中房径5.6 瓦当厚さ4.0 丸瓦部厚さ3.0 重さ2.7kg	色調：橙褐色 胎土：白色の 小砂粒と黒い粒を含む 燒成：酸 化炎味味だが良好	中房に疤痕が 目立つ	
7	軒丸瓦	IIIb	瓦当	18-1Tr No.83				
8	軒丸瓦	IIIb	外区・丸 瓦部	17-3Tr No.102	丸瓦部厚さ 3.1 重さ0.29kg	色調：青灰色 胎土：白色の 小砂粒と黒い粒を含む 燒成： 還元炎で硬質		
9	軒丸瓦	IIIb	瓦当	18-1Tr No.84	外区径15.9 内区径13.7 中房径5.8 瓦当厚さ3.8 重さ1.24kg	色調：焼色 胎土：赤・白色 の小砂粒と墨粉を含む 燒成：酸化炎でやや 軟質	中房の傷が目 立つ	

	10	軒丸瓦	Ⅲb	瓦当	18-4Tr 表土	中房径5.6 瓦当厚さ3.6 重さ0.8kg	色調：瓦当面は灰褐色、他は 緑褐色 胎土：1mm程度の白 色の砂粒を多く含む 焼成： 酸化炎でやや軟質	中房の傷が目 立つ	
	11	軒丸瓦	Ⅲb	瓦当	18-3Tr 抗張表土	中房径5.5 瓦当厚さ3.7 重さ0.9kg	色調：明灰色、断面は緑褐色 胎土：白色の砂粒を多く含む 焼成：酸化炎でやや軟質	全面摩滅	
	12	軒丸瓦	Ⅲb	瓦当 頂部	18-4Tr	重さ0.2kg	色調：緑色 胎土：赤・白色 の砂粒を含む、表面に黒い粒が 見える 焼成：酸化炎気味だ が良好		
	13	軒丸瓦	Ⅲb	瓦当 頂部	18-3TrB1 灰色土	重さ0.14kg	色調：淡桃色 胎土：赤・白 色の砂粒を含む 焼成：酸化 炎で軟質	丸瓦部接合 の斜め方向の 割れが残る	
	14	軒丸瓦	Ⅲb	瓦当 頂部	18-4Tr サブ トレンチ	重さ0.52kg	色調：灰白色、断面は褐色～ 明褐色 胎土：白色の砂粒を 多く含む 焼成：酸化炎でやや 軟質	端井界線を 繋ぐ危険	
	15	軒丸瓦	Ⅳa	瓦当 下半	18-3Tr 表土	瓦当厚さ3.9 重さ0.7kg	色調：明黄色白色、断面は暗灰 色 胎土：ほんの少しだけ砂粒を含ま ない、黒い粒が見える 焼成： 還元炎が非常に軟質		
	16	軒丸瓦	Ⅳa	瓦当の一 部	18-3Tr 西松表土	瓦当厚さ2.5 重さ0.672kg	色調：青灰色 胎土：白・黑 色の砂粒を確かに含む 焼成：補強粘土が 厚い	瓦当裏面の 砂粒が確かに含む 焼成：補強粘土が 厚い	
第 26 回	1	軒丸瓦	V	完形に近 い	18-1Tr 北松臺黄色 粘質土	全長30.7 瓦当面径12.3 中房径3.0 内区径7.0～ 7.4 外区径10.0～ 10.4 瓦当厚さ2.5 重さ1.73kg	色調：灰色 胎土：白色の砂 粒を多く含む 焼成：還元炎 で良好	極型痕あり	
	2	軒丸瓦	V	瓦当頂部 ～丸瓦部	17-1Tr No.156	中房径3.1 内区径7.6 外区径13.3 瓦当厚さ1.6 重さ1.06kg	色調：淡白色、断面は明桃色 胎土：白色の砂粒を含む 焼成：酸化炎気味		
	3	軒丸瓦	V	瓦当頂部 ～丸瓦部	17-1Tr No.96	中房径3.0 内区径7.6 外区径13.3 瓦当厚さ1.4 重さ0.45kg	色調：灰色、断面桃色 胎土： 白色の小砂粒をやや多く含む 焼成：還元炎	極型痕あり。 范の木日 外縁に危険 が僅かに 見える	
	4	軒丸瓦	V	瓦当～丸 瓦部	18-1Tr D8 黄色 粘 質土	瓦当面径 (12.4) 中房径3.2 内区径7.9 瓦当厚さ1.9 重さ1.35kg	色調：灰色 胎土：白色の小 砂粒を含む 焼成：還元炎で 良好	粘上板織 ぎ目有り	
	5	軒丸瓦	V	瓦当下端	17-1Tr No.78 赤黄褐色土	瓦当厚さ1.5 重さ0.011kg	色調：灰色、断面桃色 胎土： 白色のやや大きな砂粒をやや多 く含む 焼成：還元炎		
	6	軒丸瓦	V	瓦当の一 部	18-1Tr 還～丸瓦 B6表土 泥	中房径2.8 瓦当厚さ1.2 重さ0.7kg	色調：褐色 胎土：白・赤色 の砂粒を含む 焼成：酸化炎 だが比較的良好	丸瓦部は、 凹凸両面を 面取りし、差 込む	接合資料
	7	軒丸瓦	V	瓦当	18-1Tr A2・A3 黄色粘質土	瓦当面径13.8 中房径3.1 内区径7.9 外区径11.6 瓦当厚さ1.6 重さ0.44kg	色調：褐色 胎土：白色の砂 粒を多く含む 焼成：酸化炎		摩滅
	8	軒丸瓦	V	瓦当頂部	17-3Tr No.63	重さ0.08kg	色調：灰色 胎土：白色の大 きな砂粒を多く含む 焼成：還 元炎		

9	軒丸瓦	V	瓦当	18-1Tr No.84	中房径3.0 厚さ1.8 重さ0.33kg	色調：淡褐色、瓦当面は明灰色 胎土：白色の小砂粒を含む 焼成：酸化炎気味	丸瓦接合面に布目 のスタンプ を残す
10	軒丸瓦	V	瓦当～丸 瓦部	18-1Tr 黄色粘質土	瓦当面径13.1 中房径3.0 内区幅7.4 外区幅10.9 瓦当厚さ2.1 重さ1.04kg	色調：灰色 胎土：灰色の小 砂粒を含む 焼成：還元炎で 良好	接合資料
11	軒丸瓦	V	瓦当	18-1Tr No.85	中房径3.9 内区幅7.5 外区幅10.9 瓦当厚さ2.2 重さ0.38	色調：橙色、断面と瓦当面の 一部は明灰色 胎土：赤・白 色の砂粒を含む 焼成：酸化 炎焼成でやや軟質	
第 27 回	軒平瓦	I a	額面	18-3Tr 北表土	厚さ3.0 重さ0.19kg	色調：淡黃白色 胎土：白色 の小砂粒を含む 焼成：酸化 炎気味でやや軟質	摩滅
2	軒平瓦	I c	額面～側 部	18-3Tr C1灰色土	厚さ2.6 重さ0.36kg	色調：淡褐色 胎土：白色・透 明の小砂粒を含む 焼成：酸 化炎気味でやや軟質	側面に分 割界線を 僅かに残 す。 摩滅 が進む
3	軒平瓦	I c	額面	17-2Tr 表上	厚さ3.0 重さ0.36kg	色調：淡褐色 胎土：白色・ 透明の砂粒を少量含む 焼成： 酸化炎気味で軟質	門面に紐 状の仕掛
4	軒平瓦	II	瓦当面～ 平瓦部凹 面	18-4Tr 灰色土	瓦当面高さ 4.3 重さ0.4kg	色調：明褐色 胎土：白色の 小砂粒を僅かに含む 焼成： 酸化炎	上外区が存 在しない 平 瓦部に横骨 組有り
5	軒平瓦	III D	瓦当下端 ～額面	18-3Tr 北表土	重さ0.36kg	色調：黄白色 胎土：白色の 砂粒を多く含む 焼成：酸化、タイプ 炎気味で軟質	III類で段取の 摩滅
6	軒平瓦	III	瓦当 下端	18-3Tr B1灰色土	重さ0.14kg	色調：灰白色 胎土：微白色 の大きな砂粒、 黄白色の小砂 粒を含む 焼成：還元炎だが 軟質	
7	軒平瓦	III	瓦当 下端	17-3Tr 黄褐色土	重さ0.07kg	色調：青灰色、断面は桃色 胎土：白色の砂粒を多く含む 焼成：還元炎で硬質	文様が堅 い
8	軒平瓦	III	瓦当 右端	18-3Tr	重さ0.38	色調：灰白色 胎土：白・灰 色のやや大きな砂粒を含む 焼成：還元炎だがや軟質	摩滅
9	軒平瓦	III	瓦当 下端	18-3Tr C4灰色土	重さ0.95kg	色調：青灰色、断面赤褐色 胎土：黄白色のやや大きな砂粒 を含む 焼成：還元炎で硬質	外区外縁は 除外か？
10	軒平瓦	IV	狹端部を 欠く	18-3Tr A7灰色土	瓦当高さ4.8 瓦当幅22.9 上外区幅1.3 下外区幅1.0 脇外区幅1.4 平瓦部厚さ 2.1 弧深3.4 重さ2.52kg	色調：青灰色 胎土：白色の 小砂粒を少量含む 焼成：還 元炎で硬質	
11	軒平瓦	IV	瓦当右半	17-6Tr	瓦当部高さ 5.1 上外区幅1.2 下外区幅1.4 重さ0.45kg	色調：灰色～淡青灰色 胎土：灰色の 砂粒を含む 焼成：還 元炎でやや硬質	
12	軒平瓦	IV	瓦当右半 ～平瓦部	17-1Tr No.250	瓦当高さ5.4 上外区幅1.5 下外区幅1.5 脇外区幅1.9 丸瓦部厚さ 3.1 重さ1.68kg	色調：灰白色 胎土：灰色の 砂粒を多く含む 焼成：還元 炎だが軟質	摩滅

	13	軒平瓦 IV	瓦当 右半	18-1Tr 「3黄色粘質土	A 上外区幅1.2 弧深3.6 重さ0.78kg	色調：淡橙色 胎土：白色の砂粒をやや多く含む 燃成：酸化炎でやや軟質		
	14	軒平瓦 IV	瓦当 上端	18-3Tr 「3灰色表土	上外区幅1.5 弧深0.03kg	色調：橙色、断面灰白色 胎土：白色の砂粒を含む 燃成：酸化炎気味でやや軟質		断面中に胎土の色 調が異なる部分が ある
第 28 回	1	軒平瓦 IV	瓦当右半 ～平瓦側部	17-1Tr No.169	瓦当高さ5.1 ト外区幅1.3 ト外区幅1.4 脇外区幅1.7 丸瓦部厚さ 2.0 重さ1.06kg	色調：灰色 胎土：黄白色の砂粒をやや多く含む 燃成：還元炎で良好		
	2	軒平瓦 IV	瓦当	17-1Tr No.83・84	重さ0.14kg	色調：棕褐色 胎土：白色の砂粒を含む 燃成：酸化炎で軟質		
	3	軒平瓦 IV	狭端部を 欠く	17-1Tr No.252	瓦当高さ4.9 瓦当幅23.5 上外区幅1.4 下外区幅1.3 脇外区幅1.6 平瓦部厚さ 1.6 弧深3.3 重さ2.06kg	色調：灰色 胎土：白色の砂粒をやや多く含む 燃成：還元炎で良好		
	4	軒平瓦 IV	瓦当 北表土	18-3Tr	丸瓦部厚さ 2.8 重さ0.36kg	色調：明褐色 胎土：白色の砂粒を含む 燃成：酸化炎で 軟質		平瓦部凸 面剥離
	5	軒平瓦 IV	瓦当左端 ～平瓦側部	18-2Tr H11灰色土	瓦当高さ5.1 ト外区幅1.2 ト外区幅1.5 脇外区幅1.7 平瓦部厚さ 2.7 重さ0.72kg	色調：明灰色～淡褐色 胎土：白色の砂粒を多く含む 燃成：還元炎で硬質		平瓦部凸 面に指の 痕跡
	6	軒平瓦 IV	瓦当右端	18-1Tr 「2黄色粘質土	ト外区幅1.5 重さ0.36kg	色調：黄灰色～褐色 胎土：白・灰色の砂粒をやや多く含む 燃成：酸化炎気味		
	7	軒平瓦 IV	瓦当	17-2Tr	重さ0.53kg	色調：淡褐色 胎土：黄白色の砂粒を含む 燃成：酸化炎 氣味		全面摩滅
	8	軒平瓦 IV	瓦当右半 ～平瓦側部	18-2Tr H10灰色土 側部	瓦当高さ5.1 上外区幅1.4 下外区幅1.2 脇区幅2.0 平瓦部厚さ 1.6 重さ1.14kg	色調：淡褐色～褐色 胎土：白・灰色の大きな砂粒を多く含む 燃成：酸化炎が硬質		
	9	軒平瓦 IV?	平瓦側部	17-1Tr	平瓦部厚さ 2.1 重さ0.58kg	色調：灰白色 断面一部が赤褐色 胎土：白・灰色の砂粒を含む 燃成：還元炎だが 軟質	平瓦部に粘 土塊の巻き目 が見える	瓦当部は 残存しない
	10	軒平瓦	狭端部	17-1Tr No.125	平瓦部厚さ 2.2 重さ0.22kg	色調：暗灰色、断面は赤灰色 胎土：白色の砂粒を多く含む 燃成：還元炎	狭端部ケツリ、 凸面ケツリ	
	11	軒平瓦	蓋部付近	17-1Tr	平瓦部厚さ 2.5 重さ0.76kg	色調：黄白色～棕褐色 胎土：黄白色の砂粒を少量含む 燃成：酸化炎気味		
第 29 回	1	軒丸瓦 IIIb	瓦当頂部	18-3Tr C6灰色土	重さ0.12kg	色調：明黃灰色 胎土：白・灰色のやや大きな砂粒を含む 燃成：酸化炎でやや軟質		全面摩滅
	2	軒丸瓦 IIIb?	瓦当頂部	18-3Tr C6灰色土	重さ0.02kg	色調：明灰色 胎土：黄白色的砂粒をやや多く含む 燃成：還元炎がやや軟質		全面摩滅

	3	軒丸瓦	IIIb	瓦当頂部 B2灰色土	18-3Tr 重さ0.86kg	色調：褐色～黃白色 胎土：白色の砂粒を含む、赤い粒が見える 燃成：酸化炎でやや軟質	全面摩滅
	4	軒丸瓦	IVa	瓦当	18-1Tr 表土	重さ0.91kg	色調：乳白色 胎土：白・赤色の砂粒を含む 燃成：還元炎
第30回	1	軒平瓦?	不明	狹端側	18-2Tr H110灰色土	狹端部幅24.3 弧深さ4 厚さ3.0 重さ2.02kg	色調：淡褐色、断面橙色 胎土：砂粒が多く含む 燃成：酸化炎気味でやや軟質
	2	軒平瓦?	不明	狹端側	18-2Tr H10灰色土	厚さ2.7 重さ2.38kg	色調：乳褐色、断面褐色 胎土：黒色の小砂粒を含む、赤い粒が見える 燃成：酸化炎で良好やや軟質
	3	軒平瓦?	不明	狹端側	18-3Tr A7灰色土	厚さ2.0～2.3 重さ1.08kg	色調：淡灰色 胎土：白色の砂粒を少量含む、黒色の粒が見える 燃成：還元炎で良好
	4	隅切り瓦	IVb-2H		18-2Tr H110灰色土	長さ32.3 幅21.5 弧深さ6.6 厚さ1.9 重さ1.66kg	色調：暗灰色～黃白色 胎土：黄色の砂粒が多く含む、黒色の粒が見える 燃成：還元炎で良好
第31回	1	丸瓦	I a-G	狹端部	18-1Tr 北折厚	狹端幅11.8 厚さ2.6 重さ0.62kg	色調：明乳白色 胎土：黑色の砂粒を少量含む 燃成：還元炎だが軟質
	2	丸瓦	I a-2G	狹端部	18-1Tr C4表土	狹端幅11.3 厚さ2.2 重さ0.94kg	色調：淡褐色、断面暗灰色 胎土：黒色の砂粒を少量含む、黒色の粒が見える 燃成：酸化炎気味が良好
	3	丸瓦	II b	広端側	18-3Tr B5灰色土	厚さ1.6～2.1 重さ1.16kg	色調：青灰色 胎土：黄白色の微砂粒を少量含む、赤い粒が見える 燃成：還元炎で良好
	4	丸瓦	II c	広端部～側部	18-3Tr 黄色土	厚さ2.5 重さ0.46kg	色調：明灰色 胎土：黄白色の微砂粒を含む、エンジ色の砂粒を少量含む 燃成：還元炎で良好
	5	丸瓦	Va-2	側部	18-1Tr C6表土+	厚さ1.9 重さ1.18kg	色調：青灰色 胎土：黄白色の微砂粒を少量含む、赤い粒が見える 燃成：還元炎で良好 白色の微砂粒を少量含む 燃成：還元炎で良好
	6	丸瓦	Va-3G	狹端側	18-2Tr H110	狹端幅10.3 厚さ1.7 重さ1.04kg	色調：橙褐色 胎土：透明な砂粒を多く含む 燃成：酸化炎だが良好
	7	丸瓦	Va-4G	狹端側	18-1Tr C5表土	厚さ1.4 重さ0.86kg	色調：明淡褐色 胎土：1～2mmの白・青灰色の砂粒を含む 燃成：酸化炎気味でやや軟質
	8	丸瓦	Va-1	広端部～側部	18-1Tr C4表土	厚さ1.6 重さ0.84kg	色調：明褐色 胎土：1mm程度の白色の砂粒を含む 燃成：還元炎で良好
	9	丸瓦	Va-2T	狹端部～側部	18-1Tr C7表土	厚さ1.8 重さ0.58kg	色調：暗青灰色 胎土：1mm程度の白色の砂粒を少量含む 燃成：還元炎で良好
第32回	1	丸瓦	IVc-b	狹端～左側部	18-2Tr H10黄色粘土	厚さ2.7 重さ0.81kg	色調：黄褐色～淡褐色 胎土：白・褐色の微砂粒を含む、褐色の粒が見える 燃成：酸化炎

	2	丸瓦	IVb-G	狭端側	18-4Tr 厚さ1.4~1.9 色土・サブ 重さ0.9kg トレンチ	色調：端灰色 胎土：白色の砂粒を少々含む、灰色の粒が多く見える 焼成：還元炎だが軟質	凸面狭端面 面取り、凹面側面面取り	面に分割 施蹄を僅かに残す、行基式
	3	丸瓦	IVa-bG	狭端側	18-2Tr I9表土	厚さ1.6~2.0 重さ1.02kg	色調：白色 胎土：1~2mmの白・灰色の砂粒を多く含む 焼成：還元だが軟質	凹凸両面狭端面 面取り、凹面側面面取り
	4	丸瓦	IVc-2	広端部～ 側部	18-2Tr J11	厚さ1.0~1.4 重さ0.43kg	色調：淡橙色 胎土：白色の小砂粒を多く含む、赤い粒が見える 焼成：酸化炎焼成	側面ケズり、 広端部不明
	5	丸瓦	IVb-G	狭端側	18-2Tr H10	狭端幅12.0 厚さ1.2~1.9 重さ0.85kg	色調：明灰白色 胎土：白色の小砂粒を少々含む、黒灰色の粒が見える 焼成：還元だがやや軟質	凹凸両面狭端面 面取り、凹面側面面取り
	6	丸瓦	IVb	狭端部～ 側部	18-2Tr J10	厚さ1.6~1.8 重さ0.68kg	色調：灰色 胎土：黄白色の小砂粒をやや多く含む、灰色の粒が非常に多く見える 焼成：還元炎で良好	凹凸狭端面 面取り、凹面側面面取り
	7	丸瓦	IVb	広端側	18-3Tr P 2	厚さ1.4~1.8 重さ1.32kg	色調：暗青灰色 胎土：3mm以下の白色の砂粒をやや多く含む 焼成：還元炎で非常に硬質	広端面ケズり、 凹面側面面取り 歪みが大きい。 粘土板の裏張り目を複数、 広端部まで布が届いていない
	8	丸瓦	IVc-2	広端部～ 側部	18-2Tr H19灰色土	厚さ1.4 重さ0.24kg	色調：明緑褐色 胎土：黄白色の小砂粒を多く含む 焼成：酸化炎だが良好	広端面ケズり、 側面ケズり 側面に布が届いていない。 側部凹面に分割印?
	9	丸瓦	VIIa-s	側部	18-3Tr 灰色土	厚さ1.6 重さ0.09kg	色調：灰色 胎土：白色の小砂粒をやや多く含む 焼成：還元炎	側面ケズり、 凹面は無いナ デで布目を残 さない
第 33 回	1	丸瓦	VIIa-H	狭端側	18-2tr H10灰色土	狭端幅6.5 厚さ1.3 重さ0.76kg	色調：明緑褐色 胎土：白・赤色。透明の小砂粒を多く含む 焼成：酸化炎でやや軟質	凸面狭端面 面取り、凹面側面面取り 併のとじ 合わせ、 凹面ハケ メ
	2	丸瓦	VIIa	狭端部	18-2Tr H10灰色土	狭端幅6.2 厚さ1.4 重さ0.34kg	色調：淡青灰色 胎土：黄白色の小砂粒を多く含む 焼成：還元炎で良好	併のとじ 合わせ
	3	丸瓦	VIIb		18-3Tr C3灰色土	全長29.4 狭端幅6.6 厚さ1.3 重さ0.74kg	色調：淡灰色 胎土：白色の微砂粒を多く含む 焼成：還元炎で良好	併のとじ 合わせ
	4	丸瓦	玉緑	狭端部	18-3Tr P2	狭端幅9.4 幅14.0 重さ0.92kg	色調：黄灰～暗灰色 胎土：白色の小砂粒を含む、赤い粒が見える 焼成：還元炎だがやや軟質	凸面摩滅
	5	丸瓦	須恵器造 り	端部	18-2Tr H9灰色土	厚さ1.6 重さ0.16kg	色調：灰色 胎土：1mm前後の黄白色の砂粒を少々含む、ガラガラした印象で軒丸瓦類に似る 焼成：還元炎で良好	端面ケズリ 平行タタ キ後へケメ
	6	丸瓦	Ⅲb	不明	18-3Tr 灰色土	厚さ1.6 重さ0.16kg	色調：明黄褐色 胎土：白色の砂粒を少量含む 焼成：酸化炎で軟質	凸面に赤 色顔料付 着
第 34 回	1	平瓦	I a	広端側	18-4Tr 表土	厚さ2.8~4.5 重さ2.38kg	色調：明灰色 胎土：白色の小砂粒を少々含む 焼成：還元炎で良好	凸面広端面 側面ケズリ 削をなで、 軒平瓦の 可能性
	2	平瓦	I	端部	17-2+6Tr 褐色土	厚さ2.7	色調：淡青灰色 胎土：白色の砂粒を含む 焼成：還元炎で良好	面に布 端仕痕、 凸面端部 未調整

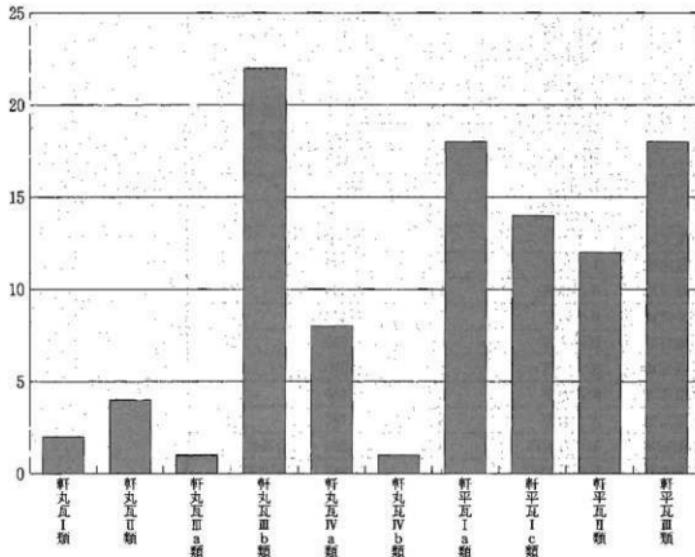
	3	平瓦	I a	端部	17-7Tr 表土	厚さ3.6 重さ0.41kg	色調：明灰色 胎土：黄白・ 灰色の砂粒を含む 焼成：還元炎で 良好	端面ケズリ、 側面ケズリ 未調整、凹面に布 端庄底	凸面端部 側面ケズリ、 凹面に横 方向のナデ 取り、軒平 瓦か?
第 35 回	1	平瓦	II a-1	側部	18-3Tr 北表土	厚さ2.8 重さ0.9kg	色調：淡灰色 胎土：黒色・ 砂粒を含む 焼成：還元炎で 硬質	側面ケズリ、 破断面を残す 取り	凸面横 方向のナデ 取り、軒平 瓦か?
	2	平瓦	II b-2	狭端部～ 側部	18-4Tr 灰色土	厚さ2.6～3.6 重さ1.76kg	色調：淡橙色 胎土：黒・白 色の繊砂粒を少し含む 焼成： 酸化炎気味だが良好	狭端面ケズリ、 凹面側面面 取り	凸面横 方向のナデ 取りをナデ消す、 軒平瓦か?
	3	平瓦	II a-2	広端部～ 側部	18-3Tr D4灰色土	厚さ2.6 重さ1.36kg	色調：暗褐色 胎土：黒 1mm前後の白色の砂粒 を少量含む 焼成：酸化炎で やや軟質	凸面端部面 取り、側面 分割面を端か に残す、側面 ケズリ	凸面広端 部に布端 庄底、凸面の 線目は軽く ナデ消す
	4	平瓦	I a	広端部～ 側部	18-1Tr 北拡張	厚さ3.0～3.5 重さ1.96kg	色調：乳白色 胎土：灰色の 砂粒を含む 焼成：還元炎で やや軟質	広端面ケズリ、 凹面側面面 取り	機骨が細い、 手元に作ら れており、 軒平瓦の 可能性有 り
	5	平瓦	II a-2	広端部～ 側部	18-3Tr C2灰色土	厚さ2.2 重さ0.54kg	色調：淡黃褐色 胎土：胎土 化した白色の大きな砂粒を含む 焼成：酸化炎気味でやや軟 質	凸面広端 部に布端 庄底、凸面 側面面取 り	凸面広端 部に布端 庄底、軒 上板接合 裏
	6	平瓦	I a-1	広端部～ 側部	18-2Tr J10灰色土	厚さ2.6 重さ0.84KG	色調：灰白色 胎土黑色の砂 粒を少量含む 焼成：還元炎 焼成良好	広端面ケズリ、 凹面側面面 取り	凸面広端 部に布端 庄底、軒 上板接合 裏
	7	平瓦	III b	側部	18-3Tr D2灰色土	厚さ2.0 重さ0.47kg	色調：淡褐色 胎土：砂粒を 含まない、赤い粒を少量含む 焼成：酸化炎気味だが良好	凹面側面面 取り	
	8	平瓦	不明	側部	18-3Tr 西拡張表土	厚さ2.5 重さ0.3kg	色調：灰色 胎土：白色の砂 粒をやや多く含む、黒色の粒が 見える 焼成：還元で良好	側面ケズリ、 軒平瓦か? 凹面ケズリ、 凹面ハケメ	
第 36 回	1	平瓦	I a	狭端側?	18-3Tr P 2	厚さ2.7 割削斗幅18.2 重さ2.3kg	色調：明灰色～暗青灰色 胎 土：黄白色の小砂粒を含む、 黒い粒が見える 焼成：還元 炎で良好	狭端面ケズリ、 側面内凹面 取り	割削斗、 凹面側面か らの一定 の打撃に による
	2	平瓦	I a	完形	18-2Tr T9表土	全長36.6 狭端部幅24.3 広端部幅25.3 弧度3.6 厚さ2.8 重さ5.24kg	色調：明黄褐色～明灰色 胎 土：白色の繊砂粒を少量含む、 黒い粒が見える 焼成：還元 炎で良好	凹面端面面 取り、凹面 側面面取 り	側面に粘 土板巻き が見える
	3	平瓦	II b-3	端部～側 部	18-3Tr C3灰色土	厚さ2.1 重さ0.2kg	色調：黄白色、断面桃色 胎 土：白色の小砂粒を少量含む 焼成：酸化炎燒成氣味	端面斜めケズ リ、側面斜 めケズリ	横骨痕、粘 土帯巻き が目立つ
	4	平瓦	II b	小片	17-1Tr 表土	厚さ3.2 重さ0.16kg	色調：凸面黒色、他は灰褐色 胎土：砂粒を含まない、粗雑 な胎土 焼成：還元炎でひび 割れが入る		軒平瓦か?
	5	平瓦	I a		18-4Tr	厚さ3.0 重さ1.68kg	色調：灰色、断面は桃色 胎 土：黄白色の小砂粒を少量含む 焼成：還元炎で良好	端面ケズリ、 凹面側面面 取り	隅切り、 焼成前に 切断し、隅 切り面ケ ズリ、凹面 側面にナデ
	6	平瓦	II a-3	広端部～ 側部	18-3Tr C5灰色土	厚さ2.7 重さ1.2kg	色調：淡褐色 胎土：砂粒を 含まない、黒い粒が見える 焼成：酸化炎気味だが良好	広端面ナデ、 側面ケズリ	広端部に 布端庄底
	7	平瓦	II a-3	広端部～ 側部	18-3Tr 拡張表土	厚さ2.8 重さ0.97kg	色調：暗褐色、断面灰色 胎 土：白色の小砂粒を含む 焼成：酸化炎気味	広端面ケズリ、 側面ケズリ	広端部に 布端庄底

8	平瓦	II b-1	広端部～側部	18-1Tr 表土	厚さ2.5 重さ0.41kg	色調：暗青灰色　胎土：白・黒色の微砂粒を多く含む　焼成：還元炎で硬質	広端山ヶズリ、側面ケズリ	凹面にハケメ、接背面を消す？
9	平瓦	III b	側部	18-3Tr B4 灰色土	厚さ2.9 重さ0.48kg	色調：淡青灰色　胎土：白色の砂粒を少し含む、黒色の粒が見える　焼成：還元炎でやや軟質	側面2段けずり 凹面にへり割れ有り	凹面による線刻あり
第 1 37 回	平瓦	II b-1	狭端部～窓部	18-2Tr J10灰色土	幅25.4 厚さ3.2 重さ3.12kg	色調：明黄白色　胎土：黄白色の砂粒をやや多く含む　焼成：還元炎でやや硬質	凹面狭端面取り、凹面側面取り	凹面中程のモザイク目立つ
12	平瓦	III c	側部	18-4Tr 灰色土	厚さ2.9 重さ0.56kg	色調：乳緑褐色　胎土：白色の砂粒を多く含む　焼成：酸化炎だが良好	側面斜めケズリ	凸面ナテ調でタタキを残さない
3	平瓦	I c	広端部～側部	18-4Tr	厚さ1.7 重さ0.16kg	色調：淡黄色　胎土：白・褐色の砂粒を含む　焼成：酸化炎だが良好	側面ケズリ、端面ケズリ	対斗瓦？
4	平瓦	III d	広端側	18-1Tr D6表土	広端部幅29.6 弧深4.3 厚さ2.6 重さ2.9kg	色調：桃色　胎土：1～2mmの白色の砂粒を含む、1mm前後の赤色の粒が多く見える　焼成：酸化炎で軟質	端面未調査、側面ケズリ	
5	平瓦	IVa-3	端部～側部	18-2Tr 110	厚さ1.9 重さ0.66kg	色調：明緑色　胎土：白・黄・褐色の砂粒を多く含む　焼成：酸化炎が良好	端面ナテ？側面斜めケズリ	端面に布が貼っていない
6	平瓦	IVa-1II	狭端側	17-1Tr No.274	狭端幅23.6 弧深4.5 厚さ2.3 重さ2.62kg	色調：暗褐色、前面明緑色　胎土：白色、透明の小砂粒を多く含む　焼成：酸化炎気味だりが良好	狭端面ケズリ、側面斜めケズリ	離れ砂、凹面に板状圧痕、凹面へケメ
7	平瓦	IVb-1	狭端部～側部	18-2Tr H10 III11灰色土	厚さ1.6 重さ0.37kg	色調：暗灰～黒灰色　胎土：1mm程度の白色の砂粒を多く含む　焼成：還元炎で良好	狭端面ケズリ、側面斜めケズリ	凹面に板状圧痕が目立つ
8	平瓦	IVa-5	広端部～左側部	18-1Tr B5表土	厚さ2.3 重さ0.78kg	色調：明青灰色　胎土：1m程度の白色の砂粒を含む　焼成：還元炎で硬質	広端山ヶズリ、側面ケズリ	凹面にハケメ、接背面を消す？布口をほとんど残さない。
第 1 38 回	平瓦	IVa-2H	両端部～側部	18-2Tr II10灰色土	全長34.9 厚さ1.9 重さ1.38kg	色調：黒褐色～棕褐色　胎土：透明な砂粒を含む、赤・黒色の粒が見える　焼成：酸化炎で軟質	端面ケズリ、側面ケズリ	対斗瓦？凹面へケメ
2	平瓦	IVb-1	狭端部～側部	18-3Tr B6灰色土	厚さ1.9 重さ0.42kg	色調：淡青灰色　胎土：白色の砂粒をやや多く含む　焼成：側面ケズリ、還元炎で良好	狭端山ヶズリ、側面ケズリ	凹面に板状圧痕
3	平瓦	IVc-1	狭端部～側部	17-1Tr No.105	厚さ1.9 重さ0.32kg	色調：明黄褐色　胎土：白色の砂粒を僅に含む　焼成：還元炎がやや軟質	広端面ケズリ、凹面側面面取り側	断面では繋ぎ目があるように見える、ヘラによる線刻あり
4	平瓦	IVa-1II	狭端部～側部	18-2Tr 110灰色土	厚さ2.5 重さ1.17	色調：乳褐色　胎土：1mm程度の砂粒を含む、希に白色の大きな砂粒有り、赤い粒が見える　焼成：酸化炎が良くなり	凹面狭端面取り、凹面側面面取り	凹面へケメ
5	平瓦	IVa-1	狭端部	18-2Tr 110	弧深3.3 厚さ2.0 重さ1.4kg	色調：淡灰色　胎土：白色の砂粒をやや多く含む　焼成：還元炎がやや軟質	狭端面ケズリ、凹面側面面取り側	凸面側部に離れ砂
6	平瓦	IVa-1	狭端部～側部	18-3Tr D4灰色土	厚さ1.4～2.1 重さ0.42kg	色調：灰白色　胎土：黄白色の砂粒をやや多く含む　焼成：還元炎がやや軟質	凹面端面面取り、凹面側面面取り	凹面に離れ砂多量に付着
7	平瓦	IVb-1	狭端側	18-3Tr C4灰色土	弧深26.5 厚さ2.2 重さ2.1kg	色調：乳白色　胎土：白色の砂粒をやや多く含む、赤色の粒が見える　焼成：酸化炎気味でやや軟質	凹面側面面取り	

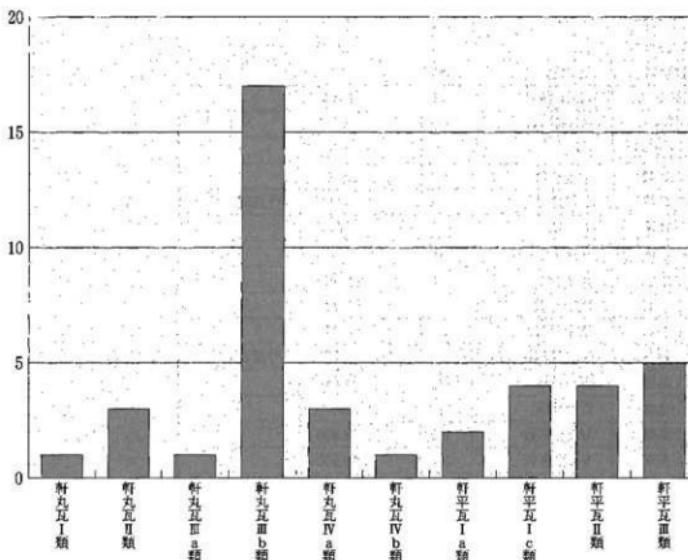
	8	平瓦	Via	端部～側部	17-3Tr 南拡張部	厚さ2.5 重さ0.28kg	色調：暗黄灰色 胎土：白・黒色の小砂粒を含む 還元炎で良好	端面ケズリ、横骨痕は凹面側面面取り、凹面ハケメ、凹面ナデ	横骨痕は不明
	9	平瓦	VMe	側部	18-1Tr 北拡張黄色 粘質土	厚さ2.5 重さ0.34kg	色調：黄灰～青灰色 胎土：白色の大きな砂粒を含む 焼成：酸化炎	端面ケズリ、凹面ナデ、凹面ハケメ	横骨痕無し
	10	平瓦	Via-H	端部～側部	17-2Tr No.26	厚さ2.8 重さ0.71kg	色調：淡褐色 胎土：白色の砂粒を多く含む 焼成：酸化炎	凹面側面面取り、凹面側面面取り、離れ砂使用	端面の面取りが非常に深い、凹面ハケメ
	11	平瓦	VC-C-1	端部～側部	18-1Tr B2表土 C3黄色粘質土	厚さ1.2 重さ0.24kg	色調：淡褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：還元炎だからやや軟質	端面ケズリ、端面側面面取り	離れ砂使用
	12	平瓦	VBb	端部～側部	18-4Tr 灰色土	厚さ1.5 重さ0.14kg	色調：黒色～褐色 胎土：赤・白色の微砂粒を多く含む 焼成：酸化炎が良好	端面ケズリ、側面ナデ？	湾曲が見られない、熨斗丸か？
第39回	1	平瓦	IVb-2II	側部	18-2Tr J10	厚さ1.5 重さ1.06kg	色調：赤褐色、断面淡褐色 胎土：白色の微砂粒を多く含む 焼成：酸化炎焼成だから優質	凹面側面面取り	焼付着、側部に布端仕上げ、凹面は離れ砂か？ 凹面ハケメ
	2	平瓦	IVb-1	端部～側部	18-2Tr H10灰色土	厚さ1.6～2.5 重さ0.81kg	色調：黒色、断面橙褐色 胎土：白色の少砂粒を少量含む、赤・黒色の粒が見える 焼成：酸化炎が良好	端面ケズリ、凹面側面面取り	凸面側部にタタキが残っていない
	3	平瓦	IVb-1H	鉄端部～側部	18-3Tr B6灰色土	厚さ2.2 重さ0.9kg	色調：暗褐色～明褐色 胎土：白・灰・赤色の砂粒を含む 焼成：酸化炎だから良好	端面ナデ、側面ナデ？	凹面に板状丘陵、凹面ハケメ
	4	平瓦	IVC-1	鉄端部～側部	18-1Tr B4表土	厚さ1.9 重さ1.06kg	色調：暗褐褐色 胎土：白色の砂粒を含む、2cmの石が入っている 焼成：還元炎で良好	狭端面ナデ、側面ナデ	凹面に板状丘陵
	5	平瓦	Va-2H	側部	18-2Tr J10	厚さ1.5 重さ0.67kg	色調：暗黃白色 胎土：1～3mmの砂粒を含む、透明な微砂粒が自立する 焼成：酸化炎が良好	側面ケズリ、面取り材に見える部分は未調整	凹面ハケメ
	6	平瓦	Va-4	端部～側部	18-2Tr J10	厚さ1.9 重さ0.79kg	色調：橙褐色 胎土：白色の少砂粒を多く含む、赤・黒色の砂粒が見える 焼成：酸化炎だから良好	端面ケズリ、凹面に板状丘陵側面面取り	端面ケズリ、凹面に板状丘陵側面面取り
	7	平瓦	Va	鉄端部～側部	18-2Tr H12灰色土	厚さ1.9 重さ1.02kg	色調：淡灰～淡褐色 胎土：白・黒色の少砂粒を多く含む 焼成：還元炎で良好	凹面側面面取り、凹面側面面取り	タタキ原体は4.6cm前後の幅
	8	平瓦	VBb	鉄端部～不明	側部	厚さ1.5 重さ0.46kg	色調：黒褐色、断面は褐色 胎土：明灰白色の砂粒を含む 焼成：酸化炎	狭端面ケズリ、凹面側面面取り	表面変化、二次焼成か？ 凹面に板状丘陵多数
	9	平瓦	Via-H	端部～側部	18-1Tr C3黄色粘質土	厚さ2.1 重さ0.26kg	色調：淡褐色 胎土：黒色の砂粒を含む、赤色の粒が見える 焼成：酸化炎が良好	端面ケズリ、凹面側面面取り	凹面ハケメ、凹面タタキ横方向が日立つ
第40回	1	平瓦	IVb-2II		18-1Tr D6表土	長さ32.1 広端部幅21.0 厚さ1.4 弧深3.5 重さ1.52	色調：明黄褐色 胎土：1～3mmの白・赤色の砂粒を多く含む 焼成：酸化炎で軟質	凹面端面面取り、凹面側面面取り	凹面ハケメ
	2	平瓦	IXa		18-2Tr J10	厚さ2.7 重さ1.28kg	色調：明淡褐色 胎土：白色の砂粒を含む、赤い粒を含む 焼成：酸化炎気味だから良好	凹面狭端面面取り、凹面側面面取り	隅切りか？ 凹面側部に糸切り、離れ砂
	3	平瓦	IXa	小片	17-3Tr No.247	厚さ2.3 重さ0.26kg	色調：黄褐色 胎土：白色の少砂粒を少量含む 焼成：酸化炎気味	離れ砂	

4	平瓦	Xa	小片	17-3Tr SD01	厚さ2.4 重さ0.28kg	色調：黒灰色、断面は明桃色 胎土：白色の砂粒を少々含む 焼成：酸化炎気味で軟質	摩滅
5	平瓦	Xia	広端部～側部	18-2Tr I10灰色土	厚さ1.4 重さ0.5kg	色調：黑色～暗灰色 胎土：白色の砂粒を含む、断面マーブル状 焼成：還元炎で良好	塊状圧延。 タキガ当たっていない部分が多い
6	平瓦	須恵器造り	側部	17-3Tr No.201	厚さ1.8 重さ0.2kg	色調：黒色～暗灰色 胎土：白色の砂粒を含む、断面マーブル状 焼成：還元炎で良好	横着状の 縦筋をナ ド消す
7	平瓦	須恵器造り	端部～側部	17-3Tr No.130	厚さ2.0 重さ0.79kg	色調：淡灰色 胎土：黃白色の砂粒を含む 焼成：還元炎 焼成	端面ケズリ、 側面ケズリ 平行タタキナハケメ。四面ナデ
8	平瓦	須恵器造り	端部～側部	18-2Tr J10 H9	厚さ1.8 重さ0.49kg	色調：淡灰色 胎土：黃白色の砂粒を含む 焼成：還元炎 焼成	端面ケズリ、 側面ケズリ 凸面側部に 沈線
9	平瓦	須恵器造り	端部～側部	17-3Tr No.203	厚さ1.9 重さ0.42kg	色調：青灰色 胎土：黃白色の砂粒を含む 焼成：還元炎 側面ケズリ、 側面ケズリ、 側面ナデ	凸面ハケ メ。凹面ナデ
10	平瓦	須恵器造り	端部～側部	18-1Tr E6表土	厚さ2.7 重さ0.32kg	色調：灰色 胎土：白・黒色の小砂粒を含む 焼成：還元炎 焼成	端面ケズリ、 側面ケズリ 平行タタキナハケメ。凹面ナデ
11	平瓦	凸面布目	側部	18-2Tr 表土	厚さ2.0 重さ0.07kg	色調：暗青灰色 胎土：1mm程度の白色の小砂粒を含む 焼成：還元炎 焼成	側面ナデ、 凹面に布目が見える
12	平瓦	凸面布目	端部	18-4Tr 表土	厚さ1.8 重さ0.12kg	色調：暗青灰色、断面は暗褐色 胎土：黄白色の小砂粒をやや多く含む 焼成：還元炎 焼成	端面ケズリ 凹面ハケ メ状
1	面瓦	IVb-4		18-2Tr H10灰色土	幅23.8 厚さ1.9 重さ1.24kg	色調：淡褐色 胎土：白色の砂粒を多く含む 焼成：酸化炎が良好	端面戸、 凹面に板 状圧延
2	熨斗瓦 か博	IVa-2H	端部～側部	18-1Tr C6表土	厚さ1.4 重さ0.11kg	色調：暗褐色 胎土：透明な小砂粒を多く含む、黒、赤色の粒が見える 焼成：酸化炎が良好	端面ケズリ、 側面曲げ 曲がは んど無い、 凹面ハケ メ
3	熨斗瓦 か博			18-1Tr A2黄色粘質土	幅11.4 厚さ1.9 重さ0.46kg	色調：黄白色 胎土：白色・透明な砂粒を含む 焼成：還元炎焼成	端面に幅1 cmの切り 欠きあり、 余切り痕を 多く残し、 タキナハケ メは見えない
4	熨斗瓦 か博			17-1Tr 赤褐色土	幅7.7 厚さ1.8 重さ0.14kg	色調：橙色 胎土：白・赤色の小砂粒を多く含む 焼成：酸化炎で軟質	側面ケズリ、 側面の片面は 半端にありますか？
5	埠			17-3Tr No.921	厚さ2.6 重さ0.11kg	色調：明褐色、断面は楕～白 胎土：白色の小砂粒を含む、赤、黒が多く見える 焼成：酸化炎でやや軟質	側面ナデ 平 面の片面に斜 め平行タタキ？
6	埠			18-2Tr 拡張表土	厚さ1.8 重さ0.11kg	色調：淡褐色 胎土：白色・透明な砂粒を多く含む 焼成：酸化炎	側面ケズリ、 側面曲げ、 余切り痕を残 す
7	熨斗瓦 か博			17-1Tr No.90	厚さ1.7 重さ0.71kg	色調：橙色 胎土：白・赤色の小砂粒を少々含む 焼成：側面の側縫をナデ	側面ケズリ、 側面ナデ
8	鬼瓦			17-5Tr No.12	厚さ3.2 重さ0.4kg	色調：橙褐色、表面は風化により白色 胎土：白色の砂粒を多く含む 焼成：還元炎氣味	側面の一部に 布目？裏 面にハ メる線 刻？
9	鶴尾		脊縫	17-6Tr No.12	厚さ2.8	色調：淡灰色 胎土：白色の小砂粒を含む 焼成：還元炎で硬質	外側を接 して調整 が異なる
10	鶴尾		輪状文様 部	18-2Tr E1表土	厚さ3.6 重さ0.06kg	色調：灰色 胎土：黄白色の小砂粒を含む 焼成：還元炎で硬質	外側ハケメ、 内面同心円文

第3表 第2基壇 軒丸瓦・軒平瓦（軒丸瓦V類・軒平瓦IV類を除く）



第4表 第3基壇 軒丸瓦・軒平瓦（軒丸瓦V類・軒平瓦IV類を除く）



第5表 平成17・18年度出土丸瓦

基壇・トレンチ	種類	個数	重さ (kg)	備考
1 7 - 8 T	VI須恵質G	1	0.160	行基式
1 7 - 8 T	VI須恵質	3	0.250	
1 7 - 8 T	VI土師質	8	0.760	
1 7 - 8 T	VI上師質G	1	0.310	行基式
1 7 - 8 T	VIS	1	0.050	離れ砂
1 7 - 8 T	VIIa須恵質	5	0.280	
1 7 - 8 T	VIIa土師質	12	0.590	
1 7 - 8 T	VIIb須恵質	3	0.360	
参道推定地	I 須恵質	4	0.660	
参道推定地	I 上師質	1	0.190	
参道推定地	II 須恵質	1	0.030	
参道推定地	II 上師質	3	0.470	
参道推定地	III 須恵質	4	0.430	
参道推定地	III 土師質	2	0.270	
参道推定地	IV 須恵質	2	0.130	
参道推定地	IV 土師質	2	0.190	
参道推定地	V 須恵質G	3	0.800	行基式
参道推定地	Va須恵質T	1	0.140	玉緑式
参道推定地	Va須恵質	16	1.270	
参道推定地	Va土師質	9	1.990	
参道推定地	Vb須恵質	3	0.900	
参道推定地	VI 須恵質	23	3.090	
参道推定地	VI 上師質	47	4.440	
参道推定地	VI 土師質 G	1	0.220	行基式
参道推定地	VI 土師質	1	0.580	
参道推定地	VIS	1	0.050	離れ砂
参道推定地	VIIa須恵質	24	0.990	
参道推定地	VIIa土師質	27	2.060	
参道推定地	VIIb須恵質	2	0.150	
参道推定地	不明	2	0.050	
第1基壇	I 須恵質	3	0.510	
第1基壇	I 須恵質G	2	1.560	行基式
第1基壇	I 土師質	1	0.090	
第1基壇	II 須恵質	10	1.570	
第1基壇	II 土師質	2	0.400	
第1基壇	III 須恵質	4	1.240	
第1基壇	III 上師質	8	1.810	
第1基壇	IV 須恵質G	2	1.220	行基式
第1基壇	IV 須恵質	15	1.510	
第1基壇	IV 上師質	20	2.670	
第1基壇	Va上師質	199	29.430	
第1基壇	Va須恵質	103	15.640	
第1基壇	Va須恵質G	15	4.560	行基式
第1基壇	Va須恵質T	4	1.010	玉緑式
第1基壇	Va土師質 G	15	5.650	行基式

第1基壇	Vb土師質	7	1.010	
第1基壇	Vb須恵質	4	0.430	
第1基壇	VI須恵質	303	36.420	
第1基壇	VI須恵質 G	13	3.380	行基式
第1基壇	VI須恵質 T	1	0.120	玉縁式
第1基壇	VI土師質	595	72.640	
第1基壇	VI土師質 T	3	0.560	玉縁式
第1基壇	VI土師質 G	54	10.460	行基式
第1基壇	VIS	2	0.470	離れ砂
第1基壇	VIIa須恵質	199	19.420	
第1基壇	VIIa土師質	339	25.140	
第1基壇	VIIb須恵質	26	2.750	
第1基壇	VIIb土師質	11	1.190	
第1基壇	須恵器造り	2	0.200	
第1基壇	不明	2	0.300	
第1基壇	玉縁	5	0.130	
第1基壇	不明	9	0.480	
第2基壇	Va須恵質	1	0.040	
第2基壇	VI須恵質	4	0.220	
第2基壇	VII b須恵質	1	0.031	
第2基壇	玉縁	1	0.040	
第3基壇	I 須恵質	29	7.970	
第3基壇	I 土師質	15	2.020	
第3基壇	I 土師質 G	1	0.180	行基式
第3基壇	I 須恵質 G	1	0.480	行基式
第3基壇	II 須恵質	26	7.900	
第3基壇	II 土師質	10	3.630	
第3基壇	III 須恵質	7	1.410	
第3基壇	III 土師質	36	8.180	
第3基壇	IV 須恵質	6	0.700	
第3基壇	IV 須恵質 G	1	0.080	行基式
第3基壇	IV 土師質	16	1.340	
第3基壇	IV 土師質 G	1	0.780	行基式
第3基壇	Va土師質 G	7	2.400	行基式
第3基壇	Va須恵質 T	49	5.840	玉縁式
第3基壇	Va須恵質 G	3	1.760	行基式
第3基壇	Va須恵質	33	5.870	
第3基壇	Va土師質	62	10.550	
第3基壇	Vb土師質	2	0.280	
第3基壇	Vb須恵質	12	1.910	
第3基壇	VI須恵質	197	32.990	
第3基壇	VI須恵質 G	11	3.880	行基式
第3基壇	VI土師質	420	57.010	
第3基壇	VI土師質 G	17	6.280	行基式
第3基壇	VI須恵質 T	3	0.440	玉縁式
第3基壇	VIS	6	0.770	離れ砂

第3基壇	VIIa須恵質	154	13.660
第3基壇	VIIa上師質	228	13.920
第3基壇	VIIb須恵質	25	4.300
第3基壇	VIIb上師質	4	0.330
第3基壇	不明	29	1.920
第3基壇	玉縁	10	2.600
第4基壇	I 須恵質	1	0.140
第4基壇	II 須恵質	1	0.040
第4基壇	III 須恵質	1	0.030
第4基壇	III 七師質	1	0.180
第4基壇	VI 須恵質	8	0.820
第4基壇	VI 七師質	7	0.400
第4基壇	VIIa七師質	4	0.240
第4基壇	不明	9	0.230
表採	I 須恵質	1	0.100
表採	IV 須恵質	1	0.220
表採	VI 上師質	2	0.230
表採	VIIa須恵質	2	0.070
	不明		77.700
合計		3657	547.941

第6表 平成17・18年度出土平瓦

基壇・トレンチ	種類	個数	重さ (kg)	備考
17-8T	I 須恵質	3	0.570	
17-8T	I 土師質	1	0.080	
17-8T	IIa須恵質	3	0.210	
17-8T	IVa上師質S	2	0.500	離れ砂
17-8T	IVa須恵質	3	0.150	
17-8T	IVa土師質	1	0.070	
17-8T	IV b 須恵質	2	0.080	
17-8T	IV b 土師質	1	0.060	
17-8T	V 須恵質	1	0.090	
17-8T	VI 須恵質S	1	0.030	離れ砂
17-8T	VI 土師質	2	0.100	
17-8T	VII 須恵質 : ケズリ主体	3	0.130	
17-8T	VII 上師質 : ケズリ主体	1	0.230	
17-8T	VII 土師質 : ナデ主体	5	0.250	
17-8T	IX 土師質	2	0.260	斜め平行タタキ
17-8T	X 須恵質	1	0.300	菱形のタタキ
17-8T	不明	302	7.910	
参道推定地	I 須恵質	11	2.160	
参道推定地	I 土師質	11	1.700	
参道推定地	IIa須恵質	1	0.420	
参道推定地	II b 須恵質	3	0.450	
参道推定地	II b 土師質	1	0.710	
参道推定地	III 須恵質	14	2.540	

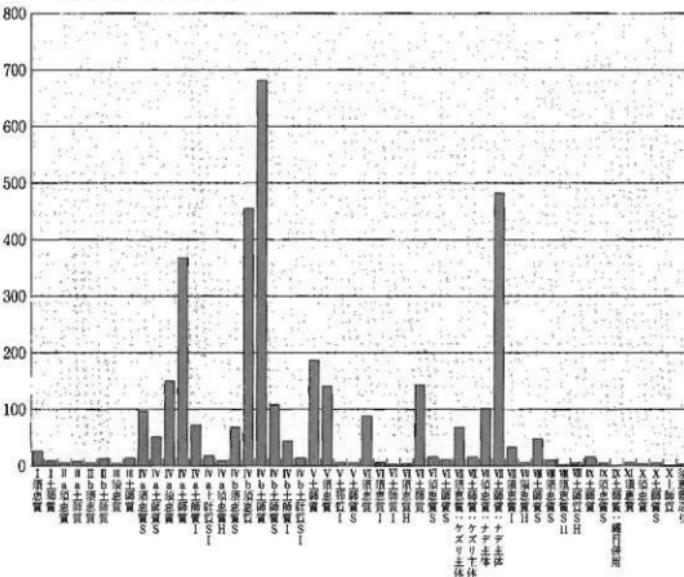
参道推定地	III 土師質	1	0.140	
参道推定地	IVa 須恵質 S	1	0.670	離れ砂
参道推定地	IV a 土師質 S	7	3.010	離れ砂
参道推定地	IVa 須恵質	1	0.110	
参道推定地	IVa 土師質	7	1.070	
参道推定地	IV b 須恵質	11	0.870	
参道推定地	IV b 土師質	7	0.340	
参道推定地	IV b 須恵質 S	4	0.830	離れ砂
参道推定地	IV b 土師質 S I	4	1.180	離れ砂、板状圧痕
参道推定地	V 須恵質	2	0.860	
参道推定地	V 土師質	2	0.090	
参道推定地	VI 須恵質	4	0.430	
参道推定地	VII 須恵質 : ケズリ主体	6	0.320	
参道推定地	VII 土師質 : ケズリ主体	1	0.710	
参道推定地	VII 須恵質 : ナデ主体	7	1.010	
参道推定地	VII 土師質 : ナデ主体	7	1.040	
参道推定地	VIII 須恵質 S	3	1.780	離れ砂
参道推定地	VIIIa 土師質 S	6	0.680	離れ砂
参道推定地	IX 土師質	2	0.430	斜め平行タタキ
参道推定地	IX 須恵質 S	2	1.440	斜め平行タタキ、離れ砂
参道推定地	XI 須恵質	1	0.170	大きな格子叩き
参道推定地	X 土師質	1	0.150	
参道推定地	須恵器造り	2	0.220	
参道推定地	不明	141	28.210	
第1基壇	I 須恵質	26	14.720	
第1基壇	I 土師質	9	1.680	
第1基壇	IIa 須恵質	5	1.450	
第1基壇	IIa 土師質	8	1.470	
第1基壇	IIb 須恵質	5	4.130	
第1基壇	II b 土師質	13	3.380	
第1基壇	III 須恵質	4	0.960	
第1基壇	III 土師質	14	3.140	
第1基壇	IVa 須恵質 S	97	20.060	離れ砂
第1基壇	IVa 土師質 S	51	12.850	離れ砂
第1基壇	IVa 須恵質	150	26.610	
第1基壇	IVa 土師質	368	70.730	
第1基壇	IVa 土師質 I	72	18.470	板状圧痕
第1基壇	IVa 土師質 S I	18	3.910	離れ砂、板状圧痕
第1基壇	IVa 須恵質 H	9	2.590	凹面ハケメ
第1基壇	IV b 須恵質 S	68	10.550	離れ砂
第1基壇	IVb 須恵質	455	58.780	
第1基壇	IVb 土師質	681	79.380	
第1基壇	IVb 土師質 S	108	17.080	離れ砂
第1基壇	IVb 土師質 I	44	9.330	板状圧痕
第1基壇	IVb 土師質 S I	14	2.020	離れ砂、板状圧痕
第1基壇	V 土師質	186	23.500	

第1基壇	V須恵質	141	20.250	
第1基壇	V土師質 I	6	1.100	板状圧痕
第1基壇	V上師質 S	5	0.980	離れ砂
第1基壇	VI須恵質	88	14.890	
第1基壇	VI須恵質 I	6	1.290	板状圧痕
第1基壇	VI七師質 I	3	0.440	板状圧痕
第1基壇	VI須恵質 H	4	0.420	凹面ハケメ
第1基壇	VI上師質	143	18.970	
第1基壇	VI須恵質 S	16	3.220	離れ砂
第1基壇	VI土師質 S	11	3.250	離れ砂
第1基壇	VII須恵質	68	7.300	ケズリ主体
第1基壇	VII七師質	16	3.510	ケズリ主体
第1基壇	VII須恵質	101	8.050	ケズリ主体
第1基壇	VII七師質	482	47.790	ケズリ主体
第1基壇	VII須恵質 I	33	4.620	板状圧痕
第1基壇	VII須恵質 H	6	1.740	凹面ハケメ
第1基壇	VIII七師質 S	48	6.230	離れ砂
第1基壇	VIII須恵質 S	10	0.940	離れ砂
第1基壇	VIII須恵質 S H	2	0.220	離れ砂、凹面ハケメ
第1基壇	VIII土師質 S H	5	1.970	離れ砂、凹面ハケメ
第1基壇	IX上師質	16	7.510	斜め平行タタキ
第1基壇	IX須恵質 S	5	0.840	離れ砂
第1基壇	IX土師質	1	0.120	縦目併用
第1基壇	X I 須恵質	6	0.830	小さな格子
第1基壇	X 須恵質	4	0.860	
第1基壇	X 土師質 S	5	0.880	離れ砂
第1基壇	X 七師質	1	0.780	
第1基壇	須恵器造り	3	1.090	
第1基壇	不明	641	65.220	
第1基壇	両面布目?	1	0.070	
第2基壇	II b 土師質	1	0.110	
第2基壇	IV b 須恵質	2	0.112	
第2基壇	VII b 土師質	1	0.079	
第2基壇	X a	1	0.100	菱形のタタキ
第2基壇	不明	18	0.469	
第3基壇	I 須恵質	33	12.480	
第3基壇	I 土師質	7	1.900	
第3基壇	I 薄いもの	13	2.940	
第3基壇	II a 須恵質	12	4.690	
第3基壇	II a 上師質	29	6.940	
第3基壇	II b 須恵質	14	5.870	
第3基壇	II b 七師質	45	11.110	
第3基壇	III 須恵質	30	7.630	
第3基壇	III 土師質	81	15.960	
第3基壇	IV a 須恵質 S	24	4.970	離れ砂
第3基壇	IV a 上師質 S	31	1.560	離れ砂

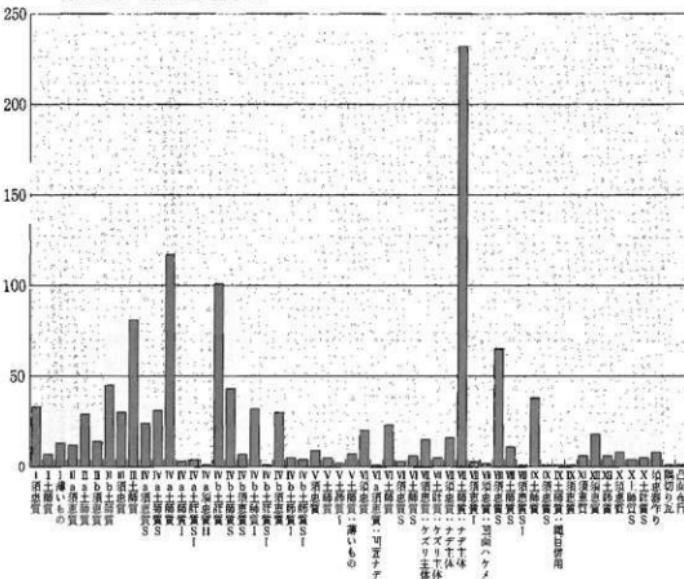
第3基壇	IVa土師質	117	16,380	
第3基壇	IVa土師質I	3	0.890	板状圧痕
第3基壇	IVa土師質S I	4	1.290	離れ砂、板状圧痕
第3基壇	IVa須恵質H	1	0.320	凹面ハケメ
第3基壇	IV b 土師質	101	12,360	
第3基壇	IV b 土師質S	43	5.420	離れ砂
第3基壇	IV b 須恵質 S	7	1.360	離れ砂
第3基壇	IV b 土師質 I	32	2.810	板状圧痕
第3基壇	IV b 土師質 S I	1	0.060	離れ砂、板状圧痕
第3基壇	IVb須恵質	30	3.690	
第3基壇	IVb土師質 I	5	0.960	板状圧痕
第3基壇	IVb土師質 S I	4	0.410	離れ砂、板状圧痕
第3基壇	V須恵質	9	1.430	
第3基壇	V土師質	5	0.900	
第3基壇	V土師質 I	2	0.380	板状圧痕
第3基壇	V土師質	7	0.550	薄いもの
第3基壇	VI須恵質	20	4.210	
第3基壇	VIa須恵質	1	0.220	凹面ナデ
第3基壇	VI上師質	23	3.200	
第3基壇	VI須恵質 S	3	0.420	
第3基壇	VI土師質 S	6	0.820	
第3基壇	VII須恵質	15	2.700	ケズリヰ体
第3基壇	VII土師質	5	1.100	ケズリヰ体
第3基壇	VII須恵質	16	2.610	ナヂ主体
第3基壇	VII土師質	232	25.600	ナヂ主体
第3基壇	VIII須恵質 I	3	0.380	板状圧痕
第3基壇	VIII須恵質	2	0.280	凹面ハケメ
第3基壇	VIII須恵質 S	65	10.800	離れ砂多
第3基壇	VIII土師質 S	11	1.130	離れ砂多
第3基壇	VIII須恵質 S I	1	0.220	離れ砂、板状圧痕
第3基壇	IX上師質	38	13.830	斜め平行タタキ
第3基壇	IX須恵質 S	1	0.360	離れ砂
第3基壇	IX土師質	1	0.200	繩目併用
第3基壇	IX須恵質	1	0.230	
第3基壇	XI須恵質	6	1.040	小さな格子タタキ
第3基壇	XII須恵質	18	2.890	大きな格子叩き
第3基壇	XII上師質	6	2.100	
第3基壇	X須恵質	8	2.360	菱形のタタキ
第3基壇	X土師質 S	4	1.340	離れ砂
第3基壇	X土師質 S	5	1.320	離れ砂
第3基壇	須恵器造り	8	2.300	
第3基壇	隅切り瓦	1	1.680	
第3基壇	凸面布目	1	0.120	
第3基壇	不明	262	34.640	
第4基壇	I須恵質	2	0.500	
第4基壇	IIa須恵質	2	0.230	

第4基壇	III須恵質	3	0.300	
第4基壇	IVa土師質S	1	0.200	離れ砂
第4基壇	IVa須恵質	1	0.080	
第4基壇	IV b 須恵質	4	0.370	
第4基壇	IV b 上師質	3	0.250	
第4基壇	VI須恵質	1	0.080	
第4基壇	VI土師質	1	0.140	
第4基壇	VII須恵質 I	1	0.130	板状圧痕
第4基壇	VII土師質 S	1	0.250	離れ砂多
第4基壇	X須恵質	1	0.230	菱形のタキ
第4基壇	須恵器造り	2	0.460	
第4基壇	不明	156	7.730	
表採その他	I 土師質	1	0.260	
表採その他	III土師質	1	0.150	
表採その他	IVa須恵質 S	1	0.170	離れ砂
表採その他	V須恵質	1	0.120	
表採その他	不明	10	1.240	
表採その他	VII須恵質	1	0.460	ナデ主体
表採その他	不明		22.420	
	不明		189.860	
合計		6557	1146.790	

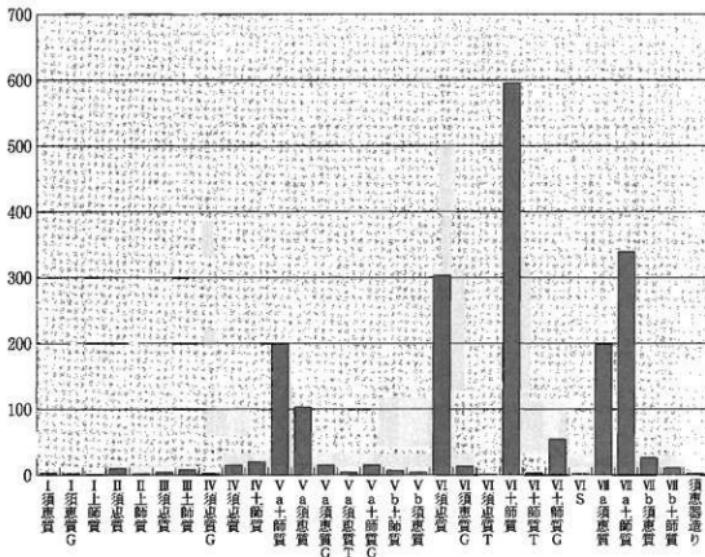
第7表 第1基壇平瓦



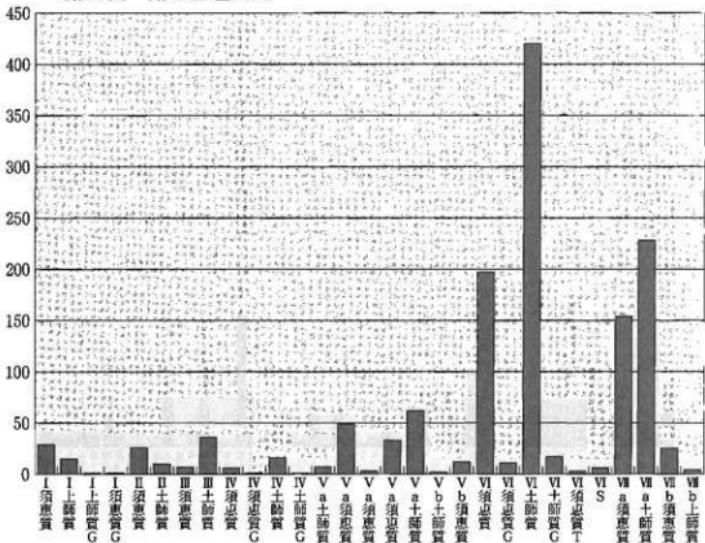
第8表 第3基壇平瓦



第9表 第1基壇丸瓦



第10表 第3基壇丸瓦



第11表 基壇・建物の規模

基壇・建物	想定される機能	主軸方向	柱間		基壇規模		基壇の山(側柱～基壇線)	
			東西	南北	東西	南北	東西	南北
第1基壇	西塔?	N-9.0°-E	3間	3間				
			6.5+8+6.5尺 1.95+2.4+1.95m	6.5+8+6.5尺 1.95+2.4+1.95m	35尺 10.5m	35尺 10.5m	7尺 2.1m	7尺 2.1m
第2基壇	金堂	N-7.3°-E	5間	4間				
			6+6+7.5+6+6尺 1.8+1.8+2.25+1.8+1.8m	6+6+6+6尺 1.8+1.8+1.8+1.8m	43尺 12.9m	36尺 10.8m	5.5尺 1.65m	6尺 1.8m
第3基壇	(東)塔	N-6.5°-E	3間	3間				
			7+7+7尺 2.1+2.1+2.1m	7+7+7尺 2.1+2.1+2.1m	35尺 10.5m	35尺 10.5m	7尺 2.1m	7尺 2.1m
第4基壇	講堂?	N-4.0°-E	4間?	3間以上				
			9+10+10+?尺 2.7+3+3+?m	10+10+?尺 3+3+?m	不明	不明	7尺 2.1m	7尺 2.1m
掘立柱建物	宝蔵・經蔵?	N-10.0°-E	3間	2間以上				
			4+4+4尺 1.2+1.2+1.2m	6+6+?尺 1.8+1.8+?m	不明	不明	不明 6尺? 1.8m?	

第12表 石製相輪出土遺跡

遺跡名	所在地	部位	備考
茨城魔寺	茨城県石岡市	花崗岩製露盤	墓書土器「茨城寺」
山尾椎現山流寺	茨城県真壁町	花崗岩製露盤	
筑波庵寺	茨城県筑波町	花崗岩製露盤	
下山山廃寺	茨城県江戸崎町	花崗岩製露盤	
上総大寺魔寺	千葉県木更津市	凝灰質砂岩製露盤	
甲斐国分寺跡	山梨県- 寺町	石製露盤	前身寺院あり
花摘寺魔寺	滋賀県草津市	花崗岩製露盤	
柏坂寺跡	滋賀県栗東町	石製露盤	山岳寺院か
満願寺魔寺	滋賀県びわ町	石製端盤	
山村魔寺(ドドコロ魔寺)	奈良市	凝灰岩製平頭・擦管・宝輪	法隆寺に移転した凝灰岩製露盤が知られる
奥山魔寺(奥山久米寺)	奈良県明日香村	石製露盤	台石に転用
定林寺跡	奈良県明日香村	凝灰岩製露盤	
尼寺魔寺(北魔寺)	奈良県香芝市	石製端盤	台石に転用
三栖魔寺	和歌山県田辺市	凝灰岩製天蓋・砂岩製宝輪	
河合魔寺	兵庫県小野市	石製平頭	
中西魔寺	兵庫県加古川市	流紋岩質凝灰岩製露盤・擦管・請花	
多田魔寺	兵庫県姫路市	凝灰岩製宝輪	
中井魔寺	兵庫県龍野市	凝灰岩製露盤	
山代郷北新造院跡	松江市	伏鉢・擦管・九輪・天蓋	銅製風鐘・請花あり
木郷平魔寺	広島県御調町	石製露盤	
来住魔寺	愛媛県松山市	石製露盤	

原田健次郎「古代の石造相輪についての一考察」『文化財学論集』1991年を参考にした。





平成18年度調査前近景 第3基壇から西を見る



平成18年度調査前近景 第2基壇から東を見る

図版 2



擾体塚付近調査前近景（東から）



17-1Tr 西壁



17-1Tr 完堀状況（南から）



17-1Tr SK01検出状況（北から）

図版4



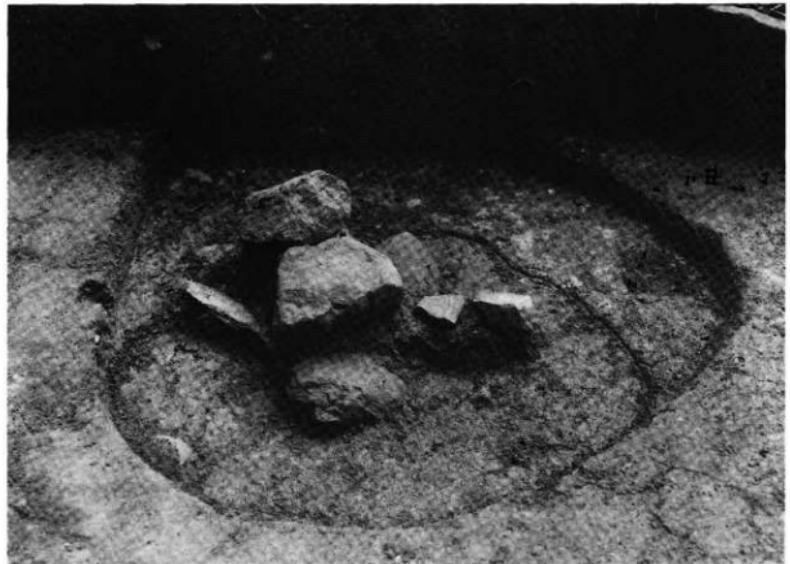
SK01 石材取り上げ後の状況（西から）



18-1Tr 完堀状況（北西から）



18-1Tr 北拡張部（南から）

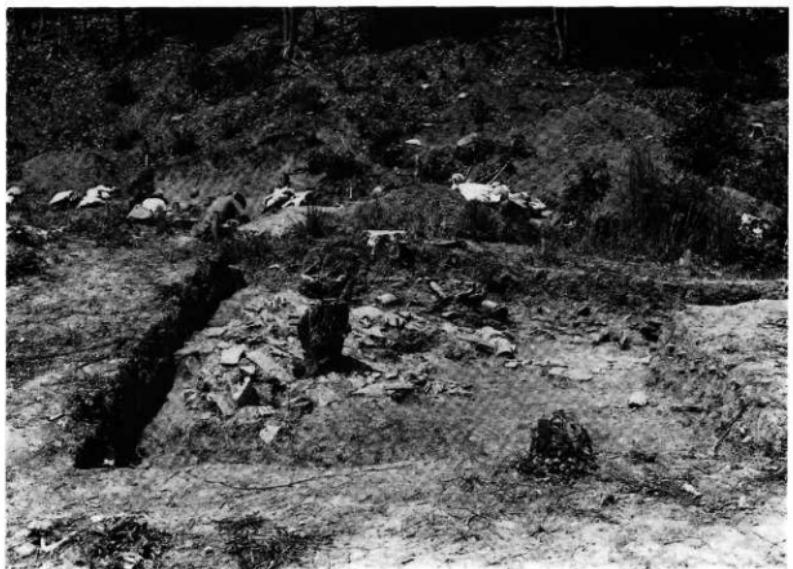


18-1Tr 北東四天柱（？）礎石根石（西から）

図版 6

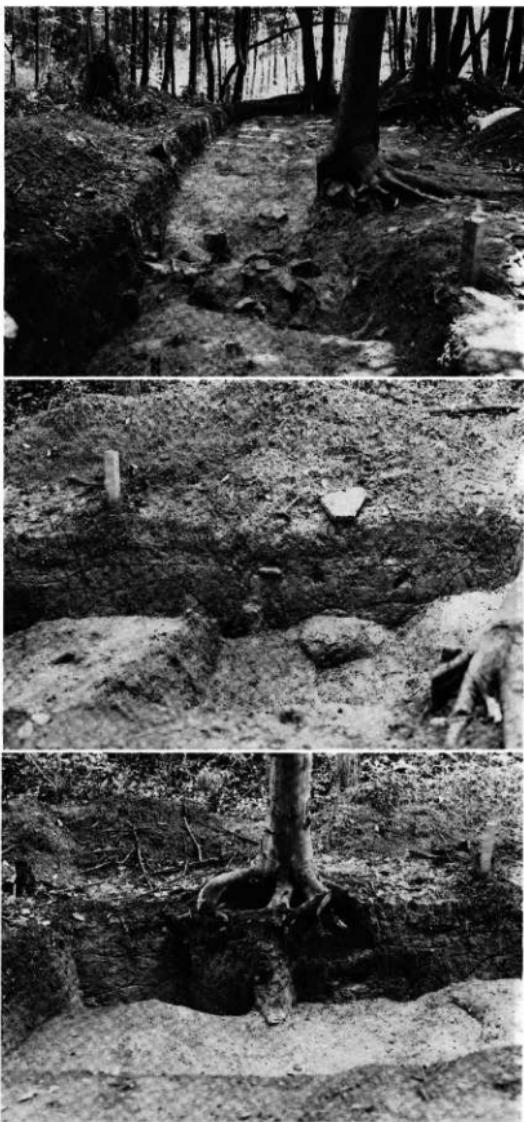


18-2Tr (東から)



18-2Tr (南から)

図版 7



17-1Tr SD01付近

SD01(南から)

SD02(南から)

図版 8



17-1Tr SK04(北から)



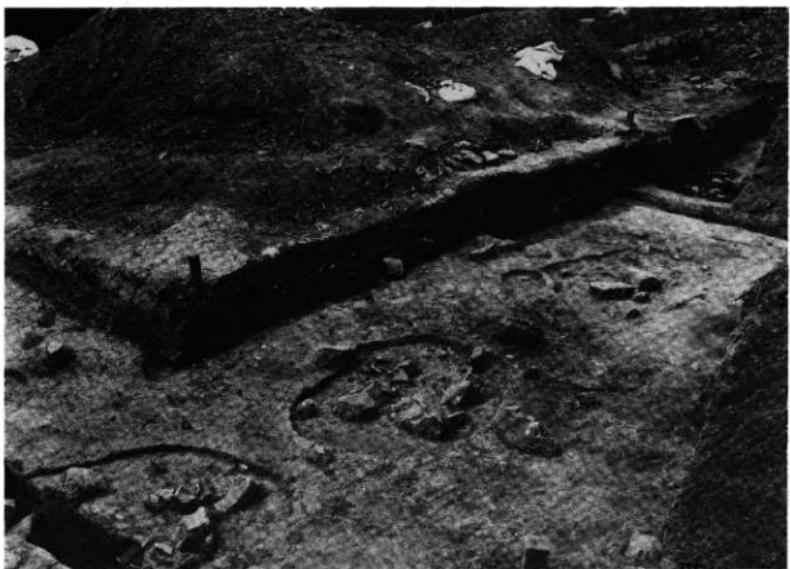
SK06・SD01(北から)



17-1Tr 完掘状況(東から)



18-3Tr 捩体壕土層堆積状況（南東から）



18-3Tr 近景（北東から）

図版10



18-4Tr 遺物出土状況（北から）



18-3Tr 南半部完掘状況（北から）



18-3Tr 2・3号風鐸出土状況



18-3Tr P2半截状況（東から）

図版12



17-4Tr 完掘状況（西から）



17-8Tr 完掘状況（南東から）

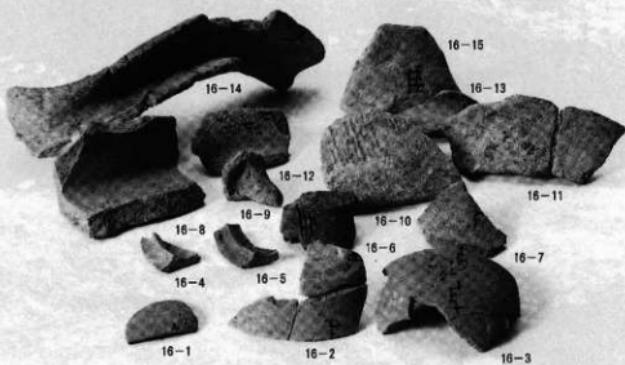


17-2Tr SD03 (南から)

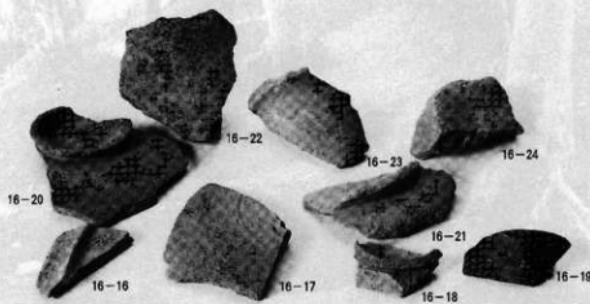


17-5-6Tr 完成状況 (西から)

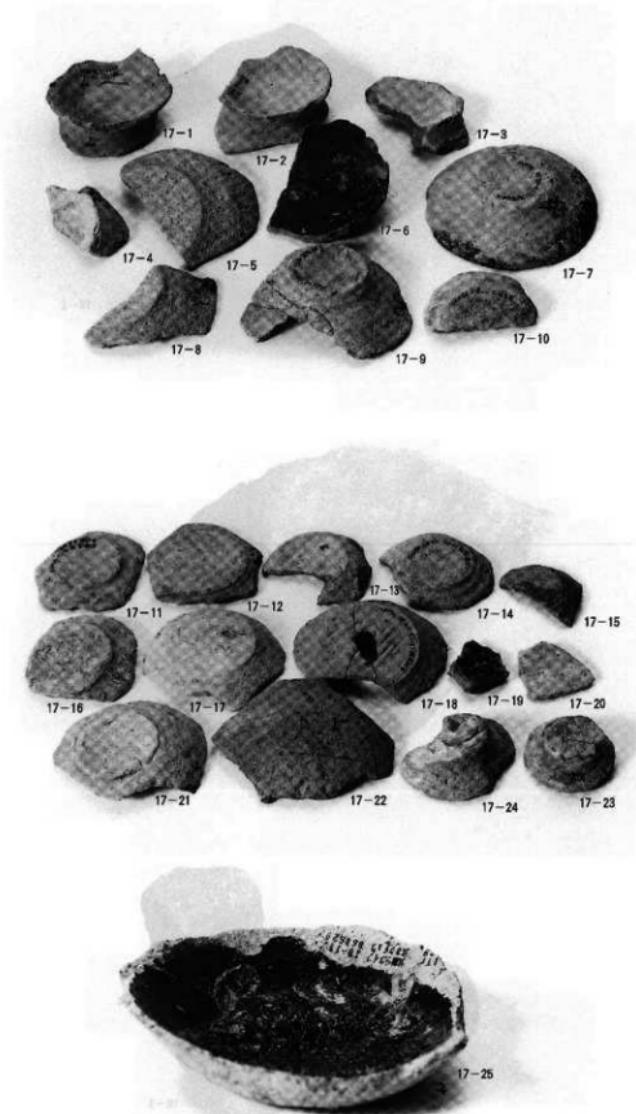
図版14



第1・3基遺出土須恵器・土師器

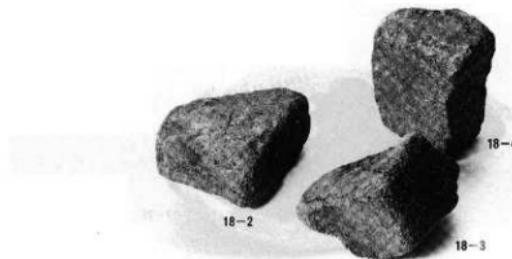


第1・3基遺出土須恵器・土師器



第1基壇出土土器

図版16



第1基壇出土石製品



第3基壇出土石製相輪關係遺物、天蓋

図版18



19-2 上面



19-2 内面

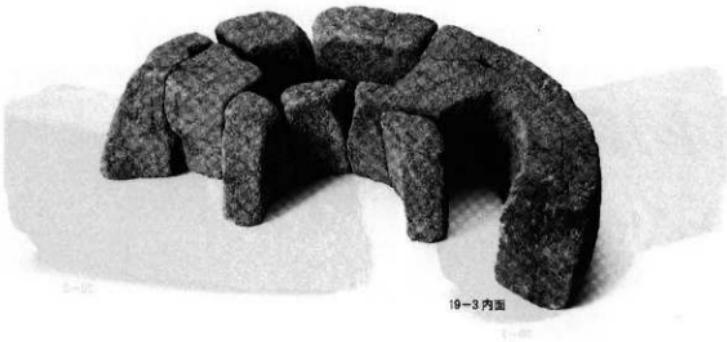


19-2 下面

第3基壇出土石製車輪



19-3 上面



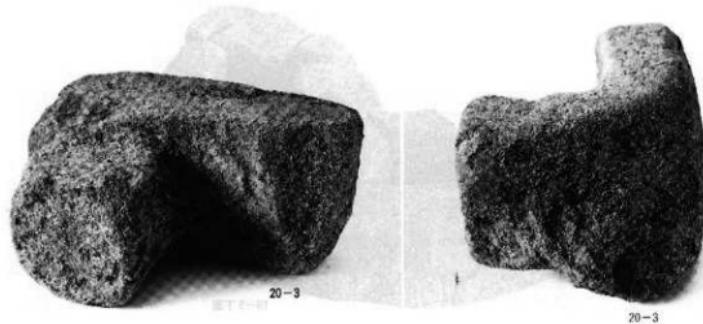
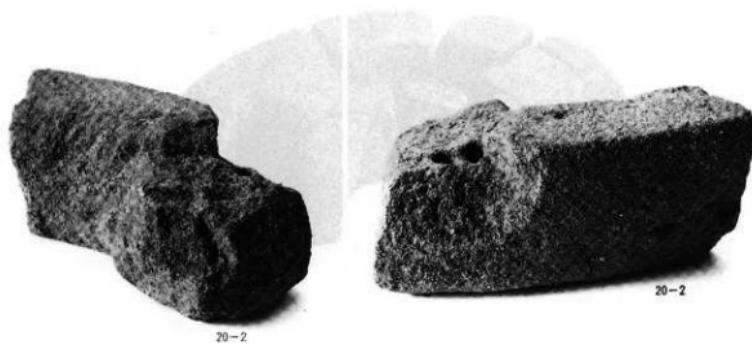
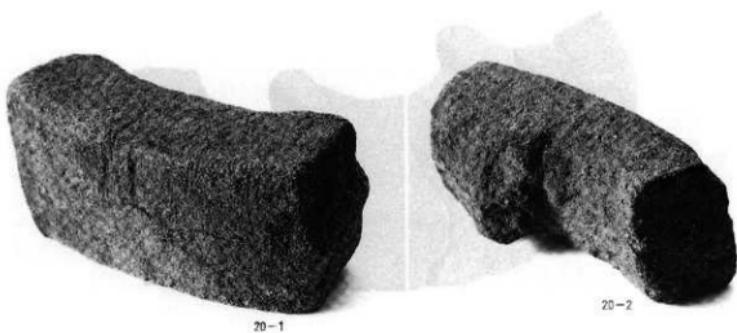
19-3 内面



19-3 下面

第3墓出土石製車輪

図版20



第3 基壇出土石製相輪